

柳橋物語

山本周五郎

青空文庫

前篇

一

青みを帯びた皮の、まだ玉虫色に光っている、活きのいいみごとな秋鮎あきあじだった。皮をひき三枚におろして、塩で緊めて、そぎ身に作って、鉢に盛った上から針しようがを散らして、酢をかけた。……見るまに肉がちりちりと縮んでゆくようだ、心はずむように楽しい、つまには、青じそを刻もうか、それとも蓼酢たえずを作ろうか、歌うような気持でそんなことを考えていると、店のほうから人のななし声が聞えて来た。

「いったいいつまでにやればいいんだ」

「無理だろうが明日のひるまでに頼みたいんだ」

「そいつはむつかしいや、明日までというのがまだ此処ここにこれだけあるんだから、まずできないう相談だよ」

「そうだろうけれど、どうしても爺さんの手で研いで貰いたいんだ、そいつを持って旅に出るんだから」

「旅へ出るって」源六のびっくりしたような声が聞えた、「……おまえが旅へ出るのかい」
「だから頼むのさ、爺さんに研ぎこんで置いて貰えば安心だからな、無理だろうけれどそれでやって来たんだよ」

庄吉の声だった。おせんは胸がどきつとした、庄さんが旅に出る、出仕事だろうかそれとも、そう思つてわれにもなく耳を澄ました。

「そうかい」と源六が返辞をするまでにはかなりの間があつた、「……じゃいいよ、やつておくから置いてゆきな」

「済まない、恩きに衣きるよ爺さん」

そしてその声の主は店を出た。おせんがその足音を耳で追うと、それが忍びやかに、け

れどすばやくこの勝手口へ近づいて来た。おせんはその腰高障子をそつと明けた、庄吉が追われてでもいるような身ぶりですつと寄つて来た。血のけのひいた顔に、両の眼が怖いような光を帯びておせんを見た、彼は唇を舐めながら囁くように云つた。

「これから柳河岸へいつて待つているよ、大事なはなしがあるんだ、おせんちゃん、来て呉れるかい」

「ええ」おせんは夢中で頷いた「……ええいくわ」

「大川端のほうだからね、きつとだよ」

そう念を押すとすぐ庄吉は去つていった。おせんは誰かに見られはしなかつたかと、……どうしてそんなことが気になるのかは意識せずに、……横丁の左右を見まわした。向う側にはかもし屋に女客がいるきりで、貸本屋も糸屋も乾物屋もひっそりとしているし、主婦がおしゃべりでいつも人の絶えない山崎屋という飛脚屋の店も、珍しくがらんとして猫が寝ているばかりだった。障子を閉めたおせんは、箆にあげてある青じそを取つて、姐まない板たの上に一枚ずつ重ねて、庖丁ほうちようをとりあげたまま暫くそこに立ち竦すくんでいた。なんと云つて家を出よう。そんなことは初めてなので、怖いようでもあるし、お祖父じいさんに嘘を云うことが辛かつた。けれども頭のなかでは庄吉の蒼あおざめた顔や、思い詰めたようなう

わずつた眼や、旅に出るといふ言葉などが、くるくると渦を巻くように明滅し、彼女の心をはげしくせきたてた。……そうだ、おせんは俎板の上の青じそを見てふと気づいた。柳や原なぎわら堤とてへいつも出るはしり物屋がある、このあいだ通りかかったら独活うどがあつた、あれを買つて来てつまにしよう、駆けてゆけば庄吉の話を聞くひまくらいはあるだろう、おせんは前垂で手を拭きながら台所からあがつた。

「お祖父さん、ちよつといつて鰻のつまにする物を買つて来ますよ」

「鰻のつまだつて」源六は砥石とから眼をあげずに云つた、「……つまなんか有合せで結構だぜ、あんまり気取られると膳ぜんが高くなつていかねえ」

「それほど物じやありませんよ、すぐ帰つて来ますからね」

そしてなおなにか呼びかけられるのを恐れるように、店の脇から出て小走りに通りのほうへ急いでいった。……中通りをまっすぐにつき当ると第六天だいろくてんの社である、柳原へはそこを右へ曲るのだが、おせんは左へ折れ、平右衛門町へいえもんちやうをぬけて大川端へ出た。

隅田川すみだがわは夕潮でいっぱいだった。石垣の八分めまでたぶたぶとあふれるような水からは、かなりつよく潮の香が匂つてきた、初秋の昏くれがたの残照をうけて、川波は冷たくにぶ色にひかり、ひとところだけ明るく雲をうつしていた。竹屋の渡しあたりを川上へいそ

ぐ小舟が見えるほかは、広い川面に珍しく荷足にたりも動かず、鷗かもめの飛ぶようすもなかった。…
…河岸ぞいに急いでゆくと、足音に驚いて小さな蟹かにが幾つも、すばやく石垣の間へ逃げこ
むのがみえる。ついするとそれを踏みつけそうで、おせんははらはらしながら歩いていっ
た。神田川のおち口に近い柳の樹蔭こかげの、もううす暗くなったところに庄吉は立っていた。
柳の樹に肩をもたせて、腕組みをして、どこやら力のぬけたような姿勢で、ぼんやり川波
を見まもっていた。

「有難うよく来て呉れた」

彼はおせんを見ると縫すがりつくような眼をした。

「あたし柳原まで買物をしてゆくつもりで出て来たの、遅くなつては困るし、もし人に
見られるときまりが悪いから……」

「話はすぐ済むよ」庄吉はおせんよりおどおどしていた。ふだんから色の白い顔が、血の
けもないほど蒼くなり、大きく睜みひらいている眼は、不安そうに絶えずあたりを見まわすのだ
つた、「……今朝とうとう幸太こうたと喧嘩けんかをしてみました、おれはがまんして来た、きようま
でずいぶんできないがまんをして来たんだ、けれどもどうせいつかはこうなる。おれか幸
太か、どつちか一人はこの土地を出なくちやあならないんだ、そして幸太が頭とうりよう梁りやうの養

子ときまつたからには、出てゆくのはおれとわかりきっていたんだ」

「でもどうして、どうして喧嘩になんぞなつたの、幸さんとどんなことがあつたの」

「今朝のことなんかたいしたことじゃあない、ただ喧嘩のきつかけがついたというだけで、はつきり云つてしまえば……」庄吉はそう云いかけてふと口を噤んだ、それから臆病そう
な、けれどくいいいるような烈しい眼つきで、おせん顔をじつと見つめた、「……いやそ
れを云うまえに訊きいて置きたいことがあるんだ、おせんちゃん、おれは明日、かみがた上方へ旅
に出るよ」

「……………」

おせんはこくつと生唾をのんだ。

「江戸にいれば頭梁の家で幸太の下風かふうにつくか、とびだしたところで、一生叩き大工で終
るよりほかはない、それより上方へいつて、みっちり稼かせいで、頭梁の株を買うだけの金を
つかんで帰つて来る、知らない土地ならばみえも外聞もなく稼げるし、あつちは諸式がず
つと安いそうだから、早ければ三年、おそくつても五年ぐらいで帰れるだろう、おせんち
ゃん、おまえそれまで待つていて呉れるか」

「待つているつて」

おせんは声がふるえた、「……あたし、庄さん」

「そうなんだ、きょうまで口ではなんにも云わなかったけれど、おれがおせんちゃんをどう思っていたかということはわかっていて呉れた筈だ、おそくとも五年、帰って来れば頭梁の株を買って、きつとおまえを仕合せにしてみせる、おせんちゃん、それまでお嫁にゆかないで待っていて呉れるか」

「待つているわ」おせんはからだじゆうが火のように熱くなった。そして殆んど自分ではなにを云うのかわからずにこう答えた、「……ええ待つているわ、庄さん」

「ああ」庄吉はいっそう蒼くなった。「……有難うおせんちゃん、おかげで江戸を立つにもほりあいがある、そしてその返辞を聞いたから云うが、実は幸太もおせんちゃんを欲しがっているんだ、喧嘩のとは詰りそれなんだ、だからおれがいなくなれば、きつと幸太はおまえに云い寄るだろう、そいつは今から眼に見えている、だがおれはこれっぽっちも心配なんかしやあしない、おせんちゃんはおれを待っていて呉れるんだ、どんなことがあつても、そう思っていていいな、おせんちゃん」

そのときおせんは譬えたとようもなく複雑な多くの感情を経験した。あとになって考えると、わずか四半刻しはんときばかりのその時間は、彼女の一生の半分にも当るものだった。……おせん

は覚えている、そのときあたりは昏れかけていた。つい向うに見える両国の広小路も、川を隔てた本所ほんじよの河岸も、このあいだまでは水茶屋に灯がはいり、涼み客のざわめきで賑にぎわっていたのに、いまは掛け行燈の光もなく、並んだ茶店はもう女たちも帰ったのだろう、ひっそりと暗く葭簾よしずが巻いてある、もう肌さむいくらいな川風に、柳の枯葉はあわれなほど脆もろく舞い散り、往来の人の忙しげな足どりも、物売のかなしげな呼びごえも、すべてが秋の夕暮のはかなさを思わせるものばかりだった。

庄吉に別れるとそのまま家へ帰った、もう柳原へ行って来るには遅いと思ったから。帰るみちみち、おせんの胸はあふれるような説明しようのない感動でいっぱいだった。それは生れて初めての、あまい、燃えるような胸ぐるしいほどの感動だった。庄吉と逢ったわずかな時間、庄吉から聞かされた短いその言葉、その二つが彼女のなかに眠っていた感情と感覚とをいっぺんによび醒さましたのである。街の家並もたそがれのあわただしい景色も、常と少しも違つてはいないのだが、今のおせんにはびっくりするほど新しくもの珍しいように思え、こんなにしつとりしたいいい町だったのかと見なおすような気持だった、源六はもう灯をいれて、砥石に向っていた。

「おそくなつて済みません」おせんはそう声をかけながら、店へはいろいろとしてふと気が

つき表に掛けてある看板を外した、雨かぜに曝さらされてすっかり古びているが、まん中に御
 研ぎ物、柏かしわ屋源六と書き、その脇へ小さな字で、但し御おん槍やりなぎなた御腰の物はごめ
 んを蒙こっむると書いてある、おせんは看板の表の埃ほこりを払いながらいった、「……このあいだ独
 活があつたのでいって見たのだけれど、きようはあいにくどこにもないのよ、おじいさん、
 かんにして下さいね」

「だから有合せでいいって云つたんだ、つまなんぞどうでも秋鱈くわの酢があればおれは殿様
 だぜ」

「それではすぐお膳にしますからね」そしておせんはもう暗くなつた台所へはいつてい
 た。

二

庄吉はその明くる日、たのんだ研ぎ物を受取りかたがた別れに來た。源六には「三年ば
 かり上方で稼いで來る」と云つただけで精くわしい話はしなかつた。おせんには達者でいるよ
 うにと云い、おもいをこめた眼でじつとみつめながら、まるで泣いているような微笑をう

かべた。そしてその日午後、品川のほうにある親類の家から旅に立つ筈で、茅町かやちようの土地を去っていった。

おせんは四五日ぼんやりと、気ぬけのしたような気持で日を送った。なにかしていてもふと庄吉のことを考えている。蒼ざめた顔や、思いつめたきみの悪いような眼や、おずおずした、けれど真実のこもった囁きささや声などを、繰り返し繰り返し考え耽ふけっているような日が。……その次には旅のかなたが気になりだした。もうどのくらい行つたらう、箱根はぶじに越したろうか、馴れない土地は水にあたり易いという、病みつくようなことはないかしらん、そして、よく人の話に聞く道中の恐ろしい出来事や、思いがけない災難があれこれと想像されて、ぞつと寒くなるようなことも度たびだった。こういうことが半月ほど続いたあと、少しずつ気持がおちついてくるとおせんは庄吉と幸太とのかわり、かれらと自分との繋つながりつなを思い返した。

茅町二丁目の中通りに杉田屋すぎたや巳之吉みのきちという頭梁が住んでいる、家にいる職人だけでも十人ほどあり、多く武家屋敷へ出入りをする名の売れた大工だった。おせんの家は元その隣りで髪結い床をやっていた。父の茂七もしちは彼女が十二のとき死んだが、口の重い、癩かんの強い性質で、あいそというものがまったく無いため、よく知っている者のほかは余り客も来な

かった。また母は病身で月のうち十日は寝たり起きたりのありさまだったから、家の中はいつも、鬱陶しく沈んだ空気に包まれ、いつもどこかに溜息ためいきが聞えるという風だった。

……おせんはごく幼い頃から、一日じゆう杉田屋の家で遊び暮すことが多かった。巳之吉も妻のお蝶ちようも子供が好きなのに、一粒だねの女兒が生れて半年めに死んでしまい、そのあとずつと子が無かったので、おせんがまだ乳ばなれもしないうちから、よく来ては「なんだか膝ひざさびしくつて」などと云つては抱いてゆきゆきした。おせんのほうでもお蝶によく馴ついて、自分の家は狭くしく陰気で、子供ごころにもなにやら息詰るような感じだったが、杉田屋は座敷も広く人も大勢いて賑やかだし、そこにはいつも玩具や菓子等待っていた。着物や帯もずいぶん買つて貰つた、春秋はるあきには白粉おしろいを付け髪を結び、美しく着飾つて、そのころ杉田屋にながくいた定五郎さだごろうという老人の背に負われて、巳之吉夫妻といつしよに花を見にゆき、秋草を見にいった。王子権現おうじごんげんの滝も、谷中やなかの螢ほたる沢さわも、本所の牡丹屋敷ぼたんも、みなそうして知つたのである。

——おせんちゃん、小母さんの子におなりでないか、そのじぶんお蝶はよく頼ずりしながらそう云つた。するとおせんは生まじめな顔になり、いかにも困つたというように首をかしげながら、あたしおつかさんの子でなければおばさんの子になるんだけれど、きまつ

てそういう返辞をしたそうで、そんな幼さに似あわなない、情の籠こもったようすだったと、後になつてからよく聞かされた。

おせんなの九つの年に母が亡なくなつた。そして間もなくお祖父さんが来ていっしょに住むようになつた、源六は父にとつて実の親だったが、気性が合わないため別居し、神田のほうで研屋をしながらずっと独りで暮していた。それが茂七が妻に死なれ、おせんを抱えてもうぜん惘然としてゐるのをみて、自分からすすんでいっしょになつたのである。それまでにも菓子や花はな簪かんざしなどを持つては折おり訪ねて来たので、おせんはよく知つてもいたし母の亡くなつたあとの淋しいときだったから、すぐ源六に馴ついて、夜なども抱かつて寝るようになった。……幸太と庄吉とはその後から知り合つたのだ、幸太は巳之吉の遠い親類すじに当り、十三の春から、杉田屋へ徒弟にはいつた。口のきき方もすることも乱暴な、ひどくはしつこい少年で、来る早々から職人たちと達者に口喧嘩などするという風だった。庄吉は幸太より半年ほどあとから来た、不仕合せな身の上で、両親もきょうだいもなく、品川で漁師をしている遠縁の者が親元になつていた。彼は幸太とは反対にごくおとなしい性分で、おない年とはみえないほど背丈も低く、ひよわそうな女の子のような感じだった。母が亡くなつてからはおせんはあまり杉田屋へゆかなくなつた。お祖父さんが止めるし、

父も好まないようすだったから、ずっとあとになってわかったことだが、杉田屋から養女に貰いたいという話があり、父との間が気まづくなつたのだという、……けれども杉田屋のほうでは別に変つたようすもなく、お蝶が自分でなにか持つて来て呉れたり、幸太や庄吉を使いによこして食事に呼んだり、芝居見物につれだしたりした。

茂七が死ぬとすぐ、源六はおもて通りの店をたたんで、中通りの今の住居へ移つた。もうおせんも十二になつていたし家も離れたので、巳之吉やお蝶とはしだいに疎くなつたが、職人たちは道具を研いで貰うためにしげしげやつて来た。「いちにんまえの大工が自分の道具をひとに研がせて申しわけがあるのかい」源六はいつもそう叱りはしたが、そのあとでは彼らによく職人氣質かたぎというものを話して聞かせた、砥石に向つて仕事をしながら訥とつと々とした調子で古い職人たちの逸話を語るとき、老人はいかにも楽しそうだし聴く者にとつてもおもしろかつた。世間は表裏さだめ難く人生の転変は暫くもうつりやまない。生活はいつも酷薄いささできびしく些かさやくかの仮藉かじやくもない、そのあいだにあつていかに彼らが仕事に対する情熱の純粹さを保つたか、いかに自分の良心の誤りなさを信じたか、老人のしづかに語るそういう数かずの例は、聴く者にとつてただおもしろいだけではなく、そういう人たちのように生きようということ、どんな苦しいことにも負けずに本当の仕事をしようと

いう氣持をよび起こされるのだった。……幸太も庄吉もしばしば来た、幸太は相変らず口が悪くすることも手荒かったが、仕事の腕はもういちにんまえだと云われていた。

「へん腕で来い」そう云つて兄弟子たちにも突つかかることが少なくなかった。芝居を見にゆくと花簪とか役者の紋を染めた手拭とか半衿はんえりなどを買つて来て呉れるが、決しておとなしく渡すようなことはない、そつぽを向いて「ほら取りな」などと云いながら投げてよこすのだった、そのくせおとなしい庄吉よりもおせんには彼のほうが近しい感じで、なにか頼んだりするにはいつも幸太ときまつていたのである。

幸太が杉田屋の養子にきまつたのは、去年の冬のことだった。かなり派手な披露宴があり、源六やおせんも招かれた、十九という年になつても幸太は幸太らしく、巳之吉と親子さかすきの盃をするときには赤くなつて神妙にしていたが、酒宴になるともう窮屈に坐つているのが耐らないらしく、膝を崩して注意されたり、しきりに立ったり、また膳の物を遠慮もなく突つついて叱られたりした。それが十三四の頃のいたずらな彼そのまま、おせんは遠くから眺め乍らなが幾たびもくすくすと笑つた。……そのとき庄吉はひどく蒼い顔をして、元氣のないようすで客の執持とりもちをしていた。おせんは別に氣にもとめなかつたが、暫く経つてから、養子のはなしは幸太と庄吉の二人のうちということで始まり、結局は幸太にきま

つたのだと聞いてから、酒宴のときの庄吉の沈んだようすが思いだされてはげしく同情を唆そそられた。

——庄さんのほうがおとなしくつて人がらなのに、杉田屋さんではどうして庄さんをご養子にしなかつたんでしよう。おせんはそれが不服でもあるように云ったものだ。

——どっちでもたいした違いはないのさ、と源六は笑いもせずに答えた。杉田屋の養子になつたからといってゆくすえ仕合せとはきまらないし、なり損ねたからつて一生うだつがあがらないわけではなからう。運、不運なんというものは死んでみなければ知れないものさ。

元もと温順な庄吉は、それまでと少しも変らず黙つてよく稼いでいた。もう腕も幸太に負けなかつたし、仕事に依つては彼のほうが上をゆくものもあつた。然しおせんにはそれが幸太と張り合つているように、腕をあげることで意地を立てようとしているように見え、いつそう庄吉が孤独な者に思われて哀れだつた。……だがいずれにしても、幸太と比べて庄吉のほうが好きだと考えたことなどはなかつた、幸太のときばきした無遠慮さ、自分を信じきつた強い性格はにくいと思つても不愉快ではない。庄吉の控えめなおとなしき、いづつとなにかをがまんしているというようところはあわれでもあり心を惹ひかれる、

二人とも幼な馴染で、どちらにも違つた意味の近しき親しきをもつていたのだ。

「けれどももうそれもおしまいなんだわ」おせんはあまいようなら悲しい気持でそう呟く、
「……庄さんはあたしの待つていることを信じて上方へいったのだから、違つた人情と雨
かぜのなかで、あたしと二人のために苦勞して稼いで来るのだから、あたしだって庄さん
だけを頼りに待つていなければならぬわ、どんなことがあつても」

おせんは自分の心も感情も、庄吉のことではいっばいだと思ふ。するとそれがさらに彼の
うえを思うさそいとなり、時には胸の切なくなるようなことさえあつた。——もう大阪へ
着いた頃であろう。宿はきまつたかしらん。うまく稼ぎ場の口がみつかるだろうか、もう
手紙くらい来てもいい筈だけれど、そんなことを思いつつ秋を送り、やがて季節は冬には
いつた。

三

霜月はじめの或る日、向うの飛脚屋の店にいる権二郎ごんじろうという若者が、買い物に出たお
せんのを追つて来て手紙を渡した。「杉田屋にいた庄さんから頼まれてね」と、彼は

にやにやしなから云った。

「まあ」おせんはかつと胸が熱くなつた。

「……どこで、この手紙どこで頼まれたの」

「大阪でひよつくりぶつつかつたんだ、そうしたらこれを内証で、おせんに渡して呉れと云われてね、元気でやつているからつてさ」

「そう有難う、済みません」

権二郎はまだなにか云いたそうだったがおせんは逃げるように彼から離れていった。……山崎屋はさして大きくはないがともかく三度飛脚で、大阪の取組先があり若者も五人ばかり使つていた、権二郎はその一人だが、用達ようたしには誰よりも早く、十日限じゅうにちぎり、六日限などという期限つきの飛脚は彼の役ときまつているくらいなのに、酒癖が悪くて時どき失敗し、店を逐われてはまた詫わびを入れて戻るといふ風だった。「どうして庄さんはあんな人に頼んだのかしら」おせんは買い物をして家へ帰るまでそれが気になった、「……また酒にでも酔つて、近所の人にも話されたらどうしよう、そんなことのないようにしては呉れらうけれど、あの人の酒癖を知つていたらよして呉ればよかつた」たぶん遠いところで同じ土地の者に会つたなつかしさと、手紙を内証で渡したさについ頼んだものに違いない。

そう考えたものの、おせんにはなにかよくないことが起こりそうに思え、どうしても不安な気持ちをうち消すことができなかった。

その夜お祖父さんが寝てから、おせんは行燈の火を暗くして手紙を読んだ。それはごく短いものだった。道中なにごともなく大阪へ着いたこと、道修町どしやうまちというところの建具屋へひとまず草鞋わらじをぬぎ、いまその世話で或る普請場へかよっていること、江戸とは違って人情は冷たいが、詰らぬ義理やみえはりがなく、どんなに儉約な暮しでもできることなど簡単に記してあり、終りに「手紙の遣り取りやなどと心がぐらつくから当分は便りをしてない。そちらからも呉れるな」ということが書いてあった。おせんは飽きるまで読み返した。もちろん、仮名ばかりだし、云いたいことの半分も表わせない、もどかしさの感じられる筆つきだったが、読むうちに異郷の空の寒さむとした色がみえ、暗い街筋や橋や、乾いた風の吹きわたる埃ほこり立たった道などが眼にかんだ、そしてそういう風景のなかで、知り人もなく友もない彼が、たつたひとり道具箱を肩にして道をゆき、どこかの暗い部屋の中でひっそりと冷たい食事をする、そういう姿が哀かなしい歌かなにかのように想像されるのであった。

自分では意識しなかったが、その手紙のおせんに与えた印象は決定的だった、突込んで

云えばおせんは顔つきまで変った、庄吉を思うそれまでの感情は、十七になった少女のものでしかなかった、現実と夢とのけじめさえ定かならぬ、ほのかな憧憬あこがれに似てあまやかなものだった。然しその手紙を読み遠い見知らぬ土地と、そこでひたむきに稼いでいる彼の姿を想いやったとき、おせんの感情は情熱のかたちをとりだした、十七歳という年齢はもはや成長して達した頂点ではなく、そこからおんなに繋がる始点というべきものとなったのである。

或る日の午後、杉田屋から源六を呼びに使いが来た、そんなことは絶えてなかったし、用事もはつきりしないので、源六はちよつとゆき渋ったが、追っかけ催促があったのでやむなくでかけていった。……それは夕餉ゆうげのあとだったが、一刻ときほどすると赤い顔をして帰った。

「あらおよばれだつたんですか」

「なにそうでもないんだが」上へあがるとき源六はふらふらした、「……これはひどく酔った」

「たいそうあがったのね、臭いわ」

「水を貰おうかな」

「床がとつてありますから横におなりなさいな」

おせんはお祖父さんを援けて寝かしながら、老人が自分のほうを見ようとしないうちに気づいた。なんとなくおせんの眼を避けているようだった。どうしたのかしら、水を汲くんでゆきながらおせんは微かすかに不安を感じた。

「済まないもう一杯くんな」源六は湯呑の水をたてつづけに三杯もおおった、「……何百ペン云つても酔醒めの水はうまいもんだ、若いじぶんまだ酒の味を覚えはじめた頃だったが、酔醒めの水のうまさを味わうために、まだうまくもない酒を呑んだことさえあつた」「ねえお祖父さん」と、おせんは源六の眼をみつめながら云つた、「……杉田屋さんではなにか御用でもあつたんですか」

「そうなんだ」源六はなにか思案するように、ちよつと間を置いて頷いた、それから仰向けに寝たまま、しずかにこちらへ顔を向けた、「……話というのはな、おせん、正直に云つてしまふが、おまえを嫁に呉れということなんだ」

まあとおせんは打ぶたれでもしたように片手で頬を押えた。源六はそれを見て眉をしかめ、良心の苛か責しやくを受ける者のように眼を伏せた。そして重たげに身を起こし、自分で湯呑に水を注いで喉のどを鳴らしながら飲んだ。

「それで、お祖父さんは、どう返辞をなすつたの」

「おまえには済まないが断わつた」

「……………」

「本当に済まないと思う、杉田屋はあれだけの株だし、幸太はどこに一つ難のない男だ、そればかりじゃあない、杉田屋の御夫婦とおまえとは、乳呑み児のじぶんから馴染だ、おまえはきつと仕合せになるだろう、だがおれにはできなかつた、どうにも頼むと云えなかつた」源六はそこでぐつたりと寢床の上に身を伏せた、「……人間には意地というものがある。貧乏人ほどそいつが強いものだ、なぜかといえ、この世間で貧乏人を支えて呉れるのはそいつだけなんだから、おまえはなにも知らないだろうが、おまえのおつ母^かさんがまだ生きていた頃のことだ、杉田屋のおかみさんが来て、枕もとへ坐つて、おまえを養女に貰いたいと云いだした、そのときお蝶さんはこういうことを云つたそうだ、茂七さんはあんな性質だから、これからさき当てもたいてい知れたものだ、そのうえおまえさんはその病身で、いつどんなことがあるかもわからない、杉田屋へ貰えば着たいものを着せ、喰べたい物を喰べ、観たいものを観せて気楽に育てられる、わが子を仕合せにしたいというのが親の情なら、きつとよろこんでおせんちゃんを養女に呉れる筈だ」

源六はそこまで云つてふと言葉を切った。灰色の薄くなつた髪のはつれたのが、行燈の光をうけてきらきらと顫ふるえている、苦しかった六十七年の風霜を刻みつけたような皺しわの多い日に焦やけた渋色の顔は、そのときの回想の辛さに歪ゆがんだ。

「杉田屋のおかみさんに悪気はなかつたらう、けれども聞くほうにはずいぶん辛い言葉だった、というのは、……おまえのおつ母さんという人は、初め杉田屋の頭梁のところへ嫁にゆく筈だった。けれどおつ母さんは茂七が好きだったので、いったん親たちのきめた縁談を断わつて茂七といつしよになつた」源六はそこでほつと太息といきをついた、「……その頃はうちでも下職したしよくの二人くらいは使っていた。さして余りもしないが不自由な思いをするほどでもなく、好きでいつしよになつた夫婦にはまず頃合の暮しだった、やがて頭梁のところへもお蝶さんが来て、表面は茂七と巳之さんのつきあいも元どおりになつたが、根からさつぱりしたわけではなかつたようだ、そして間もなく茂七に悪い運が向いてきた、下職の一人が剃かみそり刀を使いそくなつて、酔っていたんだな、客の顔に傷をつけてしまった、然もそれがふりの客だつたし、傷はかなり大きかつた。茂七はなんでも町役に呼ばれたり、法外な治療代を取られたりした、くさつていたところへ、こんどは別の下職たんすが筆筒の中の物や少しばかり貯めた金を掠さらつて逃げた……おまえが生れたのはそのじぶんだつたが、も

ともとあまり達者でもなかったおまえのおつ母さんは、お産をしたあとずっと弱くなつて、月のうち半分寝たり起きたりしているようになった、客に傷をさせてから店もさびれだし、だんだん暮しが詰つていった。杉田屋のおかみさんがおまえを抱きに來はじめたのはその頃のことだった、お蝶さんは少しまえに、生れて半年足らずの女の児に死なれていた、けれどもおまえを抱いてゆき、着物や帯を買つたり、玩具や菓子を呉れたりするのは、ただお蝶さんが膝さみしいというだけのことではなかった、こつちの落ち目になつたのを憐れむ^{あわ}巳之さんの氣持がはたらいていたんだ、……おまえのお父っさんやおつ母さんにとつて、それがどんなに辛いことだったかわかるだろう、おつ母さんは巳之さんを断わつて茂七といつしよになつた、そういう因縁のある相手から、落ち目になつて情をかけられるということは、^{わら}嗤われるよりも辛い堪らないものだ、おまえを養女に呉れという相談のとき、お蝶さんの言葉を聞いておまえのおつ母さんはずいぶん、口惜しがって泣いたそうだ」

おせんは胸が詰りそうだった。茂七さんのゆくすえも知れたものどか、おまえさんは病身でいづどうなるかわからないとか、うちへ來れば着たいものを着、喰べたい物を喰べておもしろ可笑しく育てられるとか、……恐らく親切から出た言葉だろう、うちとけた狎^なれた氣持で云つたのではあろうが、貧苦のなかで病んでゐる者にとっては、然も過去にそ

ういう因縁のある者からすると、おせんにも母や父の辛さ口惜しさがよく察しられた。

「あたしが死んだらすぐあとを貰つて下さい。そしてどうかおせんはうちで育てて下さい、杉田屋さんへは、どんなことがあつても遣らないで下さい、おつ母さんはなんどもなんどもそう念を押しした、おれもそれを聞いているんだ、おせん、もうおまえも十七だ、これだけ話せば、おれが縁談を断つた気持もわかつて呉れるだろう」

「わかつてよお祖父さん」おせんは指ゆびさき尖で眼を拭きながら頷いた、「……そんな話を聞かなくつたつて、あたし杉田屋へお嫁になんかいかないわ、だつて」

「ああわかつて呉ればいいんだ、金があつて好き勝手な暮しができたとしても、それで仕合せとはきまらないものだ、人間はどつちにしても苦勞するようにできているんだから」

四

いろいろなことがわかつた。母親が死んだあと、父やお祖父さんが杉田屋へやりたがらなくなつたこと、あんなに親しくしていたのに、杉田屋の小父さんは決してうちへ来なかつたこと、そして父が亡くなるとすぐお祖父さんが店をたたんでこつちへ移転したことな

ど……これらのなかでいちばんおせんの胸にこたえたのは、「……どんなことがあってもおせんを杉田屋へ遣らないように」という母親の言葉だった。お祖父さんはそれを貧しい者の意地だと云ったが、おせんはそうは考えなかった、杉田屋はおつ母さんが嫁に望まれたのを断わった家だ、自分の選ばなかった人に自分の娘を託すことができるだろうか、意地ではなかった、もつと純粋な女の誇りだったというべきである、おせんには母親の気持が手でさぐるようにわかるのだった。

「お父つさんもおつ母さんもずいぶん苦勞したようだ、贅ぜいたく沢たくなどということはいちどもできなかつたかも知れない、でもお互いに好きあつていっしょになったのも、貧乏も苦勞もきつと仕がいがあつたに違いない、お祖父さんの云うとおりもし人間が苦勞するようになれついたものなら、ほんとうに心から好き同志がいっしょになって、互いに、慰めたり励ましたりしながら、つつましく生きてゆける仕合せに越したものはない、おつ母さんが亡くなつて四年目にお父つさんも死んだ、そんなにも好き合つていたんだから、お二人ともきつと満足していらつしやるに違いないわ」

おせんはそれを疑わなかつた、なぜなら、彼女もいま人から愛され、自分もその人を愛していたからである。

外へ出るときには、おせんはきまつて柳河岸を通つた。柳はすっかり裸になり、川水は研いだような光を湛えて、河岸の道にいつも風が吹きわたつていた。おせんはいつとき柳の樹のそばに佇むたたず、それはいつか庄吉が肩を凭せていたあの柳である、すでに何年か昔のようにも思えるし、つい昨日のことのようでもあつた、蒼ざめた庄吉の顔がたそがれの光のなかで顫え、つきつめた烈しいまなざしでこつちを見ていた。激してくる情をじつと抑えながら、あたりを憚るはばかように囁いた言葉の数かず、……庄さん、とおせんは幾たびも口のうちで呼びかけるのだつた、あたしたちもお父さんやお母さんのようにきつといつしよになつて、二人でどんな苦勞にも耐えてゆきましようね、おせんは待つていてよ、庄さんの帰つて来るまでは、どんなことがあつてもきつと待つていてよ。

寒さの厳しい年だつた。師走しわすにはいると昼のうちでも流し元の凍つていることが多く、うっかり野菜などしまい忘れると、ひと晩でばりばりに凍ることが度たびだつた。……杉田屋の幸太がしげしげ店へ来はじめたのは、その頃からのことだ、年が詰つてきたのでほかの職人たちは姿をみせなかつたが、幸太はなにか口実をみつけては訪ねて来た。源六はべつに愛相も云わないし冷淡にあしらうこともなく、求められれば気持よくいつものとおり昔ばなしをした。

「そういう風にまつすぐに生きられればいいな」幸太は話を聞きながらよくそう云った、性質のはつきり現われている線の勁い彼の顔が、そんなときふと思ひ沈むように見えることがあつた。

「……この頃の職人はなつちやあいないよ、爺さん、一日に三刃とる職人が逆目に鉋をか
けて恥ずかしいとも思わない、ひどいになると尺を当てる手間を惜しんで押っ付けて鋸
を使うんだ、そのうえ云いぐさが、そんなくそまじめな仕事をしていたら口が干上つてし
まうぜ、こうなんだ」

「それは今にはじまつたことじゃあないのさ」と源六は穏やかに笑う、「……どんなに結
構な御治世だつて、良い仕事をする人間はそうたくさんいるもんじゃあない、たいていは
いま幸さんの云つたような者ばかりなんだ、それで済んでゆくんだからな、けれどもどこ
かにほんとうに良い仕事をする人間はいるんだ、いつの世にも、どこかにそういう人間が
いて、見えないところで、世の中の楔くさびになつている、それでいいんだよ、たとえば三十年
ばかりまえのことだつたが……」

こうしてまた昔語りが始まるのだつた。

幸太が来ているとき、おせんはなるべく店へ出ないようにした。偶たまに顔が合うと、幸太

はきまつて眼で笑いかけた。粗暴な向う気の強い彼には珍しく、おとなしいというよりはなにか乞い求めるような表情だった。あの人はなにか考えているのだろう、お祖父さんがはつきり断わったというのに、まだあたしのことをなんとか思っているのかしら、……おせんは彼のそういう眼つきが不愉快で、いつもすげなく顔をそむけ、さっさと台所のほうへ去つて来るのだが、幸太はそれで気を悪くするようすもなく、殆んど三日にあげずやつて来ては話しこんでいった。

おせんはその前の年の春から、午ひるまえだけお針の稽古にかよつていた。そこは大通りを越した福井町ふくいちちょうの裏にあり、お師匠さんはよねという五十あまりの後家で、教えるのは嫁入り前の娘にかぎられていた。おせんは無口でもあり、家も貧しかったから、そこではかくべつ親しくする者もなかった。出入りの挨拶をするほかは世間ばなしにも加わらず、たいてい隅のほうに独りで坐つていた。娘たちもしいて馴染もうとはしなかったが、そのなかで天王町てんのうちょうのほうから来るおもんという娘だけは、しきりにおせんに近づきたがった。家は油屋だそうで、年は同じ十七だった、丸顔の色は黒かったが、眼と唇のいつも笑つてゐるような、明るい人なつっこい性質である。……その月の半ばも過ぎた或る日、稽古をしまつて帰ろうとすると、おもんが追つて来てそこまでいっしょにゆこうと云つた。

「だって道がまるで違うじゃないの」

「いいのよまわり道をするから」おもんは肩をすり寄せるようにした、「……ちよつとあなたに話があるの」

おせんは身を離すようにして相手を見た、おもんはなにか気がかりなことでもあるように、じつとこちらを見かえしながら「あんた杉田屋の幸太さんという人を知っていて」と云いだした。おせんは思いがけない人の名が出たので、なにを云われるかとちよつと不安になった。

「知っていてよ、それがどうかしたの」

「あんたがその人のお嫁さんになるのだから、みんながその噂うわさばかりしているのだけれど」「嘘だわそんなこと」おせんは相手がびつくりするような強い調子で云った、「……誰が云ったか知らないけれどそんなこと嘘よ、根も葉もないことだわおもんちゃん」

「でも幸太さんという人は毎日あんたの家うちへ入り浸りになっているというのよ、そしてつとひどいことを……あたしの口では云えないようなことさえ噂うわさになっていてよ」

「いったい誰が」おせんはからだを震えてきた、「……そんなひどいことを、いったい誰が云いだしたの」

「元は知らないけど、あんたの家の前にいる人が見ていたっていうことだわ、でも嘘だわねえおせんちゃん、あたしはそんなこと嘘だと思つたわ、おせんちゃんに限つてそんなことがある筈はないんですもの、あたしだけは信じていてよ」

飛脚屋の者から出た噂だ、おせんはすぐにそう思った。山崎屋の主婦はおしゃべりで、いつも店先には近所のおかみさんや暇な男たちが集まる、お祖父さんがそれを嫌つてつきあわないため、常づねずいぶん意地の悪いことをされてきた、その店からは斜^{はす}かいにこちらが見えるので、幸太が話しに来るのをいつも見ていたのに違いない。そしてもしかすると、杉田屋から縁談のあつたことも知つているのかもしれない。……おもんに別れて家へ帰ると、彼女はすぐお祖父さんにその話をした。そしてこれからもう幸太の来ないようにはつきり断わつて貰いたいとのんだ。

「人の口に戸は立てられないというのはつまりこういうことなのさ」源六は研いでいた剃刀の刃を、^{おやゆび}拇指の腹で当つてみながらそう云つた、「……どんなに身を慎んでも、悪口の立つときは立つものだ、幸さんが来なくなれば来なくなつたでまた悪口の種になる、そんなことは気にしないでうつちやつとくがいいんだ、一年も経てばしぜんとわかつてくる

「よ」

「おじいさんはそれでいいだろうけれど、あたしそんな噂をされるのは厭いやよ」いつにも似ずおせんは烈しくかぶりを振った、「……ほかの悪口とは違うんですもの、こんなことが弘まつたらあたし恥ずかしくつて外へも出られやあしないわ」

「いいよいいよ、そんなに厭ならそのうち折をみて断わるよ、いきなり来るなども云えないからな、まあもう少し眼をつぶっていな」

然しそれから数日して、赤穂浪士の吉良家討入という出来事が起こり、どこもかしこもその評判でもちきつたまま年が暮れた。

正月には度たび杉田屋から迎えがあつた。けれど縁談を断わつたあとでもあり、これからのこともあるので、源六もおせんもゆかずにいると、四日の夕方になって幸太が松造まつぞうという職人といつしよに、酒肴さけかなの遣い物を届けに来た。義理にもそのままは帰せなかつた、上へあげて膳ぜん拵ごしらえをすると、もう少し呑んでいるらしい幸太は、源六と差向いになつて盃を取つた。ほかの日ではないので、おせんも爛徳利かんどくりを持つて膳のそばに坐り、浮かない気持で二人に酌をした。……幸太はしきりに思い出ばなしをした、杉田屋へはじめて住込んだ頃から、十五六じぶんまでのことを、おせんなどすっかり忘れていて、云われてびつくりするようなことも多かつた。このあいだにかなり盃を重ねて酔つたのだろう、源

六はふと調子を改めてこう云いだした。

「なあ幸さん、こんな時に云いだすことじやあないが、いつか頭梁からおせんのことについて話があつたとき、わけを云つて断つたのはおまえさんもたぶん知っているだろう、無いまえならいいが、あんなことがあつたあとではお互いに気まずくつていけない、済まないがこれからはあまり来て呉れないようにたのみたいんだがな」

「悲しいことを聞くなあ」幸太も酔つていたらしいが、ぎくつとしたようすで坐り直した、「……断わられたのは知っているよ、まだおせんちゃんが若すぎるということ、爺さんがおせんちゃんにかかる積りだからということ、ああたしかに聞いているよ、けれども、それは、……それは、それとこれとは違うんだ」

「どう違うと云うんだね」

「おれは十三で杉田屋へ来た、おせんちゃんとはそのときからの馴染なんだ、爺さんだつて、今さらのつきあいじやあない、なにも縁談が纏まとまらなかつたからつて、つきあいまで断わるということはないと思う、そいつは、あんまりだぜ爺さん」

「つきあいを断わるなんということじやないのさ、なにしろこっちはこの老ぼれと娘だけの暮しだ、そこへ若頭梁がしげしげ来るといふのは人眼につくし、ひよんな噂でも立つと

杉田屋さんへおれが申しわけがないからな」

「ひよんな噂か……」幸太はぐらつと頭を垂れた、「……そうだ噂なんか構わないとは、おれに云えることじゃあない、世間なんてものは、平気で人を生かしても殺してもするからな、わかつたよ爺さん」

「悪くとつて呉れちやあ困るぜ幸さん、おまえだつて杉田屋の名跡みょうせきを継ぐ大事なからだ、嫁でも取つて身が固まつたら、また元どおり来て貰いたいんだ、ゆくさきおせんのためにも、ちからになつて呉れるのは幸さんだからな」

「遠のくよ、爺さん」幸太は頭を垂れたまま独り言のように云つた、「……悪い噂なんぞ立つちやあ済まないからな」

「それでいいんだ、そこでまあ一杯いこう、おせん酒が冷えているぜ」

なんとというしつこしのない幸さんだろう、おせんはこの問答を聞いて齒痒はがゆくなった。もつとてきばきした男だつた。向つ気の強い代りにはわかりも早く、諄くどいところなどは薬ほどもない人だつたのに、「……どうかしているんだわ」酒の爛うらを直しながら、おせんは苛いらいらしい気持でそう呟いた。……幸太はそれから半刻あまりして帰つた、ひどく酔つて、草履はを穿くのに足がきまらないくらいだつた。彼が外へ出て二三間いったとき、

「おや若頭梁じゃありませんか」という声が出た、「……たいそういいきげんで御妾しやう宅たくのお帰りですか、偶にはあやからして呉れてもようござんすぜ」

「聞いた風なことを云うな、誰だ」幸太の高ごえが更けた横丁に大きく反響した、「……なんだ権二郎か、つまらねえ顔をしてこんなところになんだって突っ立ってるんだ、呑みたければ呑ましてやるからいつしよに來な」

「そうくるだろうと待つてました、ひとつ北へでもお供をしようじゃありませんか」

「うわごとを云うな、來いというのは大川端だ、おまえなんぞは隅田川の水が柄相応だぜ、たつぷり呑ませてやるからいついて來な」

「若頭梁は口が悪くつていけねえ」

話しごえはそのまま遠のいていった。おせんは雨戸を閉めようとしてこれだけのやりとりを聞いたが、権二郎という名とその卑しげな声とが、いつまでも耳について離れなかつた。

五

酔つてした約束なのでどうかと思つていたが、幸太はそれから遠のきはじめ、たまに來てもちよつと立ち話をするくらいで、すぐに歸つてゆくようになった。

二月になつて赤穂浪士たちに切腹の沙汰があつた。去年からひき続いての評判が、もういちど、江戸の街まちまち巷をわきたたせ、春の終るころまで瓦版や、絵入りの小冊子類こざつしがいろいろと出た。おせんもその二三種を買い、仮名を拾いながら読んでみたが、どれもこれも公儀を憚はばかつて時代や人名を変えてあるし、まるつきり作りごとのようので、心をうつものは無かつた。……こうして夏になつた、六月はじめの或る日、お針の稽古を終つて歸つて來ると、源六が昼食ちゆうじきのしたくをして待つていた。

「さつき状がまわつて來て、きよう茶屋町ちややまちの伊賀屋いがやでなかまの寄合があるというんだ、飯をたべたらちよつといつて來るからな」

「歸りはおそくなるんですか」

「ながくつたつて昏れるまでには歸れるだろう、台所に泥鰯どじょうが買つてあるから、晩飯にはあれで味噌汁を拵えておいて呉んな」

「あら泥鰯があつたんですか、それじゃあお酒も買つておきましようね」

「酒は寄合で出るだろうが」

「でも初ものだから無くっては淋しいでしょう」

話しながら食事を終ると、源六は着替えをして出ていった。久しぶりで店があいたので、おせんは一刻もかかって掃除をし、床板の隅すみまで丹念に拭きあげた。それから酒を買って来て、火をおこし、笹がき牛蒡を作って泥鰌を鍋に入れ、酒で酔わせて、味噌汁にしかけてから、坐って縫物をとりひろげた。……昼のうちは風があつて凌ぎよかったが、日の傾きだす頃からぱったりと風がおち、昏れかかると共にひどく蒸しはじめた。

「お祖父さんのおそいこと」手許が暗くなりだしたので、おせんはそう呟きながら縫物を片づけ、膳立てをするために立った。汁のかげんはちようどよかった、いちど下ろして、爛をする湯を掛け、漬物を出した。もう帰りそうなものだと思いながら、足音のするたびに勝手口の簾を透かして見た、然しすっかり昏れて行燈の火をいれても源六の帰るようすはなかった、「……どうかしたのかしら、少しおそすぎるわね」すっかり支度のできた膳を前にして、おせんはふと、もの淋しい気持におそわれた。……大川端の茶店には、もう涼み客が出はじめたのであろう、時どき三味線の音や、人のざわめきが遠く聞えてくる、そのもの音の遠さと賑やかさは、まるで過去からの呼びごえのように遙か、夏の宵の侘しさをいつそう際だてるように思えた。

「そこだそこだ、その障子の立ててある家がそうだ」

とつぜん表のほうでそういう声があった。

「……いま明けるからそのまま入れよう、しずかにしずかに」

そして誰かが店の障子を明けた。おせんは不吉な予感にぎよつとしながら立った。入つて来たのは同じ研屋なかまの久造きゅうぞうという人だった。おせんの眼はその人よりも、そのうしろに四五人の男たちが、蔽おほいを掛けた戸板を担いでいるのを見た、そして思わずあつと叫びごえをあげた。

「騒いじやあいかねえおせんちゃん」久造は両手で彼女を押えるようにした、「……たいしたことはないんだ、ちつとばかり酒が過ぎて立ちくらみがしたただけなんだ、もう医者にもみせたしなにしてあるんだから、心配しないでとにかく先ず寝床をとって呉んな」

おせんは返辞もできず、なかば、夢中ですぐに寝床を敷いた。久造が指図をして、男たちは上まで戸板を昇かっぎあげ、まるで意識のない源六を床の上へ寝かした。……久造はその枕許へ坐つたがおちつかぬようすで、汗を拭き拭き始終を語つた、源六は寄合の席へ来たときから顔色が悪かつた、酒が出てからもどこやら沈んだようすをしているので、たぶん暑あ気に中あたつたのだから熱爛で一杯やるがいいとすすめ、自分でもその気になって呑み

だした。それから少し元気が出て、みんなと話しながらかなり呑んだが、やがて手洗いに立とうとしていきなりどしんと倒れてしまった。

「そう巖丈なからだ軀でもないので、人間の倒れる音というものは大きなもので、階下したからもびつくりして人が駆け上つて来たくらいだ、みんなで呼び起こしたが、大きないびき軀をかくばかりで返辞がない、とにかく頭を冷やしながら医者に来て貰った」久造はそこでまた忙しげに汗を拭いた、「……医者はいろいろ診たが、ごく軽い卒中だから案ずることはない、じつとして静かに寝ていればすぐ治るだろう、こう云つて薬を置いて帰った、そういうわけなんだから決して心配することはない、わかつたなおせんちゃん、決してよけいな心配はしなさんなよ」

おせんは乾いてくる唇を舐め舐め、黙つて頷きながら聞いていた。そして彼らが薬を置いて去るときも、

「色いろおせわさまでした」

と云うだけが精いっぱいだった。……源六は微かすかに軀をかきながら眠っていた、そつと置いて置くようにと云われたので、呼び起こしたいのをがまんしながら、おせんはじつと枕許に坐っていた。ほんとうに病気は軽いのだろうか、もしやこのままになってしまうので

はななかりうか、たとえ死ななくても、卒中といえは寝たきりになることが多いという、そんなことになったらどうしよう、どうして暮していったらいいだろうか。幾たび考えても同じことを、おせんは繰り返し考え続けるのだった。然しやがて食事をしていないことに気づき、朝まで寝られないのだからと、しずかに立って膳に向つてみた。もちろん喰べられはしなかった。鍋の蓋をとつて、泥鰌汁を掬すくおうとすると、昼間の元気なお祖父さんの姿が思いだされ、胸がいつぱいになつてとうとう泣きだしてしまつた。

明くる日は朝から見舞い客が来た。食事拵えや茶の接待は近所の人びとがして呉れた、そのなかでも、すぐ裏にいる魚屋のおらくという女房がいちばん手まめで、まるで自分の家のことのように気をいれて働いて呉れた。夜どおし寝なかつたおせんは、午すぎになるとさすがに疲れが出た、みんなもすすめるし自分でも堪らなくなつたので、隅のほうへ夜具を敷いて横になつたが、すぐに熟睡して眼がさめたときはもう昏れかけていた。

「眼がおさめかい」膳拵えをしていたおらくが、立ちながらそう云つた、「……つい今しがたおもんさんという娘が見舞いに来て呉れたけれど、あんまりよく眠つておいでだから帰つて貰いましたよ」

「おもんちゃんが、どこで聞いたのかしら」

「また明日来ますとさ、それから晩の支度はここにできているからね、お湯もすぐ沸くからおあがんなさいよ、あたしはちよつと家のほうを片づけて来ますからね」

そう云つておらくは帰つていった。

空腹ではあつたが食欲はなかつた、ほんのまねごとのように箸を取つただけで、あと片づけをしていると杉田屋からお蝶が来た。こつちへ越して来てから数えるほどしか会っていない、ずいぶん久しぶりだったし、こころ淋しいときだったので、とびついてゆきたいほど懐かしかった。けれども、すぐにお祖父さんから聞いた話を思いだし、つとめてあたりまえなさりげない挨拶をした。お蝶のほうでも縁談のことなどが胸に悶つかえているのだろう、昔ほどには親しいようすをみせず、ほんの暫しばらくくいたきりで、見舞いの包を置いて帰つた。……おらくは夕食を済ませてもういちど来たが、客もなし用事もみつからないので、茶を一杯すすると間もなく去り、おせんはようやく一人になった。

源六の容態は少しも変らなかつた。意識がないので薬の飲ませようもなくてただ濡れ手拭で頭を冷やすほかにはなにも手当のしようがなかつた。午後から熟睡したので、幾らか気持はおちついてきたが、一人になつて、昏こんこん々と眠つているお祖父さんの顔を見ると、かなしさ心ぼそさが犇ひしひしと胸をしめつけ、身もだえをしたいほど息苦しくなつた。

「庄さん」おせんは小さな声で、西の方を見やりながらそう囁いた、「……あなたはなんにも知らないのね、なんにも、あたしどうしたらいいの、お医者にもかからなければならぬし、薬も買わなければならぬし、これからどうして生きていったらいいのかしら、庄さん、おまえが今ここにいてお呉れだったらねえ」

庄吉はあのように自分を想っていて呉れた。近いところにいたらすぐ駆けつけて、どんなにもちからになつて呉れるだろう、だが大阪では知らせてやることもできず、知らせたところで来て貰うわけにもいかない。おせんにはそれが、自分の運命を暗示するもののように感じられた。自分がふしあわせな生れつきで、これからもだんだん不幸になり、いつも泣いたり苦しんだりしながら、寂しいはかない一生をおくるのだ、そういう風に思えてならなかった。……そうだ。十八になる今日まで、ほんとうに楽しいと思うことが一度でもあつたらうか、いつもしんと病床に寝ていた母、むつつりとふきげんな眼をして溜息ばかりついていた父、客の少ない、がらんとした埃っぽい店、張もなく明日への希望もなく、ただその日その日の窮乏に追われていた生活、父母に死なれて中通りへ移つて来てからも、祖父と二人の暮しは苦しかった、同じ年のよその娘たちが、人形あそびや毬つきまりに興じているとき、おせんは米を洗い釜戸の火を焚いた、朝早くまだ暗いうちに豆腐屋へ走り、雨

に濡れながら、研ぎ物を届けにいった。幼いころ杉田屋でして貰ったきり、着物や帯はもちろん簪かんざしひとつ新しく買ったことはない、然もそんなことを考えるいとまもないほど、時間のないつましい生活を続けて来たのだ。もちろんそのことをそれほど辛いとか苦しいとか考えていたわけではない、そういう日々のなかにも、それはそれなりに楽しみも喜びもあった。人はたいていな環境に順応するものだから、……然しいまふり返って思いなおすと、それがどんなに慰めのない困難な暗いものだったかということがわかるのであった、そして幾ら思いさぐってみても、そこには将来に希望をつなぐことのできる一つの萌芽うがさえみつけることはできない、なにもかもが不幸と悲しみを予告するように思えるのだった。

「庄さん、あんただけがたのみよ」おせんはとり纏るような気持でそう呟いた、「……どうしていいかまだわからないけれど、でもあんたが帰るまでは、どんなにしてもやってゆくわ、だからあんたも忘れないでね、きつとここへ帰って来てね、庄さん」

六

源六はその翌日ようやく意識をとり戻した。四日めには口も大きくようになったが、舌がもつれて言葉がよくわからなかった、眼から絶えず涙がながれ、よだれ涎ですぐ枕が濡れた。医者にはたいしたことはないと言われ、左の半身が殆んど動かさないし、頭のはたらきも鈍っていた。涙や涎は病気のためだろうが、そればかりではなく、源六はおせんを見るにすぐに泣いた、そして舌の硬ばったひどくもつれる言葉でしきりになにか云おうとする、はじめはなにを云うのかわからなかったが、よく気をつけて聞くとおせんを哀れがっているのだった。

「可哀かわいそうにな、おせん可哀そうにな」

「わかつたわお祖父さん」と、おせんは、祖父に笑ってみせた、「……でも大丈夫よ、お祖父さんはすぐ治るの、いつもお医者さまがそう云うのを聞いているでしょう、そんなに心配することはないわ、これまで休みなしに働いてきたんですもの、湯治でもしている積りでのんきに寝ていらつしやるがいいわ、あたしちつとも可哀そうでなんかないんだから」

「ああ、おれにはわかつてるんだ」聞きとりにくい言葉つきで源六はこう云った、「……おせん、おれにはわかつてるんだよ、すっかり眼に見えるようなんだ、可哀そうにな」

云わないで、お祖父さん、おせんはそう叫びたかった、抱きついていっしょにこえかぎ

り泣きたかった、そうすることができたら幾らか胸が軽くなるだろうに、……けれども泣いてはいけなかった、そんなことをしたら、お祖父さんは氣落ちがしてしまって、病氣も悪くなるに違いないから。おせんは笑ってみせなければならぬ、心配そうな顔をしてはいけないかったのだ。

見舞いに來る客も、段だん少なくなり、魚屋の女房のほかは、近所の人たちもあまり顔を見せなくなつた。或る日の午さがり、おらくが來て「きようは桃の湯がたつたからはいつておいでな」とすすめた、いつかもう土用になつていたので、暫く風呂へゆかないで、からだ汗臭かつたし、できたら髪も洗いたかつたので、おらくにあとを頼んでおせんは風呂へいつた。……六月土用の桃葉の湯は、端午の菖蒲湯しょうぶゆ、冬至の柚子湯ゆずゆとともに待たれてゐるものなので、とうてい髪を洗うことなどはできなかつたが、汗をながして出ると身が軽くなつたようにさばさばとした。

「ただいま、おばさん有難う」

そう云いながら勝手口からはいつた、返辞がないので、風呂道具を片づけて覗のぞいてみると、おらくの姿はみえず、源六の枕許には幸太が坐つていた。おせんはどきつとして、立止つた。幸太はしずかにふり返つた。

「近所の人の家から迎えが来てさつき帰っていったよ」彼はなんとなく冷やかな調子でそう云った、「……留守を頼まれたものだからね」

「済みません、有難うございました」

「もつと早く来る積りだったんだが、手放せない仕事があつたもんでね……たいへんだつたな、おせんちゃん」

「ええあんまり思いがけなくつて」

「でもまあお爺さんのほうはもうたいしたことはないようだから、そいつはさほど心配しなくてもいいだろうけれど、このままじゃおせんちゃんが堪らないな、なんとか考えなくつちやあいけないと思うんだが」

「いいえあたしは大丈夫ですよ」おせんは煎^{せん}じ薬のかけんをみながら、かなりきつぱりした口ぶりで云った、「……お祖父さんだつてそんなに手が掛るわけじゃあないし、近所の人たちが、よくみに来て呉れるのですもの、ちつともたいへんでなんかありやあしません」
「それも十日や二十日はいいだろうがね」

幸太はもつとなにか云いたそうだったが、おせんのようにすがあまりきつぱりしているの
で口を噤^{つぶ}み、間もなく見舞いの物を置いて帰っていった。……それをきつかけのように幸

太はまたしばしば来はじめた、「中風によく利く薬があつたから」とか「少しばかりだがこれを喰べさせてやって呉れ」とか云いながら、そして源六に薬を飲ませたり、額の濡れ手拭を絞りなおしたり、時には足をさすつたりした。

「なにか不自由なものがあつたら、遠慮なくそう云つて呉んな」幸太は帰りがけにきまつてこう云つた、「……困るときはお互いさまだ、おれにできることならよろこんでさせて貰うからな、ほんとうに遠慮はいらないんだぜ」

「ええ有難う」

おせんはそう答えるが、伏し眼になつた姿勢はそういう好意を受ける気持のないことを頑かたくななほど表明していた。……そうなのだ、幸太の言葉を聞きながら、おせんは心のうちで庄吉に呼びかけていた。おれがいなくなればきつと幸太は云い寄るだろう、あれもおまえを思っているんだから、そう云い遣していったことが改めて思ひだされた、縁談を断わられてももう来て呉れるなど云われても、こうしてがまん強くやって来るのはあたりまえの好意ではない。そしてなに事もないときならいいが、こういうせつぱ詰つた苦しい場合に、そのように根づよい態度で迫られては、どんな隙へどのようにつけ込まれるかわからない。操を守ろうとするおんなの本能が、そのときはじめておせんをちからづよく立直らせた。

——そうだ、幸太さんに限らず誰の世話にもなつてはいけない、近所の洗濯や使い走りをして、お祖父さんと二人くらいはやつてゆける筈だ、世間にためしのないことではないのだから。

そう決心するときばさばした気持になった。そしてそのつぎに幸太が来たとき、はつきりとけじめをつけた口ぶりだ、これからはもう来て貰つては困ると云つた。それは雨もよりの宵のことで、湿気のある風が軒の風鈴を鳴らし、戸口に垂れてある簾すだれを揺すつて、部屋の中まで吹き入つてきた、源六はこちよさそうに眠つていた。

「そんなにおれが嫌いなのか」幸太は暫く、黙つていたのち、なにか挑みかかるような眼でこつちを見た、「……おれのどこがそんなに気に入らないんだ、おれはおためごかしや恩きに衣せる積りでよけいなおせつかいをするんじゃないやあないぜ、おまえとも爺さんとも幼な馴染だ、ことにおまえとはこんなじぶんから知り合つて、おれにとつては……まったく、他人のような気持はしないんだ、そうでなくつたつて、こんな場合には助け合うのが人情じゃあないか、どうしてそれがいけないんだ、おせんちゃん」

「よくわかつているわ、でも幸さん、あんた覚えていないかしら、お正月あんたが家へ来て帰るとき、表で山崎屋の権二郎さんに会つたでしょう」

「山崎屋の権に、……そうだったかも知れない、だがもうよく覚えていないよ」

「あたしは覚えているわ、そして、一生忘れられないと思うの」おせんはこみあげてくる怒りを押えながらそう云った、「……あのとき権二郎さんは、あんたの顔を見てこう云つてよ、若頭梁わかとうりょういまごろ妾宅のお帰りですかつて」

「冗談じゃあない、あんな酔っぱらいの寝言を、そんなまじめに聞く者があるものか」

「それならよそれでも聞いてごらんさい、世間にはもつとひどいことさえ伝わっているのよ、あんたは男だから、そんな噂もみえの一つかも知れないけれど、おんなのあたしには一生の瑾きずにもなりかねないことよ」

「おれはなんにも知らなかつた」幸太は頭を垂れ、またながいこと黙っていた、それからこんどはまるで精のぬけたような声で、吃り吃りどもこう続けた、「……そんな噂は、まったく聞いたこともない。そして、それがおせんちゃんには、そんなに迷惑だったんだな」

「考えてみて頂戴、これまでもそうだったけれど、こんなになつたお祖父さんを抱えてやってゆくとすれば、これからはよつほど身を慎まないかぎり、どんな情けないことを云われるかわからないじゃないの」

「そいつをきれいにする方法はあるんだ、おせんちゃん、おまえさえその気になって呉れ

れば」

「それはもうはつきりしている筈だわ」

「おれが改めて、おれの口から、たのむと云つても、だめだろうか」幸太の眼は^{いか}忿りを帯びたように鋭く光った、「……おれは本気なんだ。口がへただからうまく云えないが、もしおせんちゃんが望むなら、おれはこれからどんなにでも」

「あたしにこれ以上いやなことを云わせないで、幸さん、それだけをお願いよ、どうぞおせんを、可哀そうだと思つて頂戴」

「おまえを可哀そうだと思つて」とつぜんまったくつぜん幸太は^{あお}蒼くなつた。そして、ふしぎなものでも見るように、まじまじとおせん顔を見つめていたが、やがて^{りっぜん}慄然としたように身を震わせた、「……おせんちゃん、おまえもう誰か、誰かほかに、——ああ そうだったのか」

おせんは頷いた、自分でもびつくりするほどの勇気を以て、しずかに、むしろ誇りに頷いた、そして立つていって、二つの紙包を持って来て、幸太の前へさしだした。それはお蝶と幸太の持つて来た見舞いの金である。菓子や薬はとにかく、金に手をつけてはいけないと思ひ、そのまま納つて置いたものだった。

「ほかの物はうれしく頂きました、でもお金だけは頂けませんから、おばさんにもどうぞ気を悪くなさらないようにと云つて下さいな」

「……あばよ」幸太は二つの包を持って立つた、「あばよ、おせんちゃん」

そして出ていった。

明くる日、おせんは裏の魚屋の女房に来て貰つて、これからなにをしていったらいいかということ相談した。おらくは笑つて、だつてあんたには、杉田屋という後ろ盾がついているじゃあないか、なにもそんな心配をしなくつたつて困るようなことはありやしないよ、と云つた。もちろん悪気などは少しもない女で、ごく単純にそう信じていたものらしい、おせんがあらまし事情を話すとすぐ納得した。

「そうだったのかい、あたしはまた杉田屋さんでなにかもして呉れるんだと思つて安心していたのだよ、それじゃあなんとか考えなくちゃあいけないね」

「どんな苦勞でもするわ、おばさん、あたしよりもっと小さい子だつて、もつともつと辛い気の毒な身の上の人がいるんだもの、十八にもなつたんだから、たいていのことはやつてゆけると思うの」

「そうともさ、人間そう心をきめればずいぶんできない事もやれるものだよ、けれどもな

に^{とつ}ごとも取付が肝心だから、途中でいけなかつたなんていうことになる^{あひはち}と虻蜂とらずだからね、あたしもよく考えてみて、それからもういちど相談しようよ」おらくはこう云つて、そのときは帰つていった、「……なにが野なかの一軒家じゃなし、近所だつて黙つて見ちやあいないからね、決して心配おしでないよ」

七

おせんは足袋のこはぜかがりを始めた。お針の師匠にも話してみたのだが、まだ賃縫いをするには無理だというし、洗濯や使い走りでは幾らのものにもならない。結局おらくの捜^{ひも}してきて呉れたのがその仕事だった。その頃はまだ足袋は多く紐で結んだものだったが、上方のほうで仕出したこはぜが穿^はき脱ぎに手軽なのと穿いたかたちが緊まるのとでその年の春あたりから江戸でも少しづつ用いはじめていた。まだ流行するまでにはなっていないので、仕事の数はそうたくさんはないが、手間賃がかなりよかつたし、家においてできることがなによりだった。足袋は革と木綿と二種あつた。木綿は近年ひろまりだしたもので、穿きぐあいも値段も恰好なのだが、木綿よりは丈夫であり温かいので、一般にはまだ革を

用いることが旺さかんだつた。おせんを受取る仕事も、革のほうがむつかしかつた。なにしろ熊の皮を鞣なめして、型を置いたり染めたりしたもので、針が通りにくく、すぐ指を傷つけたり針を折つたりする。然しそれだけ手間賃も高いから、馴れてくれば革足袋のほうが稼がぎが多くやり甲斐がいがあつた。

七月のなかば頃から源六はぼつぼつ起きはじめた。左の半身はやつぱり不自由で、手も足も、そつちだけは満足に動かせず、舌のもつれもなかなかとれなかつた。十五日の中元には荷葉飯かようめしを炊き、刺し鯖さばを付けるのが習わしである、おせんも久しぶりに庖丁ほうちようを持つて鯖を作り、膳には酒をつけた。医者から量さえ過ぎなければ吞むほうがよいと云われていたので、源六は要心ぶかくなつて、それまで盃を手にしなかつたのである。

「久しいもんだが、はらわたへしみとおるようだ」源六はうつとりと眼を細くしながら云つた、「……ほんとうに毒でなければ、これから少しずつやってみるかな、なんだか身内にぐつと精がつくようだ」

「お医者さまがそう云うんですもの、それはあがるほうがよくてよ」

「だがなにしろこんなからで酒を吞むなんぞは、それこそ罰が当たるといふもんだからな、みんなおまえの苦勞になるんだから」

「いやだわ、また同じことを」

「おまえに礼を云うんじやあない、自分が仕合せだということを云いたいんだ、子にかかる親はざらにあるが、こうして孫にかかれる者は世間にもそうたくさん有るわけじやあない、然もまだ十八やそこの娘になにもかもおつかぶせて、こうして気楽に養生ができるということはたいへんなもんだ、まったくたいへんなもんだ、おれは、そいつが嬉しいんだ」病氣からなみだ脆くなっていた源六は、もうぼろぼろと大きな涙をこぼしていた、「……おれはおまえになんにもしてやらなかった。十三や十四から飯を炊かせたり肴を作らせたり、使い走りをさせたりしたただ、帯ひと筋、いや簪一本買ってやったことがなかった、ところがおまえはむすめの手内職で、おれを医者にもかけ薬も買って呉れる、おれが好きだと思う物は、そう云わなくとも膳へのつけて呉れる、諄いようだが礼を云うんじやあないぜ、おれは、来年はもう六十九だ、この年になって、はじめておれはおんなというものがわかった、おまえのして呉れることを見て、はじめておんなの有難さというものがわかったんだ、男のおれにできないことを、まだ十八のおまえがりっぱにやってのける、それはおまえがおんなだからだ、ああおせん、おれはこれが四十年むかしにわかっていたらと思うよ」

四十年むかしといえはまだ生きていたお祖母さんのことを云うのではなからうか、おせんはお祖母さんのことはなに一つ聞いていない。父も母もそのことはついぞ口にしなかった。そこにはなにか事情があつたに違いない、そして今源六は悔恨にうたれている、どんな事情かわからないけれど、おんなどいうものの有難さをその頃に知っていたら、そう云う言葉の中には、なにかとり返し難い後悔の思いが感じられるのだった。

「人間は調子のいいときは、自分のことしか考えないものだ」源六は涙をながれるままにしてそう続けた、「……自分に不運がまわつてきて、人にも世間にも捨てられ、その日その日の苦勞をするようになる、はじめて他人のことも考え、見るもの聞くものが身にしてみるようになる、だがもうどうしようもない、花は散ってしまったし、水は流れていつてしまったんだ、なに一つとり返しはつきあしない、ばかなもんだ、ほんとうに人間なんてばかなものだ」

「もうたくさんよお祖父さん、そんなに気を疲らせては病気に悪いわ、過ぎたことは過ぎたことじゃないの、それよりこれから先のことを考えましょう、あせらずゆっくり養生すれば、お祖父さんだつてまた仕事ができるようになってよ、二人で稼げば暮しだつて楽になるし、ときにはいっしょに見物あるきだつてできるわ、今年はずれずに染井そめいの菊を見に

いきましようよ」

「ああそうしよう、おせん、見せる見せるといつて、ずいぶん前から約束ばかりしていたからな、そうだ今年こそきつと見にいこう」

けれども菊見にはゆけなかった。悪くはならないが、左半身がいつまでもはつきりせず、とうてい遠あるきなどできなかつたから、……利くという薬はできる限り試してみた、加持も祈禱きとくもして貰った、「夏に出た中風は霜がくれば治るものだ」そう云う人が多いので、おせんも源六もひそかにそれを楽しみにしていたが、霜月がきてもそんなようすはなく、やがて十一月も終りに近くなつた。

その月は二十二日の夜にひどい地震があつて、小田原から房州へかけてかなり被害があり、江戸でも家や土蔵が倒れたり崖がけが崩れたりした。深川の三十三間堂が倒壊し、大川は一夜に四たびも潮がさしひきした。地震は二十五日まで繰り返して揺つたが、二十六日に雨が降つてようやく歇やむと、安房あわや上総かずさでは津浪があつて十万人死んだとか、小田原がいちばん激震で何千人いっぺんに潰つぶされたとか、色いろ恐ろしい噂が次から次へとひろまりだした。……こうして二十九日になつた夜、四五日つめてした仕事がようやく片付いたので、おせんは珍しく宵のうちに寢床へはいつた。地震の恐ろしさが解けたのと、仕事の疲れが

出たのであろう、床にはいるとすぐ、なにも知らずにぐっすり熟睡した。あんまりよく眠ったせいだろう、それほど更けたとも思えない頃にふと眼がさめた。そして眼のさめたときの習慣で、お祖父さんのほうへふり向いた。するとそこには枕紙が白く浮いて見えるだけで、夜具の中にはお祖父さんがいなかった。

おせんは身を起こした、たぶん後架だろうと考え、そちらへ耳を澄ましていると、戸外のひどい風の音に気がついた、いつ吹きはじめたものかひじょうな烈風で、露次ぐちにある棗なつめの枯枝ひさしや庇はりさがひようひようとうめき、地震でゆるんだ雨戸や障子はもちろん、柱や梁はりまでがみじめなほどきいきいと悲鳴をあげていた。そのうちにおせんは、店のほうに灯あかりが揺れているのに気づいた、なぜともなくどきつとして、寝衣ねまきの衿えりをかき合せながら立つてみると、被おおいをかけた行燈のそばに、源六が前まえ躰かたみになって、しきりになにかしていた。火桶ひおけもなし、隙間から吹きこんで来る風で、板敷の店は凍るほど寒いに違いない。驚かしてはいけないと医者にきびしく注意されているので、おせんは、そつと近よつていった。……源六は庖丁を研いでいた。不自由なからだでどうしたものか、研ぎ台も水みづ盥たらもちやんと揃そろえてあった。蒲がまで編んだ敷物にきちんと坐つて、きわめてたどたどしい手つきで庖丁を研いでいる。然しそれはひじょうな努力を要するのだろう。鬢びんか

ら頬にかけて汗が幾すじも糸を描いていた。

治りたいのだ、薬も祈祷も験がない、だがどうかして治りたい一心から、せめて仕事で馴らしたらと考えたのではなからうか、それともあまりながびくのが不安で自分をためすために砥石に向つてみたのだろうか、どちらにしてもこの寒夜に独り起きて汗をながしながらひっそりと研ぎものをしている、そのたどたどしい、けれどけんめいな姿は、哀れともいたましいとも云いようがなく、おせんは堪りかねてお祖父さんと叫び、その腕へとすりついたまま泣きだしてしまった。

「泣くことはないじゃないかおせん」源六は穏やかに笑いながら孫の背へ手をやった、

「……風が耳について、眠れないから、ちよつといたずらをしてみただけだよ」

「わかつてるわお祖父さん、でもあせつちやあだめよ、ずいぶん焦れたいと思うわ、辛いこともよくわかるわ、でもこの病気はあせるのがいちばん悪いの、がまんして頂戴お祖父さん、もう少しの辛抱だわ」

「そういうことじゃないんだ、おれは決してあせつたり焦れたりしやあしない、ただどうにも、どうにも砥石がいじりたくつてしようがなかった、鹿礪石のざらりとした肌理、真礪、青礪のなめらかな当り、刃物と石の互いに吸いつくようなしつとりした味が、なん

だかもう思いだせなくなつたようで、心ぼそくつてしようがなかつたんだ」

「よくわかつてよお祖父さん」おせんはそこにあつた手拭で源六の濡れた手を拭いてやつた、「……でもがまんしてね、これまで辛抱してきたんですもの、もう少しだから、なんにも考えないでのんきに養生をしましょう、もうすぐよくなるわ、来年はとしまわりがいんだから、なにかもきつとよくなつてよ、ほんとうにもう少しの辛抱よ、お祖父さん」

「ああそうするよ、おせん、おまえに心配させちゃあ済まないからな」

さあ寝ましよう云つて、おせんが援け起こそうとしたとき、源六はふと顔をあげて、

「半鐘が鳴っているんじゃないか」

と云つた。おせんも耳を傾けた。たしかに、暴^ああらしく吹きたける風に乗つて、微かに遠く半鐘の音が聞えている。然もそれが三つばんだつた。

「近いようじゃないか」

「ちよつと出て見るわ」

おせんはひき返して、着物を上からはおり、雨戸を明けて覗いてみた、凜^{りん}寒^{かん}と冴^さえわつた星空のかなたに、かなり近く赤あかと火がみえた。おそらく本郷台^{ほんごうだい}であろう、煙が烈風に吹き払われるのでかりは立つていないが、研ぎだしの金梨地^{きんなしじ}のようなこまか

い火の粉が、条をなして駿河台するがだいのほうへ靡なびいていた、おせんは舌が硬ばり、かちかちと歯の鳴るのを止めることができなかつた。

「……大丈夫よお祖父さん、高いところだからたぶん本郷でしょう、風が東へ寄っているので、火は駿河台のほうへ向いているわ」

「地震のあとで火事か、今年の暮は困る人がまたたくさん出ることだろう」源六はゆらゆらと頭を振った、「……さあ、風邪をひかないうちに寝るとしよう」

八

横にはなつたが眠れなかつた。風はますます強くなるようすで、雨戸へばらばらと砂粒を叩きつけ、ともすると吹き外してしまいそうになった。そのうちに表で人の話しごえが聞えはじめた、

「下谷したやへまわるぜ」とか「ああととうとう駿河台へ飛んだ」とか「いま焼けているのは明神様じゃあないか」などという言葉が、風にひきち切られてとぎれとぎれに聞えてくる。

「また大きくなるんじゃないかしら」

おせんが眼をつむつたままそう云つた。源六はそれには答えず、やや暫くして、

「風が變つたな」と独り言のように呺つぶやいた。裏の魚屋の女房が来たのはそれから間もなくだった、表の戸を叩きながら呼ぶので、おせんが着物をはおつて起きていった。

「のんきだねえおせんちゃん寝ていたのかえ」とおらくはまだ明けない戸の向うで云つた、

「……火が下谷へ飛んでこつちが風下になつたよ、出てごらん大変だから」

「さつき見たんだけれど」

おせんはそう云いながら雨戸を明けた。すると、いきなりぱつと赤い大きな火の色が眼へとびこんだ、こつちが見たというより、火明りのほうでとびこんだという感じだった。向うの家並はまつ暗で、その屋根の上はいちめんまぶに赤く、眩まぶしいほど空いひろっぱいに弘ひろがっていた。

「……まあずいぶんひろがつたわね」

「そんなこともないだろうけど、手まわりの物だけでも包んで置くほうがいいね、うちでもとにかくひと片付けしたところだよ、なにしろここにはお祖父さんがいるんだから」

「どうも有難う、そうするわおばさん」

「いざとなつたらお祖父さんはうちが負おふつてゆかあね、それは心配はいらないからね」

おらくが去るとすぐ、おせんは手早く着替えをし、すぐ要いる物を集めて包を拵こえた。江戸には火事が多いので、ふだんから心の用意はできている、荷物はできるだけ少なくとか、米はどんなにしても二日分くらい持つとか、飯い椀わんに箸は欠かせないとか、切傷、火傷、毒消し薬などを忘れるなどか、みんな常づね口くち伝でんのように戒め合い、いぎというときまごつかないだけの手順はつけてあるのだった。……包が出来ると、お祖父さんに起きて貰もらい、布ぬの子を二枚重ねた上から綿わた入い半はん纏てんをさらに二枚着せ、頭巾かぶを冠かぶらせた。このあいだにも表の人ごえは段だん高くなり、手荒く雨戸を繰る音や、荷車を曳ひきだすけたたましい響こきが起こったりした。

「もう支度はできたかえ」おらくがそう云つて入つて来た、「……慌あわてなくつてもいいんだよ、また少し風が變つて、火先が西へ向つてるからね、こっちはたぶん大丈夫だろうつて、うちじゃあいま馬ば喰くろ町ちやうのおとくいへ見舞みまいに出いていったよ」

「でもさつきよりかがりが大きくなつたようじゃないの、おばさん」上かまりち框かまへ、出いていいつたおせんは、夜空を見やりながら、それでもややおちついた声でそう云つた、「……厭いやだわねえ地震のあとでまた火事だなんて」

「お江戸の名物だもの、風が吹けばじゃんとかくるにきまつているのさ、それにしてもれつ

きとしたお上かみがあつて、知恵才覚のある人もたくさんいるんだらうに、なんとか小さいうちに消すくふうはないもんかねえ、番たび百軒二百軒と焼けるんじやあもつたいないはなしじやあないか」

「あらおぼさん」おせんは急に身をのり出した、「……こつちのほうが明るくなつたけれど、どこかへ飛び火がしたんじやあないかしら」

「あらほんとうだね、おまけに近そうじやないか」

おらくはあたふたと外へ出た。たしかに飛び火らしい、元の火先は西へ靡いているのに、それとは方角の違う然もずつとこちらへ寄つたところに、新しいだいたい橙色の明りが立ちはじめた。……通りには包を背負い、子供の手をひいた人びとの往来がしだいに繁くなつたが、その人たちの顔が見えるほど、空は赤あかと焦がされていた。家を見て来ると云つておらくが去ると、おせんは勝手へいつて水を飲み、どうしようかと考え惑つた。足の不自由なお祖父さんを、伴つれてゆくには、あまりさし迫らないうちのほうが安全だ、然しよく話に聞くことだが、へたに逃げると却かえつて火に囲まれてしまう、立退たちひくなら火の風の向きをよほどよくみなければと云う、まだ経験のないおせんには、いまが逃げる時かどうか、どつちへゆくがいいのかまるつきり見当がつかかなかつた。どうしよう、おせんはまた表へ出て

いった。

「おせんちゃんまだいたのか」と、右隣りの主人がびっくりしたように呼びかけた、「……もう逃げなくちやあいけない、立^{たちばな}花さまへ火が移っている、早くしないとんだことになるぜ」

そう云うと、背中の大きな包を揺りあげながら、大通りのほうへと走っていった。おせんは足がぶるぶると震えだした、よく気をつけてみると、僅かなあいだに近所ではだいぶ立退いたらしく、往來の激しい騒ぎとは反対に、たいていの家が雨戸を明けたまま、ちようど黒い口をあけているようにひっそりと鎮まりかえていた。おせんはぞつとして露次へとびこんだ。裏の魚屋へいつて「おばさん」と呼んでみたが返辞はなく、包を背負った男たちがおせんを突きつけるように、溝^{どぶ}板^{いた}を鳴らしながら駆けて通った。気もそぞろに、家へ戻つてくると、お祖父さんは仏壇を開いて、燈明をあげているところだった。

「お祖父さん」おせんはできるだけしずかな調子で云った、「……たぶん大丈夫だと思うけれど、なんだか火が近くなるようだからともかく出てみましょう」

「おまえゆきな、おせん」と、源六は仏壇の前へ坐った、「……ここは焼けやあしない、おれにはわかっているんだ、ここは大丈夫だ、けれども万に一つとあるからな、

おまえだけは暫くどこかへいつているがいい」

「そんなことを云つて、お祖父さんを置いてゆけると思ふの、あたしを困らせないで」

「人間には定命じょうみょうというものがあるんだ。おせん」源六はしずかに笑つた、「……どんなに逃げたつて定命から逃げるわけにはいかない、おれはじたばたするのは嫌いなんだ」

「それじゃあ、あたしもここにいてよ」

「ばかなことを云つちやあいけない、おれとおまえとは違ふ、おまえはまだ若いんだ、おまえは、これから生きる人間なんだ、若さというものは、時に定命をひっくり返すこともできる、七十にもなれば、もうじたばたしても追つつかないが、おまえの年ごろにはやるだけやつてみなくちやあいけない、どん詰りまでもういけないところから三段も五段もやつてみるんだ、おせん、おれのことは構わずにゆきな、半刻はんときもすればまた会えるんだから」

「お祖父さん」

おせんはお祖父さんの膝ひざへ縋すがりついた。そのとき表から、「爺さん」と叫びながらとび込んで来た者があつた。杉田屋の幸太だつた。彼は頭巾付きの刺子さしこを着ていたが、その頭巾をはねながら上り框へ片足をかけた。

「もう立退かなくちやあいけないよ爺さん、立花様へ飛んだ火が御蔵前おくらまえのほうへかぶさつて来た、こいつはきつと大きくなる、いまのうちに川を越すほうがいい、おれが背負つていくぜ」

「よく来てお呉くんなすつた、濟まない」源六はじつと幸太の眼を見いつた、「……せつかくだがおれのことはいいから、どうかこのおせんを頼みますよ、おれはこんなからただし、もう年が年だから」

「ばかなことを云つちやあいけない」幸太は草鞋わらじのまま上へあがつた、「……としよりを置いて若い者が逃げられるものか、さあこの肩へつかまるんだ、おせんちゃん、持つてゆく物は出来ているのかい」

「ええもう包んであるわ」

「じゃちよつと手を貸して爺さんを負わして呉んな、なにか細帯でもあつたら結びつけていこう。色消しだがそのほうが楽だ」

構わないで呉れと泣くように云う源六を、幸太はむりに肩へひき寄せ、おせんの出して来たさんじやく帯で、しっかりと背へ括くりつけた。おせんは齒をくいしばつた。幸太とは単純でないゆくたてがある。どんなに苦しくとも彼にはものを頼みたくない、然しこのば

あい他にどうしようがあるう、彼がとびこんで来たとき、おせんは嬉しさに思わず声をあげそうになった。ずいぶん勝手だけれど堪忍して、うしろからお祖父さんを負わせながら、おせんは心のうちで幸太にそう詫わびを云った。

「よかつたらゆくぜ、おせんちゃん」

「あたしはこれを持ってばいいの、ああいけない火桶に火がいけてあつたわ」

「いけてあれば大丈夫だ、そんなものはいいよ」

それでもと云っておせんは手早く火の始末をし、幸太といっしょに家を出た。……大通りは人で揉もみ返していた、浅草のほうはいちめんの火で、もうそのあたりまできな臭い煙がいつぱいだった。幸太はちよつと迷った、西を見ると駿河台から延びて来た火が、向う柳原あたりまでかかっているようだ、北は湯島を焼いたのが片方は上野から片方は神田川にかけて燃え弘がっている。そして浅草のほうも火だ、つまり隅田川に向って三方から火が延びているのである。

「おうまやの渡しから向うは大丈夫だ」

そう云っている男があつたので、幸太はその男をつかまえて訊きいた、「たしかだとも」と、軽かるこ子らしいその男はいきごんだ調子で云った、「おれは駒こまがた形の者だ、おふくろが神

田にいるんでゆくとところだが、焼けているのはお厩うまやの渡しからこつちで、あれから向うは、煙も立つちやあいがない、逃げるんならあつちだ」幸太はそつちへ戻ろうと思った、然し道いつばい怒濤どたうのように押して来る人の群を見ると、そのなかをゆくことがいかに不可能であるかすぐにわかった。彼は背負った源六を思い、左手に縋すがっているおせんを思った、――やつぱり本所へゆこう、おなじ火をくぐるなら、ゆき着いた先の安全なほうがいい。そう心をきめて歩きだした。

浅草橋まであとひと跨またぎというところまで来た。湯島のほうから延びて来る火は、もう佐久間町さくまちょうあたりの大名屋敷を焼きはじめたとみえ、横さまに吹きつける風は燻いぶされたように、煙と熱気に充ちていた。おせんは絶えず幸太の背中にいるお祖父さんに話しかけ、元気をつけたり、励ましたりしていたが、このとき人の動きが止って、前のほうから逆に、押し戻して来るのに気がついた。

「押しちやあだめだ、戻れもどれ」

「どうしたんだ先へゆかないのか」

「御門が閉った」

そんな声が前のほうから聞え、まるで堰止せきとめられた洪水が逆流するかのようになり、轟轟ひし

と押詰めた群衆がうしろへと崩れて来た。おせんは幸太の腕へ両手でしがみついた。

「幸さん御門が閉ったんですって」

「そんなことはないよ」彼は頭を振った、「……なにかの間違いだ、この人数を抛ほうつて門を閉めるなんて、そんなばかなことが」

「御門が閉ったぞ」そのとき前のほうからそう叫ぶ声が出た、「……御門は、閉った、みんな戻れ、浅草橋は渡れないぞ」

その叫びは口から口へ伝わりあらゆる人々を絶望に叩きこんだ、沸き立つような喧騒けんそうがいつときしんと鎮まり、次いでひじょうな怒いかりの呪号どごうとなって爆発した。浅草橋御門を閉められたとすれば、かれらが火からのがれる途みちはない、火事は北と西とから迫っている、然も恐るべき速さで迫って来ている、東は隅田川だ、浅草橋はたった一つ残された逃げ口だったのだ。

「門を叩き毀こわせ」誰かがそう喚こわいた。

「踏み潰つぶして通れ」

するとあらゆる声がそれに和とぎして鬨とぎをつくった。

「門を毀こわせ」

「押しやぶってしまえ」

それは生死の際に押詰められた者のしにもぐるいな響きをもっていた。群衆は眼にみえないちからに押しやられて、再び浅草橋のほうへと雪崩なだれをうって動きだした。

九

幸太はこの群衆の中から脱けだした。彼には浅草橋の門の閉った理由がすぐわかった。門の彼方もすでに焼けているのだ、風が強いから火はみえないが、さつき茅町の通りで見たとき、もう柳原のあたりが赤くなっていた、おそらく馬喰町の本通りあたりまで焼けてきたに違いない。よしそうでないにしても、「御門」という制度は厳しいもので、いちど閉められたらたやすく明く筈はなし、群衆の力ぐらいで毀せるものでもなかった。彼はすばやくみきわめをつけ、けんめいに人波を押し分けて神田川の岸へぬけ、そのまま平右衛門町へいえもから大川端へと出て来た。

神田川の落ち口に沿った河岸かしの角が、かなり広く石置き場かしになっていた。のちには家が建つようになったが、その頃はまだ河岸が通れるようになっていて、貸舟屋や石屋や材木

屋などが、その道を前にして軒を並べていた。もし舟があつたら本所へ渡ろうし、無かつたにしても、石置き場は広いし水のそばだから、火に追いつめられてもたぶん凌ぎがつくだろう、幸太はそう考えて来たのだった。……けれども、そこはもう荷物と人でいっぱいだった、幸太はちよつと途方にくれたが、遠慮をしてはだめだと思い、

「病人だから頼みます」

と繰り返して叫びながら、人と人とのあいだを踏み越えるようにして、いちばん河岸に近いところへぬけていった。そこは三方に胸の高さまで石が積んであり、その間にちょうど人が三人ばかりはいれるほどの隙間ができている。

「ここがいいだろう」そう云つて幸太は源六をおろした、「……暫くの辛抱だ、爺さん寒いだろうが、がまんして呉んな」

「それより幸さん、おまえ家へ帰らなくちやあいけまい」

「なあに家はいいんだ」幸太は源六を積んである石の間へそつと坐らせた、「……家はすつかり片付けて来たし、親たちは職人といつしよに立退いたんだ、おせんちゃんその包をこつちへ貸しな、そいつを背中へ当てて置けば爺さんが楽だろう」

「済みません、あたしがしますから」

おせんは背負つて来た包をおろし、お祖父さんの後ろへ、寄り掛れるように置いて、自分もそこへ腰をおろした。

火のようすを見て来るといつて、幸太は通りのほうへ出ていつた。おせんはひきとめたかつた、こんな混雑のなかで、もしはぐれでもしたらどうしようと思つたから。けれども呼びかけることはできなかつた、幸太が火を見にゆくというのは口実で、ほんとうはおせんのそばにいることを憚はばつた。あのときの約束を守ろうとしているのだということがわかつたからである。おせんは咎とがめられるような気持で、お祖父さんにひき添いながら身のまわりを眺めやつた。……積んである石の上も下も、大きな荷包と人でいっぱいだった、たいていの者が子供づれで、なかには背負つたり抱えたりで五人もの子をつれた女房がいた。かれらの多くは焼けだされて来たらしく、火あしの早かつたこと、飛び火がひどくて逃げる先さきを塞ふさがれ、危うく命びろいをして来たこと、どこそこでは煙に巻かれてなん十人も倒れているのを見たことなど、口ぐちに話し合つていた、「ええ此処ここは大丈夫ですよ、いざとなつたら川へはいつて、石垣に捉つかまつていたつて凌げますからね」そんなことを繰り返し云う男があり、「そうだ此処なら命だけは大丈夫だ」とか「水に浸つて火の粉をあびれば水火の難だぜ」などと云つて笑う声も聞えた。

暫くして幸太が蒲団を担いで戻つて来た、「ちよつと思いついたもんだから、断わりなしにはいつて持つて来たよ」彼はそう云つて源六とおせんとをそれでくるむようにした、「……こうしていれば寒くもなく火除ひよけにもなるからな、それから飯櫃めしびつをみたら残つたから、手ついでにこんな物を拵えて来たよ」自分もそこへ坐りながら、湯沸しと握り飯の包をとりひろげた。

「あら、お握りなら持つて来てあるのよ」

「そいつはとつとくんた、明日がどうなるかわからないからな、爺さん一つ喰べておかないか、ちよつどまだ湯が少し温かいんだがな、おせんちゃんもどうだ」

「ええ頂くわ、お祖父さんもそうなきいな」

「なんだか野駆けにでもいったようだな」

源六は独り言のように、そつとこつぶやう呟きながら一つ取つた。おれも貰うぜと云つて、幸太も取つて頬張つたが、こいつは大笑いだと頭へ手をやった、「冗談じゃない塩をつけるのを忘れちゃつたよ」

「まあそんなものさ」源六が笑いながら云つた、「男があんまりですぎるのもげびたものだ」

「いいわよ、梅干を出すから待つてらっしゃい」

おせんは手早く包をひらき、重箱をとりだして蓋をあけた。——ほんとうに野駆けにでもいったようだ、と思いつながら……。

火事のことは源六も幸太も口にしなかった、火のようすを見にいった幸太がなにも云わないのは、云わないことがそのまま返辞だからである。それでなくとも、横なぐりに叩きつけて来るような烈風は、すでに濃密な煙とかなり高い熱さを伴っているし、頭上へは時おりこまかい火の粉が舞いはじめて来た。

「爺さんもおせんちゃんも、少し横になるほうがいい、火の粉はおれが払ってやるから」

そうすすめるので、源六とおせんは蒲団をかぶり、包に倚りかかって楽な姿勢をとった。……家は焼けてしまうだろう、おせんはそう思ったが、悲しくも辛くもなかった、お祖父さんが病気で倒れたり、地震があつたり、今年はひどく運が悪かった、いつそ家もきれいさっぱり焼けて、どん詰りまでいってしまうほうがいい、悪い運が底をついてしまえば、こんどは良い運が始まるだろう、なにもかも新しくやり直すんだ、——庄さん、とおせんは眼をつむり遠い人のおもかげを空に思い描いた、あたし弱い気なんか起こさなくてよ、あんたが帰るまでは、どんなことがあつても他人の厄介にならないで待つているわ、今夜

のことは堪忍してね庄さん、だつてほかにしようがなかつたんですもの、あんたがいたら幸さんなんか頼みはしなかつたのよ、わかるわね庄さん。

危険は考えたより遙かに早く迫つて来た。幕を張つたように、するどい臭みのある煙が烈風に煽られて空を掩い地を這つて、あらゆるものを人々の眼から遮り隠していた、そのあいだに火は茅町から平右衛門町へと燃え移つていたので、誰かが「あんな処へ火が来ている」と叫び、みんながふり返つたとき、河岸に面した家並の一部から焰があがった。風のために家から家と軒つづきに延びて来たのが、ひとところ屋根を焼きぬくと共に、撓めるだけ撓めていたちからでどつと燃えあがつたのだ、ちょうど巨大な坩堝の蓋をとつたように、それは焰の柱となつて噴きあがり、眼のくらむような華麗な光の屑を八方へ撒きちらしながら、烈風に叩かれて横さまに靡き、渦を巻いて地面を掃いた。頭上は火の糸を張つたように、大小無数の火の粉が、筋をひきつつ飛んでいた、煙は火に焦がされて赤く染まり、喉を灼くように熱くなった。煙に咽せたのだろう、どこかで子供が泣きだすと、堰を切つたように、あつちからもこつちからも、子供の泣きごえが起こつた。

「おいみんな荷物に気をつけて呉れ」とつぜん幸太が叫びだした、「……荷物へ火がつくとみんな焼け死ぬぞ、よけいな物は今のうちに河へ捨てるんだ」

彼は石の上へとびあがり、同じ言を幾たびも叫びたてた。それから両国のほうと本所河岸を眺めやった。煙がひどいのでよくわからないが両国広小路の向うも火のようだった。薬研堀から矢の倉へかけて、橙色のすさまじい火が、上から抑えつけられたように横へ広くひろがっている、そしていつ飛び火がしたものか、本所河岸もすでに炎々と燃えていた。

「向う河岸も焼けてるのね、幸さん」おせんが立ちあがってそう云った、「……どこもかも焼けているわ、大丈夫かしら」

「出て来ちゃあいけない、蒲団をかぶってじっとしているんだ」幸太は叱りつけるように云った、「……馴れない眼で火を見ると気があがって、それだけでまいってしまう、おれがいる以上は大丈夫だからじっとしていな」

おせんは坐って、頭からまた蒲団をかぶった、然し熱さと煙とで、息が苦しくなり、ながくはそうしていられなくなつた。

「お祖父さん、苦しくない」

そう訊いたが「うん」というなりでなにも云わない、堪らなくなつて、おせんは頭を出した。ごうごうと、大きな釜戸の呻きのような火の音と、咆えたける烈風のなかに、苦痛

を訴えるすさまじい人の声が聞えた。まるでそこにいる人たちを覗^{ねら}つてくるかのよう、熱風と煙が八方からのしかかり押し包んだ。……向うのほうで「荷物に火がついたぞ」と叫ぶ声がし、「みんな荷物を河へ抛^{ほう}りこめ」という叫びが続いた。おせんはするどい恐怖と息ぐるしきで胸をひき裂かれるように思い、

「幸さん」

と喉いっばいに呼んだ。

「……幸さん、どこ」

「頭を出すな」そうどなりながら、石の上へ向うから幸太がとび上つて来た、「……髪^{かみ}毛へ火がつく、ひっこんでろ」

「苦しくつてだめなの、息が詰るわ」

「苦しいぐらいがまんするんだ」そう云いながら彼は石から下りた、「……爺さんは大丈夫か、爺さん、もうひとがまんだけ」

源六の返辞はなかった、身動きもしないので、幸太が蒲団を剥^はいでみた。源六は包へがくりと頭をのけ反らせていた、幸太は手荒く老人の着物の衿をかき明け、心臓のところへ耳を当てた。……おせんは大きく眼をみはり、両手の拳^{こぶし}を痛いほど握りしめながら見てい

た、……お祖父さんは口をあいていた、眼もあいていた、ちょうど欠伸あくびでもしているようなのんびりとした顔である、然しそれにもかかわらずすべてが空虚で、なにかしらぬげがらをみるような物質化した感じが強かった。幸太は老人の肩を掴つかんで揺すぶった。それから湯沸しをあげ、手に当る紐ひもをひき千切つてつるを縛ると河の水を汲くみあげて老人の頭へあびせかけた、四たびばかりも繰り返して、また心臓へ耳を当てた。これらのことは敏びんし捷ような動作と、ぜひとも呼び生かしてみせると云いたげな熱意あつに溢あふれていた、おせんは震えながら見ていた、渦巻く煙も、頬を焦がしそうな火気も、泣き喚くまわりの人ごえも気づかずに、そして、やがて幸太が両手を垂れながら立つと、絞りだすような声で叫びながらお祖父さんの胸の上へ泣き伏した。

「済まない、勘弁して呉んな」幸太が泣くような声でそう云った、「……おれがへまだつたんだ、もう少し早くいつて伴れだせばよかつたんだが、こんな処で死なせるなんて、ほんとうに済まなかつた」

「いいえそんなことはなくつてよ幸さん、ここまででも伴れて来られたのはあんたのおかげだわ、お祖父さんはどうしても逃げるのはいやだつてきかなかつたんですもの」

「おまえの足手まといになると思つたんだ、病気で倒れてつからも、爺さんはおまえの世

話になることが辛くつて、どんなに気をあせっていたか知れなかった、おれにはよくわかつたんだ。他人ぎようぎじやあないぜ、爺さんはおまえを可愛がっていた、どんなお祖父さんがどんな孫を可愛がるよりも可愛がっていたんだ、おまえに苦労させるくらいなら、いつそ死ぬほうがいいとさえ……おれにそう云ったことがあるんだ、だからおせんちゃん、薄情なようだが諦めよう、爺さんは楽になったんだ、ながい苦労が終つてもうなにも心配することもなく、安樂におちつくところへおちついたんだ、わかるなおせんちゃん」

「幸さん」

おせんが、そう呼びかけたとき、畳一枚もありそうな大きな板片が、燃えながら二人のすぐ傍らへ落ちて来た。

まるで雪崩の襲いかかるように、怖ろしい瞬間がやつて来た。苦しまぎれに河へはいる者がたくさんあつた、然しそこは折あしく満潮で、はいるとすぐ溺れる者が相次いで、石垣にかじりついている者は頭から火の粉を浴び、それを払おうとして深みへ掠われた。たぶん頭が錯乱したのだろう、なにやら喚きながら、まっすぐに燃えている火の中へとび込んでゆく者もあつた。あたりに置いてある荷物はみなふすふすと煙をあげ、それが居竦んでいる人々を焦がした。積んである石も、地面も、触っていられないほど熱くなり、水を

掛けるとあらゆる物から湯気が立った。そうだ、おせんは初めて気がついた。彼女はいつか幸太の刺子半纏を着せられ、頭巾を冠っていた。その上から、幸太が河の水を汲みあげては掛けていて呉れたのだ。

「苦しくなったら地面へ俯伏うつぶすんだ」と幸太がどなった、「……地面へ鼻を押しつけて、そのいきを吸うんだ、火の気も煙も地面まではいかないから、もうひとがまんだ」

おせんはとつぜん中腰になり、すぐ脇に積んである石の蔭を覗いた。さつきから赤子の泣くこえが耳についていた、ひととところで、少しも動かずに、たまぎるような声で泣いている、あんまりひととところで泣き続けるので、堪らなくなつて覗いてみた、石の蔭には大きな包が二つあり、その上に誕生には間のありそうな赤子が、ねんねこにくるまって泣いていた、まわりには誰もいない、ねんねこも包も、ところどころ焦げて煙をだしている、おせんは衝動的に赤子を抱きあげ、刺子半纏のふところへ入れて元の場所へ戻った。

「ばかなことをするな」幸太が乱暴な声でどなった、「……親も死んでしまったのに、そんな小さな子をおまえがどうするんだ、死なしてやるのが慈悲じゃないか」

「みんなおんなじよ」おせんはかたく赤子を抱きしめた、「……あたしだってもうながいことないわ、助けようというんじゃないの、こうして抱いて、いっしょに死んであげるん

だわ、一人で死なすのは可哀そうなもの」

「おまえは助ける、おれが助けてみせる、おせんちゃん、おまえだけはおれが死なしあしないよ」彼はそう云つて、刺子半纏の上から水を掛けると、おせんのそばへ跼んで彼女の眼を覗いた。「……おまえにあ、ずいぶん厭な思いをさせたな、済まなかつた。堪忍して呉んなおせんちゃん」

「なに云うの幸さん、今になつてそんなことを」

「いや云わせて呉んな、おれはおまえが欲しかつた、おまえを女房に欲しかつたんだ、おまえなしには、生きている張合もないほど、おれはおせんちゃんが欲しかつたんだ」

苦痛にひき歪ゆがんだ声つきと眸子ひとみのつりあがつたような烈しい眼の色に、おせんはわれ知らずうしろへ身をずらせた。

「思いはじめたのは十七の夏からだ、それから五年、おれはどんなに苦しい日を送つたか知れない、おまえはおれを好いては呉れない、それがわかるんだ、でも逢いにゆかずにはいられなかつた。いつかは好きになつて呉れるかも知れない、そう思いながら、恥を忍んでおまえの家へゆきゆきした、だがおまえの気持はおれのほうへは向かなかつた、そればかりじゃあない、とうとう……もう来て呉れるなど云われてしまつたつけ」煙が巻いて来、

彼は、こんこんと激しく咳きこんだ。それから両の拳へ顔を伏せながら、まるで苦しさに耐え兼ねて呻くような声で、続けた、「……そう云われたときの気持がどんなだったか、おせんちゃんおまえにはわかるまい、おれは苦しかった、息もつけないほど苦しかった、おせんちゃん、おれはほんとうに苦しかったぜ」

おせんは胸いっぱいに庄吉の名を呼んでいた、できるなら耳を塞いで逃げたかった、

「おれがいなくなれば幸太はきつと云い寄るだろう」そう云った庄吉の言葉がまたしても鮮やかに思いだされた、「だがおれは安心して上方へゆく、おせんちゃんはおれを待っていて呉れるだろうから」そうよ庄さん、あたしを守って頂戴、あたしをしつかり支えていて頂戴。おせんはこう呟きながらかたく眼をつむり、抱いている赤子の上へ顔を伏せた。

「だがもう迷惑はかけない、今夜でなにもかもきりがつくだろう」幸太は泣くような声でこう云った、「……どんな事だつてきりというものがあるからな、おせんちゃん、これまでのことは忘れて呉んな、これまでの詫びにおまえだけはどんなことをしても助けてみせる、いいか、生きるんだぜ、諦めちゃあいけない、石にかじりついても生きる気持になるんだ、わかったか」

おせんは黙っていた、顔もあげなかった。幸太は立って再び水を汲んでは掛けはじめた。

然し湯沸しなどでは間に合わなくなってきた。彼は蒲団を水に浸しておせんの上から冠せ、手桶かなにかないかと捜してみた、そのときはじめて、そのあたりいちめん人間の姿がひとりもなく、荷という荷が赤い火を巻きだしているのに気がついた、ついさつきまで犇めいていた人たちが、かき消したように見えなくなり、有ゆる荷物が生き物のように赤い舌を吐いていた。眼のくらむような明るさのなかで、それは悪夢のように怖ろしい景色だった。

彼は湯沸しを投げだした。そして積んである石材を抱えあげ、石垣に添って河の中へ落とし入れた、一尺角に長さ三尺あまりの大谷石おおやいしだった、殆んど重さを感じる暇もなく、凡そ十五六も同じ場所へ沈めた。それから石垣に捉まって水の中へはいってみた、石は偶然にも、ひとところに重なっていたが、満潮の水は彼の胸まで浸した、幸太はすぐに岸へ上り更に八つばかり沈めて、自分でいちど、試してからおせんを呼んだ。

「大丈夫だ、赤ん坊はおれが預かるから、そこへ足を掛けて下りな、落ちてても腰つきりだよし、こんどはここへ捉まって、ゆつくりしな、そうそう、いいか」

「赤ちゃんを水に浸ひけていいの」

「焼け死ぬより腹くだしのほうがましだろう、いま上から蒲団を掛けるからな」

幸太は岸の上から蒲団を引き下ろし、いちど水につけておせん頭の冠せた。……水はおせんの腰の上までであった。然も潮はひきはじめているとみえ、神田川の落ち口なのでかなり強い流れが感じられる。おせんは赤子を抱いたからだを石垣へ貼りつけるようにし、足は水の中でしつかりと石を踏ん張った。

「もう少しの辛抱だ、河岸の家が燃え落ちれば楽になる、まわりを見ちやあいけない、なにも考えずにがまんするんだ、苦しくなったら水の面にあるいきを吸うんだぜ」幸太は手で蒲団へぎぶぎぶと水を掛け続けた、「……ちよつと待ちな、あそこへ手桶が流れて来る、手じや埒らちがあかないからあいつを取つて来て掛けよう、ちよつとのまがまんしてるんだ」

そう云つて幸太は流れの中へすつと身をのしだした、仕事着のずんどに股ももひき引だけである。手桶は三間ばかり向うを流れているので、なんのことはないと思つた。然し彼は疲れきつていた、もう精も根も遣いきつていたので、二手、三手、泳ぎだすとすぐそれに気がつき、これはいけないと思つた。そのうえ流れはまん中へゆくほど強くなり、ぐんぐんとからだを持つてゆかれそうだった。彼はひき返そうかと思つたが、眼の前にある手桶に気づき、それに捉まれば却つて安全だと考えた。そしてけんめいに身をのし、手をあげて手桶を掴んだ。あげた手はひじように重かつた、まるで鉛の棒でもあるかのようにひじよ

うに重くて自由が利かなかつた。それで桶はくつがえり、ずぶりと水の中へ沈むのといっしよに、幸太もからだの重心を失つて水にのまれた。

がぶつという異様な水音を聞いて、おせんが蒲団から頭を出した、河面かわもは真昼のように明るかつたが、なにやら焼け落ちた物が流れてゆくほかには、どこにも幸太の姿が見えなかつた。その人影のない、明るくがらんとした水面はおせんをぞつとさせた。

「幸さん」彼女はひきつるように叫んだ。

「……幸さん」

すむと思つたよりずっと川口に近いほうで、はげしい水音がしたと思つたと幸太がぼかつと頭を出した。彼は背伸びでもするように、顔だけ仰あおむ反けにしてこつちを見た。

「おせんちゃん」と、彼は喉のどに水の中から濁音で叫んだ、「……おせんちゃん」

そしてもういちどがぶつという音がし、幸太は水の中へ沈んでしまった。おせんは憑つき物でもしたように、大きな、うつろな眼をみはつて、いつまでもその水面を見つめていた。彼女のふところ、赤子がはげしく泣きだした。

中篇

一

江戸には珍しく粉雪をまじえた風が、焼けて黒い骨のようになった樹立こだちをひようひよう
と休みなしに吹き揺すっていた。寒いというより痛い、粟立あわだった膚を針でうたれるような
感じである。どっちを眺めても焼け野原だった、屋根も観音開きも無くなり、みじめに白
壁はが剥げ落ちて、がらん洞になった土蔵があちらこちらに見える。それは倒れ残った火除ひよ

け堀べいや、きたならしく欠け崩れた石垣などと共に焼け跡のありさまを却かえつてすさまじくかなしくみせるようだ。晴れていたら駿河台するがだいから湯島ゆしま、本郷ほんこうから上野うえのの丘までひと眼に見わたせるだろう、いまは舞いしきる粉雪で少し遠いところは臙おぼろにかすんでいるが、焼け落ちた家いへの梁はりや柱はしらや、焦げ毀こわれた家財などの散乱するあいだを、ひどく狭くなつた道がうねくねと消えてゆくはてまで、一望の荒涼とした廢墟はいきよしか見られなかつた。

手足はもちろん骨まで氷りそうな風に曝さらされ、頭から白く粉雪に包まれた人々が、浅草橋の北詰から茅場町かやばちようあたりまで列をつくつていた。傘をさしたり合羽を着たりしているのはごく僅かで、たいていの者が風呂敷やぼろや蓆むしろをかむつていた。男も女も、老人も子供も、みんな肩をすくめ身を縮めて、おさえつけられるように前まえ躰かがみになって、ほんの少しずつ、それこそ飽き飽きするほどのろろと、列といつしよに動いている。誰もなにも云わなかつた、素足のままふところ手をして瘡おこりにかかつたかのようにがたがた震えている者、きみの悪いほど、白い硬ばつた顔でときどきびくんと発条ばねじかけのように首だけ後ろへ振向ける者、むきだしの頭から肩背へ雪まみれになつたまま、払いおとす力もないかのようにじつとうなだれている老婆、これらの群のあいだから赤児の弱よわしい泣きごえが聞える。前のほうでも後ろのほうでも、もう泣き疲れて喘あえぐように喉のどをぜいぜいさせる

だけのものもある。しかし親たちのあやす声は聞えない、ひようひようと吹きたける風の音を縫って、その赤児の泣くこえだけが、列をつくっている人々ぜんたいの嘆きを表象するかのように、途絶えたり高くなったりしながらいつまでも続いていた。

「そつちへいつちやだめじやねえか、だめだつて云つてるじやねえか、ばか」とつぜんこう喚きだす者がいた。

「あの火が見えねえか、よね公、焼け死んじまうぞ、よね公、よね公、ばか」

そしてその喚きはすぐにうううという低い絞るような嗚咽おえつになった。だがそのまわりにいる人たちはなにも云わず、振り返りもしない、そんな喚きごえなど聞きもしなかったようである。いたましいその嗚咽はやがて鼻唄のような調子になり、まもなくかすれかすれに消えていった。

おせんは痴呆のように惘然もうぜんとして、この人々といつしよに動いたり停ったりしていた。抱いている赤児が泣きだすと、鈍い手つきで布子半纏ぬのこぼんでんをかき合せたり、ぼんやりと頬ずりをしたりするが、すぐにまた放心したような焦点の狂った眼をあらぬ方へそらしてしまふ。時どきなにかが意識の表をかすめると、あらゆる神経がひきつり収縮するので、からだじゅうがびくびくと激しく痙攣けいれんする。それと同時にはつと夢から醒さめたような気持ちに

なるが、それは極めて短い刹那せつなのことで、すぐに頭は朦朧もうろうとなり、思考はふかい濃霧に包まれるように昏くらんでしまう。肉躰にくたいも精神もすっかり麻痺まひして、自分がいまなにをしているかも、どうしてそんな処ところに立っているかもわからなかった。——ただ時をきっているような幻想があたまのなかを去来する、幼いころに浅草寺せんそうじの虫干しで見た地獄絵のような、赤い怖おそろしい火焰かえんがめらめらと舌を吐くさま、ふりみだした髪かみの毛から青い火をはなちながら、その火焰の中へとびこんでゆく女の姿、渦を巻いておそいかかる咽のどを灼やくような熱い烈風、嘘のように平安なお祖父じいさんの寝顔、そしてごうごうと咆ほえ狂う焰の音のなかから、哀訴しむせび泣くようなあの声が聞える。

——おせんちゃん、おらあ苦しかったぜ、本当におらあ辛かったぜ、おせんちゃん。おせんは濁った力のない眼をみはり、唇をだらんとあけて宙を見上げる、なんの感動もあらわれない白痴そのままの表情だ。それから急に眉をしかめ、眼をつむって頭を振る、そういう幻視や幻聴を払いのけたいとでもいうように、——赤児はぐずぐずと泣きだし、小さな唇でなにかを舐なめるような音をさせた。おせんは機械的に頬ほずりをし、その唇へそつと自分の舌をさしいれた。赤児はとびつくように口をすり寄せ、びっくりするほどのちからでおせんの舌を吸う、ひじょうな力でちゅうちゅうと音を立てて吸うが、やがて口を放す

とひき裂けるような声で泣きだすのであった。

「おまえさんお乳を含ませておやりな」すぐ前にいた中年の女がこっちへ振返つてからこう云つた、「——舌なんかで騙すのは可哀そうじゃないか、匂いだけでも気が済むんだから、お乳を含ませておやんなさいよ」

「そのひとはあたまがおかしいらしいだよ」脇にいる別の女がそう云つた、「——藁屋の勘さんとこで面倒みてやつてるらしいんだけど、唾者みたいなものを云わないし、お乳をやることもお襦袢を替えることも知らないらしいんですよ」

「まあ可哀そうに、こんな若さでねえ、まだ十六七じゃないかね」

「いくら年がいかなくつても、わが腹を痛めた子に乳をやることも知らないなんて、本当に因果なはなしだよねえ」

そんな問答が聞えるのか聞えないのか、おせんは泣き叫ぶ子を揺すりながら、瞳のぬけたような眼でじつとどこかをみつめるばかりだった。行列はそれでもしだいに前へ前へと進み、やがて席で囲つた施粥小屋へと近づいた。そのあたりは群れたり散つたりする人影と、甲高い罵りごえや喚きなどでわきたち、雪まじりの風に煽られて、火を焚く煙や白い温かそうな湯気が、空へまき上つたり横へ靡いたりしていた。——笥籠を冠り合羽

を着て、大きな鍋なべを提げた男が向うから来た。鍋蓋の隙から湯気が立っている、男は列の人々を眼さぐりしながら来たが、おせんを認めるとせかせか近寄って、

「おめえまた来てえるな、家にいなって云つてるのにどうして出て来るのだ、赤ん坊が凍えちまつたらどうするだ、聞きわけのねえもてえげえにするがいい、さあ帰るだ、帰るだ」
「勘さんよ、たいへんだねえ」さっきの女の一人がこう声をかけた、「——おまえさんもお常さんもよく面倒をみなさる、こんななかで出来ねえこつたよう」

「なにをするもんだお互えさまさ」男はぶあいそに云い捨て、片手でおせんをそつと押し、
「——さあ帰るだ帰るだ」

おせんはすなおに歩きだした。男はときどき鍋を持ち替えながら、自分が風上のほうへまわつて、往来を右へ曲り、もうかなり積つて白くなつた道を、平右衛門町へいえもんちょうのほうへとはいつていった。このまわりはどこよりもひどいようにみえる、土蔵や火防ひよけ壁などが無かつたせい、家という家がきれいに焼け失せて、焚きおとしのようになつた柱や綿屑わたくずやぼろが僅かにちらばっているだけであつた。——しかし大川の河岸にあつた梶かじ平へいという材木問屋では、あの夜、筏いかだにして川へ繫つないだ材木をあげ、三棟の小屋の仕事場を造り、もう四五日まえから活潑のこぎかんに鋸や鉋の音をさせていた。しぜん職人も大勢はいるのでそこを

中心にぼつぼつ家が建ちだしている、もちろん板壁に屋根をのせたばかりの小屋であるが、酒肴やそばきりなどを売る店もあつて、ときには酔つて唄うこえが聞えたりする。……勘さんと呼ばれる男の小屋もその一面にあつた。これは古い板切れを継ぎはぎにした、少なからず片方へ傾^{かし}がつた、素人しごとと明らかにわかる雑なものだ。それにくつつけてやはりぶざまな、そのくせばかげて大きい物置が建つていて、空俵や蓆やあら縄などがいっぱい積込んである。勘さんはがたびしする戸をあけておせんを先にいれ、自分がいるとすぐ戸をびつたり閉めた。

油障子を嵌^はめた小さな切窓から、朝あけのようにほの白い光がさしこんで、六帖^{じょう}ばかりの狭い部屋の中をさむぎむとうつし出している。ふちの欠けた火桶^{ひおけ}に、古ぼけた茶棚^{ちやだな}と枕屏風^{まくらびょうぶ}のほかはこれといつて道具らしい物もみあたらないが、夜具や風呂敷包などきちんと隅に片付いているし、蒲^{がま}で編んだ敷畳もきれいに掃除がしてあり、見つきよりはずつと住みごこちの好い感じがみなぎっていた。

「お常、帰つたぜ」勘さんはこう呼びながら笠と合羽をぬいだ、「——ひでえひでえ、骨まで氷つたあ」

「お帰んなさい、いま湯を取りますよ」

台所でこう答えるこえがし、すぐ障子をあけて、湯気の立つ手桶を持って女房が出て来た。二十八九になる小肥りの働き者らしいからだつきで、頬の赤いまるまるした顔に、思やい遣りのふかそうな眼をもっている。小さな鬘まげに結った髪もきつちり緊まっておくれ毛ひとつないし、衿えりに掛けた手拭もあざやかに白い、手始末のいいきびきびした性質が、それらのすべてにあらわれていた。

「しようがねえ、この寒さにまた出て並んでるんだ」勘さんは足を洗いながら云った。

「——欠とんぶりけ井のひとも持つならいいが、手ぶらで並んでてどうするつもりかさ、可哀そうに赤ん坊が泣きひいてたぜ」

「友さんのところへ乳を貰いにいつといでつて出してやったんだよ、そこからいつちまつたんだねきつと、あらまあ頭からこんな濡れてるじゃないか、持ってつた傘をどうしたろう」

「いいからあげてやんなよ、傘は友助んとこへでも忘れて来たんだろう、ああ人ごちがついたら腹が減ってきた、早いとこそいつを温あつためて貰うべえ」

「あいよ、さあおまえお掛けな、足を拭いてあげるから」

お常は残った湯で雑巾を絞り、おせんを上りがまち框に掛けさせて、泥にまみれ、凍えて紫色

に腫れた足を手ばしこく拭いてやった。

二

おせんのもういう状態はかなり長く続いた。烈しい感動からきた精神的虚脱とでもいうのであろう。もちろん白痴になつたわけではない、その期間に経験したことは夢中のものように朧おぼろげではあるがそれでも断片的にはたいいてい記憶に残つた。ただそれ以前のこと
がまるで思いだせない、猛火に包まれた苦しさとお祖父さんと誰かが死んだことは、遠
いむかしそこだけの出来事のように覚えているが、それもぽつんと断きれていて前後のつな
がりがまるでわからなかつた。

彼女の新しい記憶はお救い小屋から始まつていた。それは蓆掛けに床を張つただけの、
うす暗くて風の吹きとおす寒い建物で、身動きもならないほど人が混み合つていた。四五
日いたのだろうか、赤児が泣くので隅へ隅へと追われた。自分がわからないありさまだし、
もとより赤児の世話などしたことがないから、なかば夢のように揺すつたり頬ずりしたり
するばかりだつた。憐あわれがつて乳を呉くれた女もいた。おむつを替えて、なお三組ばかりわ

けてくれた女房もあつたが、長くは続かず、やがて小屋から押し出されてしまった。そうしてふらふら歩きまわっているうち、勘さんに呼びかけられてその住居へひきとられたのである。

——それから毎日、赤児を負つてはよく歩きまわった。誰かに呼ばれているような、誰かを捜さなければならぬような気持で、ときには上野から湯島あたりまでうろうろしたこともある。しかし大川のほうへは決してゆかなかつた、そこはひじょうに怖ろしい、遠くからちらと水を見るだけでも、身の竦むような恐怖におそわれるのである、理由はわからないが本能的にそつちへゆくことは避けた。……歩きまわることがやまると施粥を貰う行列に並びだした。お粥は勘さんが貰つて呉れるので、むろんそのため並ぶのではない、そこには大勢の人がいた、いつも違った顔を見、違った話が聞ける、そこにいれば自分の捜すものがみつかるかもしれない、また自分を呼んでいる者にゆき会えるかもしれない、そういう漠然とした期待に唆られるからであつた。

——あの晩の火事は二カ所から出たんだつてよ、一つは本郷追分から谷中までひと舐めさ、こつちはおめえ小石川から出たやつが上野へぬけてよ、北風になつたもんで湯島から筋違橋、向う柳原、浅草は瓦町から茅町、その一方は駿河台へ延び

て神田かんだを焼きさ、伝馬町てんまちょうから小舟町こぶなちよう、堀留ほりどめ、小網町こあみちよう、またこつちのやつは大川おほいを本所ほんじよに飛んで回向院えこういんあたりから深川ふかがわ永代橋えいたいはしまできれえにいかれちやつた、両国橋りやうこくはしあたりじゃ焼け死んだり川へとびこんで溺おぼれたりした者がたいへんな数だつて云うぜ。

そんな話もその行列の中で聞いた。

——聖堂せいどうも湯島天神も焼けちやつたからな。

——回向院えこういんの一言ひとこと観音かんのんの御本尊は山門におさめてあつたものさ、ところが十一月はじめのある夜、観音さまが住持の夢枕に立つて、ここでは悪いからおろせと仰おつしやる、そこで本堂へ移すと、二十二日の地震よ、山門は倒れてめちやめちやだ、追っかけて二十九日の大火に回向院はあのとおりさ、げんあらたかだてえんでいまたいそうな参詣さんけい人だそうだ。

——地震のあとで火事、おまけに今年は凶作だというから、火を逃れても餓え死をする者がだいぶ出るぜ。

そういう話もたびたび聞いたのである。殊に関東八州の凶作はあらゆる人々の懸念のたねで、相当の餓死者が出るだろうということは耳の痛くなるほど聞かされた。けれどそういうきびしい話も、その頃のおせんにとつてはまるで縁のない余所よそごとのようなものであ

った。

勘さんは勘十といつて向う両国に住んでいた。そこで煎餅屋せんべいやをしていたのであるが、あの夜の火で焼けだされた。そのとき妻の妹を死なせたそうであるが、その始末もせずに勘さんは下総しもづさの古河こがへとんでいった。そこには妻の実家が百姓をしている、彼はその家へいつて藁や縄や蓆や空俵などを多量に買い入れ、舟と車とですぐ送る手筈をきめて帰った。これらはみな家を建てるのにぜひ必要なものだ、勘さんはそれで商売にとり付こうと思つたのである。——材木問屋の梶平かじへいにおさな馴染ともすけの友助という男が帳場をしていた、その男の手引きで現在の場所へ住居を建て、さっそく注文をとつてまわつたが、思つたよりうまくいって、半月ほど経つうちには「藁屋の勘さん」とすっかり名を知られるようになった。こうした事情をおせんが知つたのはずつとのちのことである、勘さん夫婦はごくしまつた性分らしく、家で米を買つていながら施粥は施粥でちゃんと貰うし、おもても飾らず物の使いぶりも儉つましい、商売が忙しくなつても人を雇うようすはなかつた。……そんな風でいておせんの世話をよくして呉れたのは、下町人の人情もあるだろうが、火事で死んだお常の妹と年ごろが似ているそうで、それが夫婦の同情をひいたのだということも、かなり時日が経つてからわかつたことであつた。

おせんはごく僅かずつ恢復かいふくしていった。まだはつきりとはしないが、勘さん夫婦と自分が他人であること、自分がなにか非常に不幸なめに遭ったこと、抱いている赤児が自分の子でないことなど、——そして困るのは夫婦の者がその子をおせんの実の子だと思つてゐることだった。そうではないと云つても信じて呉れない。記憶があいまいで説明することとはできないが、繰り返して主張すると、「まだあたまが本当でないのだからそんなことは考えないほうがいい」などと云つて相手にならなかつた。それだけならまだいいけれども、十二月中旬ごろだつたらう、新しく人別（戸籍）を作るということで、町役の人たちが来て赤児とその父親の名をきかれた。おせんはなにも云えなかつたが、勘さんがすぐに「これはあの晩の騒ぎであたまを悪くしてますから」と、代りに答えて呉れた。

「なにしろお祖父さんと誰とかが死んじまつたていことは知ってるだが、そのほかのことはなにも忘れちまつたらしいんですよ、自分の名はおせん、赤ン坊はこう坊つて呼んでますが、幸こうきち吉とか幸太郎とかいうんでしょう、そいつも覚えちやいねえようです」

「父親知れず、母おせんか」町役の人はなんの関心もなくそう書き留めた、「——それじや子供の名は幸太郎とでもしておくか」

おせんはこの問答を黙つて聞いていたのだが、幸太郎という名が耳についたとき危うく叫びそうになるほど吃驚びつくりした。なぜそんなに驚いたのか自分もわからない、ただその名が自分にとつて不吉な、たいへん悪い意味のものだという感じだけは慥たしかだった。町役の人たちが去つてから、彼女はお常にこう訊たずねた。

「おばさん、どうしてみんなこの子の名をこう坊つて呼ぶんですか」

「それはあんたが初めにそう呼んだからじゃないの」お常は妙な顔をした、「——毎晩のように幸さんつてうわ言を云つたのよ、それであたしもうちのひともこの子の名だろうと思つて呼んできたんだわ、そうじゃなかったのかえ」

「ええ違ふんです、それは違ふ人の名なんです、あたしこの子の名は知らないんですもの」
「そんなら人別にそう書いちまつたんだからそうして置きな、幸太郎つてちよつとすすきりした男らしい名じゃないの」

おせんは眉をしかめ、頭を振りながらなにか口の内でぶつぶつつぶや呟つぶやいていた。いけない、その名を付けてはいけない、その名だけは決して、——だがなぜだろう、どうしてそんなに悪いだろう。その理由はそこまで出ている、もうひと息でそのわけがわかる、おせんはけんめいに思いつめていった、すると頭の中できらきらと美しい光の渦が巻きはじめ、全

身の力がぬけるような気持で、赤児を負ったままそこへ倒れてしまった。

——それからまた痴呆のような虚脱状態にもどったので、これはそののちも一種の癖のようになつた。ひじょうに驚くとか、ながく一つことを思いつめるとかすると、あたまが混沌こんとんとなつて数日のあいだ意識が昏んでしまふ、そしてその期間にはまたあの怖ろしい火焰や、煙に巻かれて苦しむ人の姿がみえ、哀かなしい訴えるような声が聞えるのであつた。

赤児は丈夫に育つていった。肥えてはいないが肉付きの緊まつた、骨のしっかりしたからだつきでお常のみたと同様では百日前後らしかつた。乳は梶平の帳場をしている友助の妻のを貰つた、ちようど同じ月数くらいの子があり、絞つて捨てるほどよく出る乳だつた。住居も二町ばかりしか離れていないで、日になんでも通うのにも都合がよかつた。夜なかの分は片口に絞つて置いて呉れる、それを温めたり水飴みずあめを溶いたりして与えた。——初めはそばから教えられるままに、なんの感情もなくやっていたのであるが、毎日そうして肌を離さず世話をしているうち、しぜんに愛情が移つたのであるう、泣き方で空腹なのかおむつが汚れたのかわかるようになったし、添寝をしていて少し動くと、眠つたまま背を叩いたり夜具を掻かき寄せたりするようになった。年を越すと赤児は笑い顔をしはじめ、ときにはなにか話でもするような声をだした。眠つきもすっかりしてきて、こちらを意味

ありがけにみつめたりする。そんなようすを見るとおせんはくすぐ撥られるような、切ないような
気持になり、思わず抱き緊めては頬ずりをするのであった。

「あらそう、可笑おかしいの、幸ちゃんそんなに可笑しいの、へえ、それでちゆか」それから
急にまじめな顔をして睨にらむ、「——いけまちえん、お母ちゃんのこと笑ったりしちやいけ
まちえん、悪い子でちゆね、めつ」

そしてこの子とさえいつしよにいればそのほかの事はどうなってもいい、自分の幸福は
この子のなかにだけある、などと思うのであった。

三

三カ所にあつた施粥小屋も十二月の末までで廃止になった。焼け跡もずんずん片付いて、
翌年の二月初ころになると道に沿つたところはあらかた家が建ち並んだ。もちろんそれは表
がわのことで、裏へはいると蓆掛けのほつたて小屋がたくさんある。これらのなかには
「どうせまたすぐ焼けちまうんだ」と悟つたようなことを云つていて、そのとおりまもな
く次の火事で焼かれ、「へん、どんなもんだい」などとへんないばり方をする者などが少

なからずいた。

——家は建つてゆくが町のようすはだいぶ変つた。当時は大火などのあとでよく道筋や地割の変更がある、そのときも両国橋から新大橋しんおおはしまで、河岸に沿つて新しく道が出来た。浅草橋御門からこつちでは、瓦町と茅町二丁目の表通りから大川端まで九割がた町家が取払いになり、松平まつだいらにながしの下屋敷しもやしきと書替役かきかえやくしよ所が建つことに定つたきま。そのため梶平の仕事場が一丁目へ割り込んだので、順送りに勘十の住居なども平右衛門町へ移らなければならなかつた。

——大きな火事があると住む人たちの顔ぶれも違つてくる、俗に一夜乞食といつて、家倉を張つた大商人おおあきんどが根こそぎ焼かれて、田舎へ引込むとか他の町へ逼息ひつそくするなどということも珍しくないし、貸家かきやずまいの者などは殆んどが移転してしまふ、その土地でなければならぬ条件のある者は別として、同じ町内へ戻つて来る者の数はごく少なかつた。……仮にもし町のようにすがそんなに変らなかつたら、そしてもとの町内の人たちがいてくれたとしたら、もう少し早くおせんの記憶力がよびさまされ、自分の身のうえや過去のことを思いだしたであらうし、したがつて後にくるような悲しい出来事はなかつたに違いない。おせんのためには不幸な、だがどうしようもない偶然の悪条件は、こうして早くも彼

女のまわりに根を張りだしたのであった。

二月にはいつてから、おせんの頭はしだいにはつきりし始めた。子供の世話をするひまに、炊事や洗濯くらいは出来るようになり、灯のそばで縫いつくろいなどしていると、すっかりおちついて顔色も冴えてみえる。

「あら、おせんちゃんはきれいなんだね、今夜はまるで人が違ったようじゃないの」お常がそんな風に眼をみはることもあった、「——それだけよくなったんだね、自分でそんな気持がしやあしないかえ」

「ええ頭が軽くなつたような気がするわ、なんとなくすうつとしてなにもかも思いだせそうになるの、ひよいと誰かの顔がみえるようなこともあるんだけれど」

「あせらないがいいよ、そうやってひととおりにかが出来るようになったんだから、もう暫く暢気のんきにしているのさ、そのうち本当におちついてくればすっかりわかるようになるからね」

「おばさん本所の牡丹屋敷ぼたんつて知つてて」

「四よつ目の牡丹屋敷かい、あたしはいつたことはないけど、それがどうかしたのかえ」

「なんだかそのことがあたまにあるの」おせんは遠くを見るような眼をした、「——誰か

と見にゆく筈だったのか、それとも見て来たのか、そこがはつきりしないんだけど、それからどこかのきれいな菊畑、……いろんなことがこのところへ出かかっているんだけど、^{つか}捉まえようとするとすうつと消えてしまうのよ」

「もう少しだよ、おせんちゃん、もう少しの辛抱だよ」お常はもうその話題に興味がなくなった、「——でもすつかり治つて、あんたが紀文のお嬢さんだなんてことになつても、あたしたちを袖にしないでおくれよ」

世間の窮乏はその頃からめだつてきた。幕府で米価の騰貴するのを抑えたからおもてむきの価格はそれほど高くはならないが、関東一帯の凶作に加えて地震と大火のあとなので、米穀その他の必要物資は極めて窮屈になり、またその流通が利を追う少数の商人たちの手に握られているため、庶民の生活は苦しく困難になるばかりだった。

—— いったい元^{げんろく}禄という年代は華やかな話題が多かつた、赤穂浪士のこととは別として、紀文大尽とよばれた紀伊国屋文左衛門や奈良屋茂左衛門などの富豪が、花街や^{ぎじょう}戯場で万金を捨てるようなばかげた遊^{ゆうとう}蕩をしたのもこの頃である。芭^ば蕉、其^き角、^{らんせつ}嵐雪などの俳^{はい}諧師、また絵師では狩野家の常^{つね}信、探^{たん}信守政、友^{とも}信。浮世絵の菱川吉兵衛、^{ひしがわきちべえ}鳥井清信。浄瑠璃にも土佐椽、江戸半太夫など高名な人たちもたくさん出ている。

これは大雑把おおよざっぱにいつて社会経済が武家から町人の手に移りつつあった現われであろうが、その反面、これら新興の富豪商人らが幕府政治の枠わく内ないで巨利を掴つかむために、大多数の庶民がひじょうな犠牲を払わされたことは云うまでもない。……幕府では物価の昂騰こうとうを抑えたが、日雇賃ひやといちんを上げることが禁じた。物価はそのままだったが、じつさいになると商人たちは品物を隠して出さない、ぜひ買うには高い代価を払わなければならぬ。だが日雇賃には裏がなかった、今もつとも忙しい大工や左官でさえ、手間賃のきびしい制限をうけた。これは一般の購買力を低くすると同時に、しぜん小さな商工業へもつよく影響した。じみちなあきないやまともな稼かせぎでは、その日くらしも満足にはできなくなつていった。世帯をしまう者、夜逃げをする者、乞食が殖ふえ、飢える者が出はじめた。

「浅草寺の境内にまたゆき倒れが五人もあつたつてさ」

「なかに死んだ赤ん坊を負った女がいたそうじゃないの、まだ若いんだつて、そばには御亭主も倒れていたけれど、動かせないほどのひどい病人だつたつて話よ」

「いやだねえ、昨日は御厩河岸おうまやがしに親子の抱き合い心中があがつたし、なんて世の中だろう」「いつになつても泣くのは貧乏人ばかりさ、ひとごとじゃあないよ」

そんな話が毎日のように出た。

三月になつて年号が宝永ほうえいと改まつた。ちやうど季節が春であつたし、この改元は新しい希望を約束するようで、いつとき世間が明るくなつたように見えた。しかしなに一つよきはならなかつた。新しく建てる家はごく手軽にすべしとか、贅ぜいたく沢たくな品の贈答はならぬとか、祝儀や不祝儀の宴会はいけないとか、富籤とみくじは禁ずるなどという、緊縮きんしゆくの布令ふれいが出るばかりで、むしろ不況の度はひどくなつていった。

——焼け跡の木々にも新芽がふくらみはじめた。きみの悪いくらい暖かな日があるかと思うと、冬でもかえつたように、とつぜん気温が下り、烈しい北風がいちめん茶色になるほど埃ほこりを巻きあげたりした。或る日、おせんが表で子供を遊ばせていると、長半纏ながはんてんにふところ手をした男が通りかかり、こつちを見て吃驚したように立停つた。

「おや、おめえおせんちゃんじゃあねえか」

おせんは訝いぶかしげに顔をあげた。

「やつぱりおせんちゃんか」男は親しげに寄つて来た、「——よくおめえ無事だつたな、てつきり死んじまつたとはかり思つてたぜ、おら正月こつちへ帰つたんだが、近所の知つた顔にまるつきり会わねえ、おめえもやられたと思つてたんだが、なにはどうした、爺さんおやは、やつぱり無事でいるのかい」

おせんは子供を抱きあげ、不安そうにじりじりと戸口のほうへさがった。

「なんだえそんな妙な顔をして、おらだよ、山崎屋の権二郎ごんじろうだよ、忘れたのかい」男は片手をふところから出した、「——まさか忘れる筈はねえだろう、ほら、おめえんちのすぐ向いにいた権二郎だよ」

「おばさん、来て」おせんは蒼あおくなつて叫んだ、「——おばさん来て下さい」

悲鳴のような叫びだった。お常は洗濯をしていたらしい、濡れ手のままとびだして来ると、慌あわてておせんを背に庇かばった。

「どうしたんです、この子がなにかしたんですか」

「冗談じゃねえ、なんでもねえんだよ」男は苦笑しながら手を振った、「——おらあこの娘を知ってるんで、いま通りがかりに見かけたからちよつと声をかけたんだよ」

「このひとを知ってるんですって」

「向う前に住んでたんだ、いま取払いになつちまつたが三丁目の中通りで、この娘のうちは研屋、おらあ山崎屋という飛脚屋の若い者で権二郎ごんじろうっていうんだ」

「まあそうですか」お常はほつとしたように前掛で手を拭いた、「——このひとは火事の晩にどうかしたとみえて、以前のことはなんにも覚えちゃいないんですよ、ついした縁で

あたしたちがひきとつてお世話してるんですけれど、じゃあ親類かなんかあるんでしょうか」

「そいつはおいらも知らねえが、茅町二丁目に杉田屋てえ頭とうりょう梁はりがあつた。その若頭梁がよく出入りしていたつけよ」男はこう云つておせんのを眺め、ふと唇を歪ゆがめて妙な笑いかたをした、「——そこに抱いているのはおかみさんの子供かね」

「いいえ、このひとのなんでしょう、ひきとつたときもう抱いてたんですよ」

「へええ、やつぱりね」

「この子の親を知ってるんですか」

権二郎はにやりと笑つた。それからおせんの顔と子供を見比べ、肩をしゃくつて嘲あざけるようにこう云つた。

「いま云つた若頭梁に聞けあわかる、生きてさえいりゃあね」

そして自分には関係がないとでも云うように、よそよそしい顔をして去つていった。お常はそのうしろ姿を見やりながらなんていやみつたらしい人だろうと舌打ちをした。

「おせんちゃんあの男を覚えていないのかえ」

「いいえ」おせんは硬ばつた顔で、まだしつかりと、子供を抱いていた、「——いいえ知

らないわ、あたし、あんなひと、誰かしら、幸坊を取りに来たんじやないかしら」

「そんなんじゃないよ、もとあなたの近所にて知ってるんだってさ、それならそれでもう少し挨拶のしようがあろうじやないか、齒に衣きぬをきせたようなことを云つて、ひとをばかにしてるよ、こんど会つても知らん顔をしておいで」

お常はこう云つて裏へ去つた。

四

勘十はこの話を聞いて、梶平へでかけていった。杉田屋が大工の頭梁なら、梶平に消息を知った者がいるかもしれないと思つたのだ。友助に話してきいて貰うと、主人の久兵衛が知つていた。けれどもそう親しくはなかつたもよう、頭梁の巳みのきち之吉は火事のととき腰骨を折り、女房を伴つれて水戸のほうへ引込んでしまった。が、その後は便りがないからわからないということだった。

「ところがわかつていねえというんだから手紙の出しようもねえ」帰つて来た勘十はお常にこう云つた、「——幸太てえ若頭梁もいたそうだが、これもあの晩どっかで死んだらし

いつてよ、おせん坊もよつぽど運がねえんだな」

こんなことがあつてまもなく、神田川の落ち口に地藏堂が出来た。その付近で火に焼かれたり川へはいつて死んだりした者の供養のためで、浅草寺からながし上しやうにん人とかいう尊い僧が来て開眼式かいげんしきがおこなわれ、数日のあいだ参詣の人たちで賑にぎわつた。——おせんもすすめられて、お常といつしよに焼香をしにいった。そしてあれ以来はじめて大川をまぢかに眺めた。

「此処ここに橋があればよかつたんだ」

参詣人のなかでそんな話をしている者があつた。

「まつたくよ、どんなに小さくとも橋があればあんなにたくさん死なずに済んだんだ、なにしろ浅草橋の御門は閉る、うしろは火で、どうしようもなく此処へ集まつちやつたんだ、見られたありさまじゃなかつたぜ」

「橋を架けなくちやあいけねえ、どうしても此処にあ橋が要るよ」

「そんな話も出ているそうだぜ」

おせんは河岸に立つてじつと川を眺めていた。少し暑いくらいの日で、満潮の川波がまぶしいくらい明るく光り、かなり高く潮の香が匂つてくる。両国広小路のほうにはもう水

茶屋が出来て、葭簾よしず張りに色とりどりの暖簾のれんを掛けた小屋が並び、客を呼ぶ女たちの賑やかな声が聞えていた。——おせんは口の中でなにか呟いた。河岸に並んでいる古い柳、それはみんなまつ黒に焦げているが、枝の付根や幹のそこ此処からたいい新しい芽が伸び、鮮やかな緑の葉が日にきらめいていた。おせんはその柳の並木を見まもった、なにかしら記憶がよみがえってくる、たぶたぶと波の寄せる石垣にも、水茶屋の女たちの遠い呼びこえにも、そして焦げたまま芽ぶいているその古い柳からは、誰かなつかしい人の話しかける言葉さえ聞えるようだ。……おせんは苦しそうに眉をしかめ、じつと眼をつむつたり、頭を振ってみたりした。記憶はそこまで出ている。針の尖さきで突いてもすべてがぱつと明るくなりそうである。動悸どういきが高く、胸が熱くなつて、額に汗がにじみだした。

「まあこんなとこにいたのかえ」

子供を抱いたお常が、こう云いながら近寄つて来た。参詣する人たちの混雑で見はぐれていたらしい。

「どこへいったのかと思つて捜してたじやないの、どうしたのいつたい」

「あたし此処に覚えがあるの」お常のほうは見ずにおせんがこう呟いた、「——あたし此処を知っているわ、いつのことかわからないけれど、慥たしかに覚えがあるし、それに、誰か

の顔も見えるわ」

「たくさん、たくさん、そんなことであたまを使うとまたぶり返すよ、さあもう帰ろうおせんちゃん」

唯ならぬ表情をしているので、お常はこう云いながら腕を取ってせきたてた。そのときおせんは「庄さん」と呟いた。お常に腕を取られたとたん、ふっとその名が、あたまにうかんだのである。

「ああ」

おせんは身をふるわせ、両手の指をきりきりと絡み合せた。

「——庄さん」

「おせんちゃん、どうしたのさ」

「お婆さん、わかつてきた、あたしわかつてきたわ、庄さん、——と此処で逢った、あのひとは此処から上方かみがたへいったのよ」

「いいからおせんちゃん」お常は不安そうに遮さへぎった、「——とにかく家へ帰ろう、ね、幸坊がもうおなかをすかしてるよ」

「待つて、もう少しだわ、だんだんわかつてくるの、そうよ、庄さんは上方から手紙を呉

れたわ」

おせんは両手で面を掩おおつた。いろいろな影像があたまのなかで現われたり消えたりする。黄昏たそがれの河岸、柳の枝から黄色くなつた葉がしきりに散っていた。

——おれの帰るのを待つていて呉れるな、おせんちゃん、それを信じて、安心しておれは上方へゆくよ。

蒼白い思いつめたような庄吉の顔が、いま別れたばかりのようにありありとみえる。それから戸板で担なぎこまれたお祖父さん、裏のさかな屋の女房、露次ぐちにあつた棗なつめの樹、幾つもの研石や半挿はんぞうや小盥こだらひのある仕事場、みんなはつきりと眼にうかんできた。杉田屋のおじさんもお蝶おばさんも、幸太のことも。……おせんは顔を掩おおつていた手を放し、涙のたまつた眼で、お常に頬笑みかけた。

「おばさん、あたしもう大丈夫よ」

「ああわかつてるよ」お常はほつとしたように、しかしまだ半分は疑いながら頷うなずいた。

「——時が来さえすればよくなるんだから、とにかくいちどに考え過ぎないほうがいいよ、さあ帰りましょうね、幸坊」

「あたしが抱くわ、幸ちゃん、さあいらつちやい」

おせんは幸太郎を抱きとり、固く肥えたその頬へそつと自分のをすりよせた。

それからは日にいちどずつ、願を掛けたようにお地藏さまへおまいりにいった。あたまもはつきりしてきたし、気持もしつかりおちついて、からだにも精がはいったような感じである。例えば洗濯をしているとき、はつきり自分が洗濯をしているということを感じる。道を歩きながら、自分がちゃんと地面を踏んで歩いていることを感ずる。あたりまえじゃないの、こう思いながらその「あたりまえ」が慥かなものだということに、形容しようのない嬉しさを覚え、われ知らずそつと微笑するのであった。

——おまいりをする往き来には河岸を通つて、いつときあの柳の樹の下に佇むたたずのが定りきまだった。幹や大枝のすつかり焼け焦げたその樹は、そこ此処から新しい芽や若枝を伸ばしたもののそれが成長するだけのちからはないとみえ、若い枝はいかにも脆もろそうだし、葉はもう縮れたり黄色くなったりしはじめた。けれどもおせんがその樹蔭こかげに立てばなにもかもかえつてくる、縦横に条すじのはいった灰色の幹も、暗くなるほどしだれた細いたくさんの枝も、川風にひらひら揺れている茂つた葉も、……庄吉の姿がそこにみえる、彼は笑おうとして泣くようなしかめ顔をしている、乾いたせかせかせかした声で、じつとこちらを見つめながら話す、それはますますはつきりと、いま耳もとで囁ささやかれるようによみがえつてくる。

——待つて呉れるね、おせんちゃん、おれの帰るまで、おれの帰るまで……。

勘十の商売はひと頃ほど儲もうからなくなつていた。家を建てるにはごく手軽にといいお布令もあつたし、それ以上一般の不況が祟たつて、ちゃんとした家を建てるものはごく少なく、なかにはお布令をしりめにみるような豪ごう奢しやな建物もなくはないが、たいていが仮造りでまにあわせるという風で、それも三月にはいつてからはいちおう建つものは建つたというかたちで大きな注文が殆んどなくなつてしまつた。古河のほうへはその後も大量に買いつけてあつたので、四月になつても送られて来る荷が、はげきれないまま物置からはみだし、空地に積まれて雨ざらしになるといふ始末だつた。——売つた代だい銀ぎんの回収も思うようにいかないようで、荷主からの督促に追いかけられ、その云いわけや、買いつけたあとの荷を断わるために、勘十が幾たびも、古河へいつたりした。

「馴れねえことに手を出すもんじゃあねえ」

こんな風に云つて溜ため息いきをつくことが多くなり、百姓たちの狡こう猾かつさや、大工左官の親方たちのずるがしこさを罵つた。更けてから行燈のそばで財布をひろげ、帳面と算盤そろばんを前に夫婦でながいことひそひそなにか話している、そんなときおせんは幸太郎と添寝そんねをしながら、世の中のくらしにくさ、生きてゆくことの艱かん難なんを思い、冷たい隙間風に身を曝さら

しているような、さむぎむとした心ぼそきにおそわれるのであった。

末すぼまりになったとはいえ、そのままでゆけばとにかくその商売にとりつくことはできたかもしれない。荷のはけも悪く儲けも少なくなつたが、「藁屋」としてはかなり知られてきたので小さなあきないはそれ相当にあつた。また近いうちに町家を取払つた跡へ書替役所が建つそうだし、松平なにがしの下屋敷も地どりを始めたから、もしてがかりがつけばかなりな仕事になる。それでそのほうへも内々できつかけをつけていたのだが、不運なことにそこへ水禍が来て、すべてを押し流されるようなことになってしまった。

——その年はから梅雨のようで、五月から六月の中旬まで照り続け、近在では田植あとの水が不足で困つているという噂うわさもたびたび聞いた。それが六月十五日から雨になるところどはやむまもなく降りだし、三十日から七月の一日二日にかけて豪雨、それこそ車軸をながすようなどしや降りとなつた。

「二度あることは三度というが、こいつはことによると水が出るぜ」

そう云う者もあつたが、老人たちはたいてい笑つて、

「昔からなが雨でみずに出水はないと云うくらいだ、心配するほどのことはないさ」

こんな風に云つていた。しかし、あとでわかつたことだが、この豪雨は関東一帯に降つ

たもので、刀根川とねがわや荒川の上流から山水が押し出し、下総しもとうさる猿が股またのほか多くの堤が欠壞したため、隅田川の下流は三日の深夜からひじょうな洪水にみまわれたのであった。

五

幸太郎は粥を喰べるようになってから却かえつておせんかえの乳房を欲しがった。起きているときはさほどでもないが、寝るときは握っているか口に含んでいないと眠らない。初めはともくすく擦くすくつたくて我慢できなかつたが、どうしてもきかないので少しづつ触らせているうち、慣れたというのだろうか、その頃ではさして苦にもならず、どちらかといえば自分から与えてやるようにさえなっていた。

「吸つちやあいやよ、幸ちゃん、吸うと擦くすくつたいからね、ただ銜くわえてるだけ、そう、こつちのお手々もそうやって握るだけよ、乳首をつままないでね、ああちゃんとっても擦くすくつたいんだからね、そうそう、そうやっておとなしくねんねするのよ」

添寝かたぢをして片乳を口に含ませ片乳を握らせていると、ふしぎな一種の感情がわいてきて、思わず子供を抱きしめたり頬を吸つてやりたくなることがある、からだぜんたいが、あや

されるような重さ、こころよいけだるさに包まれ、どこか深い空洞へでも落ちてゆく陶醉と、なんのわずらいも心配もない安定した気持とを感ずるのであった。

——三日の夜は幸太郎の寝つきが悪く、いくたびも乳をつよく吸っておせんを驚かした。十時ころにいちど用を達^たさせ、それから少しうとうとしたと思うと、痛いほど激しくまた乳を吸われた。からだじゅうの神経がひきつるような感覚におそわれ、おせんは思わず声をあげて乳を離させた。

「いやよ幸ちゃん、吃^{びっくり}驚するじゃないの、どうして今夜はそうおとなしくもないの」

「ああちゃん、ばぶばぶ、いやあよ」

「なあに、なにがいやなの」

こう云つて頭をもたげたとき、すぐ表のところまで水の中を人の歩く音が聞えた。まだ眠けはさめきつていなかったが、おせんはただごとでないと思つてとび起き、

「おばさん、おばさんたいへんよ」

と、叫びだした。

それからあとの出来事は記憶が慥かでない。勘十がまず表へ見に出ようとして、「これあいけねえ土間がもういつぺえだ」と喚いたこと、なにかを取出したり包んだりする夫婦

のひどく狼狽ろうばいしたようす、すぐ近くで「水だ、水だ、みんな逃げろ」と呼びたてる声があったこと、幸太郎を背負って、てまわりの物を包んで、お常の手から奪うようになり大きな包を受取って、裏へ出るとそこがもう膝ひざにつく水だったこと、まっ暗な夜空に遠くの寺で撞つく早鐘や半鐘の音が、女や子供たちの呼び交かわす悲鳴とともに、悪夢のなかで聞くようなすさまじい響きを伝えていたことなど、殆んどがきれぎれの印象としてしか、残っていないかった——そのなかで忘れることのできないのは、背に負った幸太郎のことである。おせんは怖がらせまいと思つて、絶えずなにかしら話しかけていた。

「ほらじゃぶじゃぶ、おもしろいわねえ、じゃぶじゃぶ、みんなしてじゃぶじゃぶ、幸坊も大きくなつたらじゃぶじゃぶねえ」

「ああちゃん、ばぶばぶ、おもちよいね、はは」

子供は背中ではねた。笑いごえもたてた。しかし同時に震えていた。怖いのだ、怖いけれども自分でそれをまぎらわそうとしている、こんな幼い幸太郎が、……おせんはいじらしさに胸ぐるしくなり、いくら拭いても涙が出てきてしかたがなかつた。

「強いのお幸坊は」おせんは首をねじるようにして頬ずりした、「——なんにも怖くはないのよ、ね、じゃぶじゃぶ、みんなで観音さまへいきまちよ、はいじゃぶじゃぶ」

勘十夫婦とどこではぐれたかも覚えはなかった。猿屋町さるやちようあたりでお常が忘れ物を思いだし、「あれだけは」と泣くような声をあげた。諦めろあきらめとか引返すとか云うのを聞きながら、揉み返すひとなみに押されてゆくうち、気がついてみると二人はみえなくなっていた。湯島の天神さまへということはどうちあわせてあったので、いずれは会えると思い、そのまま避難者の群といっしょに湯島へ行ってしまったが、それが勘十夫婦との別れになったのであった。

聖堂の裏の空地に建てられたお救い小屋で、おせんはまる十日のあいだ窮屈なくらしをした。そのあいだにずいぶん捜しまわったが、勘十にもお常にも会えず、見たという者さえなかった。そのときの水は本所と深川を海のようにし、西岸も浅草通りを越して、上野の広小路あたりさえ道に溢れ、四日ばかりは少しも減るようすがなかった。——だが夫婦はみがるのこともあり二人いっしょだから、どう間違つても溺れるようなことはないであろう、家へ帰れば会えるにちがいないと思っていた。

水は七日めあたりから退きはじめた。おせんは子供を負って、まだ泥水が脛はぎまでであるうちからなんども平右衛門町へいった。あたりはひどいありさまで、流されたり毀こわれたりした家が多く、勘十の大きな物置などかたちも無かったが、住居のほうは小さいのと藁や蓆

が絡みついたためか、少し傾いただけで残っていた。十日めには床もやや乾いたし、梶平にいる友助の女房がすすめるので、お救い小屋をひきはらって来たが、勘十夫婦はやはり姿をみせず、そのままついに会うことはできなかつた。

おせんが本当に生きる苦しさを経験したのはそれからのことであつた。それまでは勘十とお常がいて呉れたし、半分はあたまをいためてもののけじめも明らかではなく、苦労というほどの思いはせずに済んで来た。けれどもこんどは自分のちからで生きなければならぬ、さいわい住居だけはある、友助の女房がいろいろ気を配つて、古いものだが蒲がまの敷畳も入れて呉れたし、屋根や羽目板のいたんだところも直して呉れた。まだ暑い季節なので寝起きもすぐに困りはしなかつた。だがたび重なる災難で世間一般に生活のゆきづまりがひどく、誰にしても他人の面倒などみている余裕はない、おせんはまず友助の好意で材木の屑をわけて貰い、それを売り歩いて僅かに飢をしのぐことから始めた。

——庄さんは帰つて呉れないかしら。

心ほそくなるとよくそう思った。

——去年の地震や火事のことを聞かなかつたのかしら、あんなにひどかつたのも、上方へだつて評判がいった筈なのに、もしも聞いたとしたら、せめて手紙ぐらい呉れても

いい筈なのに。しかしそのあとからすぐ自分を叱った。

——手紙のやりとりなどすると心がぐらつくから当分は便りをしない、そつちからも呉れるな、いつかはつきりとそう書いて来たじやないの、二人が早くいつしよになるために、あのひとは脇眼もふらず働いているんだわ、つまらない愚痴など云っては済まないじやないの。

秋風の立つじぶんから、おせんは足袋のこはぜかがりを始めた。まえに仕事を貰った家の親店おやだんだそうで、御蔵前おくらまえに店があつた。火事からこつち皮羽折や皮の頭巾を作ることがたいそう流行したため、皮が高価でまわらず、足袋は木綿ひといろであつたが、仕事は追われるほどあるし皮よりも手間が掛らないので、子供の相手をしながらでも粥ぐらいは啜すすれる稼かせぎになつた。——寒さがきびしくなり、朝な朝な霜のおりる頃に、おせんは仕事を届けにゆく道で思いがけない人に会つた。天王町てんのうちようから片町かたまちへはいるところに小さな橋がある。そこまで来ると横から名を呼ばれた。

「あら、おせんちゃんじやないの」

振返ると若い女が立っていた。濃い白粉おしろいとあざやかすぎる口紅が眼をひいた。髪かたちも着ている物も派手なうえに品がない、誰だろう、思いだせずにいると女はふところ手

をしたまま寄つて来た。

「やつぱりおせんちゃんだね、あんた無事でいたんだね」女は上から見るような眼つきをした、「——あたし死んじやつたかと思つてたよ、いまだどこにいるの、それあんたの子供なのかえ」

「まあ」おせんは息をひいて叫んだ、「——おもんちゃん、あんた、おもんちゃんじゃないの」

「なんだ、いまわかつたの、薄情だね」

おもんは男のように脇を向いて唾をした。おせんはぞつと身ぶるいが出た、なつかしい友である。福井町ふくいちやうのお針の師匠でいっしょになり、ただ一人の仲良しとしてつきあつていた。家は天王町で丸半まるはんというかなりな油屋だったし、彼女はそのひとつぶだねで、縹き織りもよしおつとりとしたやさしい氣質の娘だった。それがこんなに變つてしまった、變つたというよりまるで別人ではないか、濃く塗つた白粉でも隠すことのできない膚の荒れ、紅をさしたために却つて醜く乾いてみえる唇、濁つたもの憂げな眼の色、そしてからだ全体しんたいの、どこか線の崩れただるそうな姿勢、病気でもあるらしい噁しわがれてがさがさした声、——どの一つを取つても昔のおもかげはない、おもんであることは慥かだが、しかしそれ

はもう決しておもんではなかつた。なつかしいという気持は一瞬に消えて、おせんはそのまま逃げだしたくなつた。

「あたしの家もきれいに灰になつたよ、感心するくらいきれいさっぱりさ」おもんはひとごとのようにこう云つた、「——おつ母さんと小僧が焼け死んじやつた、面白いもんだね、人間なんて、お酒もろくに飲まなかつたお父つあんが、いまじやあ酔つぱらつて泥溝どぶの中で寝るし、さもなきや番太の木戸へ縛りつけられてるわ、そしてこれもまんざら悪くはねえなんて、……あんた御亭主をもつたの」

「いいえ、この子はそうじゃないの、あたしひとりだわ」

「どうだかね」おもんは不遠慮にこちらを眺めまわした、「あんた樂じやないらしいね、ふん、この不景氣じや誰だつて堪らないから、飢死をしないのがめつけものさ、いまどこにいるの」

「平右衛門町の中通りにいるわ」

「変つたわねあんた」もういちどじろじろ見まわしておもんは激しく咳せいた、「——なにが困ることがあつたらおいでよ、あたしお閻魔えんまさまのすぐ裏にいるからね、もしなんなら少しお小遣をあげようか」

そしてふところ手の肩を竦め、唾をして向うへゆきかかったが、ふとなにか思いだしたというように振返つて云つた。

「ああおせんちゃん、あんた庄吉っていうひと知ってるかい」

六

おせんは首を振つた。それが自分の庄吉であろうとは夢にも思えなかつたのだ。

「知らないの、へんだね」おもんはちよつと考えるように、「——あんたのことをとてもしつっこく訊きくんだよ、上かみがた方へいってこんど帰つて来たんだって、じゃあひと違いなんだね」

おせんはああと叫び声をあげた。

「そのひと、おもんちゃん、そのひとどうしたの、あんた会つたの、どこで」

「あらいやだ、知ってるの」

「ええ知ってるわ」おせんは恥ずかしいほど声がふるえた、「教えて、いつ来たのそのひと、どこにいるの」

「そんなことわからないよ、お客で会ったんだもの、どこで聞いたのかあたしがおせんちやんと仲良しだというんで来たらしいわ、そう、一昨日の晩だったかしら、あたし生き死さえ知らないからそう云つたら、——そうそう、あたしあたまが悪いな、思いだしたよ、そのひと杉田屋の幸太さんのこと云つてたわ」

「幸さんのことを、……なんて、——」

「そんなこと覚えちやいないさ、はんとき半刻ばかりじくじく云つて、酒もひとちよこ猪口かふた猪口のんだくらいで帰つていったよ、あれ、あんなのなにかなのかい」

「どこにいるか云わなくつて、あんなのところへまた来やしなない」

「わからない、あたしあなんにも知らない、ただ思いだしたから聞いてみたまでのことさ、でもなにか言ことづつて伝があるなら云つてあげるよ、たいてい来やしまいと思うけどね」

「お願いよ、おもんちゃん」息詰るような声でおせんは云つた、「——会つたら云つて頂戴、あたし生きてるつて、平右衛門町の中通りにいるつて、待っているつて、そう云つて頂戴、ねえ、待つているつて、……」

風はないがひどく凍ひやてる夕方だった。寒いからであろう、背中できりに子供がぐずつた、しかしおせんはあやすことも忘れた。お店たなへ仕上げ物を届け、手間賃と次の仕事を貰

つて家へ帰るまで行き来とも殆んど走りつづけた。そのあいだに庄吉が来ているかもしれない、留守で帰ってしまったらどうしよう。そう思うと足も地につかない感じだった。

——もちろん誰も来てはいなかったし、来たようすもなかった。おせんはその夜いつまでも寝ることができず、二時の鐘を聞いてからも行燈をあかあかとして、こごえる手指に息を吹きかけながら、足袋のこはぜをかがっていた。

——本当に庄さんだろうか、もしそうならどうして此処へ来て呉れないのだろう、おもんちゃんを訪ねるくらいなら此処だつてわかる筈なのに、……それとも人が違うのかしら。そんなことを繰り返し思った。

なか二日おいた朝、粥を拵こしらえているところへ友助の女房が寄った。そつと覗のぞいてから、そこまでわかめを買いに來たと云い云い土間へはいつて來た。乳を貰ったので、幸太郎は彼女を見ると嬉しそうに手足をばたばたさせ、わけのわからないことを喚きたてる。友助の女房はその頭を撫なでながら、「庄さんてひとを知ってるかえ」と云った。——おせんはびくつとして振向いた。女房はちよつと云いにくそうな調子で、

「五日ばかりまえから梶平の旦那のところへ泊つてるんだがね、なんでもあんたを知っているらしい、あたしやなんだかわからない、うちのが聞いて來ただけだね」

「おばさん」おせんは叫んで立上った、「——そのひとまだいるの、梶平さんにまだいるのそのひと」

「今日はまだいるわ、でももうどこかへゆくらしいんだよ、あたしやよく知らないんだけどね、うちの聞いた話だとなにかあんたとわけがあるらしい、それでちよいと耳に入れて来いと云われたもんだからね」

「有難う、おばさん、あたし会いたい」おせんは息をはずませて云った、「——すぐにも会いたいの、おばさん、この子に喰べさせたらゆくから会わせて頂戴」

「ああおいでよ、うちのがああ云うんだからなんとか出来るさ、でもあのひとあんたとどんなわけがあるの」

「あとで、あとで話すわ、おばさん、あたしすぐいきますからね」

子供に粥を喰べさせるあいだも、もどかしいおちつかない気持で、思わず叱る声のとげとげしさに幾たびもはつとした。自分は喰べないでそこそこにしまい、子供を抱いて梶平へいった。——仕事場のほうからはいつてゆくと、店の裏にある長屋のかどぐちに、友助の女房が子供を負って誰かと立ち話をしていた。おせんが近寄ってゆくと、手を出してすぐに幸太郎を抱きとり、「向うの置き場のところにおいでな」と云って、あたふた店の脇

のほうへいった。

新しい木肌をさらして、暖かい日をいっばいにあびて、角かくに鋸ひいた材木がずらつと並んでいる。あたりは酸いような木の香がつよく匂い、すぐ向うの小屋から職人たちの鋸いたり削つたりする音が聞えてくる。おせんは苦しいほどに胸がときめいた、たぶん蒼くなっているだろう、そう思つて額から両の頬を手でこすつた。あしかけ三年ぶりである、白粉をつけ紅をつけたかつた、髪も結い着物も着かえて、いくらかでも美しい姿をみて貰ひかけた。しかし生きているだけが精いっばいのくらしである、辛うじて死なずにやつていゝる身のうえでは、紅白粉どころか、丈夫でいることを、せめてもの自慢にするほかはない。——うしろに足音がした。おせんは全身のおののきにおそわれ、こらえ性もなく振り返つた。そこには庄吉がいた。まぎれもない庄吉が縞の布子に三尺を締めて、腕組みをして、灰色の沈んだ顔をしてこつちを見ていた。

「庄さん」おせんはくちごもつた、「——あんだ、帰つたのね」

庄吉は投げるように云つた。

「ああ、だが帰らなきやよかつたよ」

おせんにはその言葉が耳にはいらなかつた。とびつきたかつた、向うでとびついて呉れ

ると思った。からだは火のように熱く、あたまがくらくらするように感じた。

「そしてもう、ずっとこっちにいるの」

「どうするか考えてるんだ、——もういちど上方へいってもいいし、……こっちにこのままいてもいいし、おんなしこった」

「あたし、ねえ」おせんはそつとすり寄ろうとした、「——庄さん、あたし、ずいぶん辛いことがあったのよ」

庄吉はすつと身を退いた。組んでいた腕を解き、凄^{すこ}いような眼でこっちを見た。

「そんなことまで云えるのか、おせんちゃん、おれに向つて辛いことがあったなんて、それじゃあおれは辛くはないと思うのか」

「どうして、庄さん、どうしてそんな」

「おまえは、あんなに約束した、待つているって、おれの帰るのを待つているって、おれはそれを信じていたぜ、お前の云うことだけは信じられると思つて、それこそ冷飯^{ひやめし}に香^{かう}こで寝る眼も惜しんで稼いでいたんだぜ」

「だつてあたし、どうして、……あたしちゃんと待つたじゃないの」

「じゃあ、あの子は、誰の子だ」庄吉はあからさまな怒りの眼で云つた、「——地震と火

事のあとで水害、困っているだろうと思つて帰つて来たんだ、ところがどうだ、断わつておくが云いわけはやめて呉れよ、おれは、みんな聞いたんだ、おまえの家が幸太の御妾宅だと評判されていたことも、そしておまえが幸太の子を産んだことも」

おせんは笑いだした。余りに意外だったからであろう、自分ではそんな意識なしにとつぜん笑いがこみあげてきたのだ、しかし表情は泣くよりもするどく歪ゆがんでいた。

「笑うなら笑うがいい、おまえにはさぞおれが馬鹿にみえるだろう」

「あたしが幸さんの子を産んだなんて、あんまりじゃないの、そんなばかな話、まさか本当だなんて思やしないでしょう」

「云いわけは断わると云つてあるぜ、自分で近所まわりを聞いてみるがいい、幸太がおまえの家へいりびたりということは、去年の春あたりもう耳にはいつた、それでもおれは大丈夫まちがいはないと思つてたんだ、——ところがこんどは幸太の子を産んだと云う、そして、おれはこの眼でその子を見たんだ」

「そんな話、どこから、誰がそんなことを云つたの」

「おまえとは筋向いにいた人間さ、始終おまえのようすを見ることのできる者さ、云つてやろうか、……山崎屋の権二郎だよ」

おせんはようやく理解した。庄吉が自分を訪ねて来なかったわけ、とびつきもせず、よろこびの色もみせないわけが。それどころかたいへんな思い違いをして、自分との仲がめちやめちやになろうとさえしていることを。

——どう云つたらいいだろう、権二郎、ああ、あの頃からもう告げ口をしていたんだ、大阪へ飛脚でゆくたびに、このひとと会つて無いことをあれこれと云つたに違いない、このひとはそれを信じている。うち消さなければならぬ、本当のことを知つて貰わなければ、……きらきら光る眼で、じつと相手を見つめながら、けんめいに自分を抑えておせんは云つた。

「あの子は火事の晩に拾つたのよ、庄さん、親が死んじやつて、ひとりでねんねこにこるまれて泣いていたの、もうまわりは火でいっぱいだつたわ、あたしみごろしに出来なかつたの、——これが本当のことよ、庄さん、あたし約束どおり、待つてたのよ」

おせんは両手で面を掩い、堰を切つたように泣きだした。庄吉はながいこと黙つて、冷やかな眼でおせんの泣くさまを眺めていた、それからふと低い声で、まるでなにごとか宣告するようにこう云つた。

「それが本当なら、子供を捨ててみな」

「実の子でなければなんでもありあしない、今日のうちに捨ててみせて呉れ、明日おれが証拠をみにゆくよ」

おせんは涙でぐしやぐしやになつた顔をあげた、唇がひきつり、眼が狂つたような色を帯びていた。おせんはふるえながら頷いた。

「ええ、わかつたわ、そうするわ、庄さん」

七

おせんは一日うろうろして暮した。——幸太郎を抱きづめにしてなんども出ては、ちぎり飴や、芒すすきで拵すずきえたみみずくや、小さな犬張子などを買ってやった。

——庄さんの云うのも尤もつともだわ。

彼女はこう思った。何百里という遠い土地にいて、権二郎の云つたような告げ口を聞けば、愛している者ほど疑いのわくのは自然である。まして現にその子供を育てている姿を見たのだ、あきらかに否定する証拠がない限り、事実だと思ふのはやむを得ないかもしれ

ない。——庄吉はこのままこつちにいってもいいと云った、自分が証拠をみせれば二人はいつしよになれる、この家でいつしよに暮すことができるのだ。

「ああちゃんを堪忍してね」おせんは子供を抱きしめる、「——あんたがいるとああちゃん
の一生が不幸になってしまうのよ、待ちに待っていたひとが帰って来たの、ああちゃん
の大事な大事なひとなの、あのひとなしにはああちゃんは生きてゆけないのよ、ねえ幸坊、
わかつてお呉れ、堪忍してお呉れね」

あの火の中から抱きとり、腰まで水に浸りながら、身を蓋にして危うくいのを助けた。
自分で自分のことがわからず、他人の世話になりながら、満足におむつを変えることさえ
知らなかったのに、ともかく今日まで丈夫に育てて来た。云ってみれば、ほんの偶然のめ
ぐりあわせであった。なんの義理も因縁もなかったのにこれだけ苦労して来たのだ。もう
誰かに代って貰ってもいいだろう、ことによると自分の手を離れるほうが、却ってこの子
の仕合せになるかもしれない。

「そうよ幸坊、どんなお金持のひとに拾って貰えるかもしれないんだもの、そうでなくつ
てもああちゃんのような貧乏な者に育てられるよりずっとましだわ、そうだわねえ幸坊」

夕餉ゆうげには卵を買って、精しらげた米で、心をこめて雑炊じやくひを拵とえた。それから戸納とだなをあけて大

きい包を取出した。洪水の夜、逃げるときにお常から預かったものである、勘十夫妻の身寄りの者でも来たら渡そうと、手もつけずに納っておいたのであるが、今日になるまでそんな人もあらわれず、いま幸太郎に付けてやる物がなにも無いので、ふと思いついて出してみた。——それはお常の物であった、さほど高価な品ではないが、まだ新しい鼠小紋の小袖や、太織縞の袷あわせや、厚板の緞子の帯どんすや、若いころ着たらしい華やかな色の長襦袢ながじゅばんなどが、手入れよく十二三品あった。おせんは太織縞の袷二枚と長襦袢を二枚わけ、手拭を三筋と、洗った子供の物と、玩具や飴などをひと包にし、でかけるしたくが終つてから、子供と二人で食卓についた。

「さあたまたまのうまよ、おいちいのよ、幸坊、たくちゃん喰べてね」

「たまたまね、はは」子供は木の匙さじでお膳せんの上を叩き、えくぼをよらせてうれしそうに声をあげた、「——こうぼ、うまうまよ、ああちゃんいい子ね、たまたま、めっ」

「あら、たまたまいい子でちよ、幸坊においちいいいするんですもの、ああちゃん悪い子、ああちゃん、めっ」

「ああちゃんいい子よ、ぼぶ」子供はこわい顔をする、おせんはいつもいい子でないといけない、おせんが自分を叱つてみせたりすると子供は必ず怒る、「——ああちゃん、わる

い子、ないよ、いやあよ、ああちゃんいい子よ」

「ああいい子でちゅいい子でちゅ、ああちゃんいい子ね、はい召上れ」

「といで、ね、こうぼといでよ」

木匙は持たせるがまだ独りでは無理だ。しかし誕生からみ月にはなるらしいし、ぜんたいにませた生れつきとみえて、お膳のまわりを粥だらけにしても独りで喰べないと承知しない。今夜はやしなつてやりたかったが、どうしてもきかないので好きにさせた。自分も冷たい残りの粥に、幸太郎の卵雑炊を少しかけ、別れの膳という気持で箸^{はし}を取った。

家を出たのは七時ごろであろう。着ぶくれて眠ったのを背負い、包を抱えて、暗い露次づたいに表通りへ出ると、知った人につまらないように、気をくばりながら浅草寺のほうへ歩いていった。風もないし、その季節にしては暖かい夜だった。そのためか往来の人もかなりあるし、腰高障子の明るい奈良茶の店などでは、酔って唄うにぎやかな声も聞えた。——もうなんにも思うのはよそう、ただこの子の仕合せだけを祈ってしよう。自分の心のこえから耳を塞^{ふさ}ぐような気持で、繰り返しそう呟いた。胸が痛み、動悸^{どうき}が高く激しくなる、だがおせんは唇を嚙^かみしめ、俯^{うつむ}向いて、ときおり頭をつよく横に振ったりしながら、追われる者のようにひたすらに歩いていった。

浅草寺の境内へはいったが、さてどことなるのかなかなか場所がなかった。奥山には蓆むしろ掛がけの見世物小屋がもちろんもうしまつたあとでひっそりと並んでいる。小屋の中なら暖かいが、そんな稼業の者の手には渡したくない。本堂から淡あわしま島さまのほうをまわつてみた、けれども此処ならという処がどうしてもみつからないのである。

「あたし気が弱くなつたんだわ、ここまできて捨てられなくなつたんだわ」おせんはふと立停つてから呟いた、「——子を捨てるのにいい場所なんてある筈がないじゃないの、もう思い切らなければ」

そこは鐘楼のある小高い丘の下だった。すぐ向うに池があり、鯉や亀が放つてあるので、おせんは小さいじぶんよく遊びに来たものだ。此処にしようど決心して、紐ひもを解き、背中から子供を抱きおろした。——子供は眠つたまま両手でぎゅつとしがみつき、仔猫こねこのするように顔をすりつけた。

「おおよちよち、ねんねよ、おとなにねんねよ幸坊」

おせんは抱きしめて頬ずりをしながら、しずかにねんねこで子供をくるんだ、

「——堪忍してね、あちやんの一生のためだからね、いいひとに拾われて仕合せになるのよ、あちやんを仕合せにして呉れるんだから、きつと幸坊も仕合せになつてよ、……」

「ああちゃんそればっかり祈っているわね」

しがみついている手をようやく放し、そこへ置いた包を直して、自分も横になりながらそつと寝かせた。どこか遠くで酔った唄ごえがしていた。三味線の音もかすかに聞える。

おせんは静かに身を起こした、足がわなわなと震えだし、喉がひりつくように渴いた。

——さあ早く、いまのうちに。

おせんは夢中で歩きだした。耳がなにか詰められたように、があんとして、いまにもたちくらみにおそわれそうだった。

——早く、早くいつてしまおうんだ。

おせんは走りだした。するとふいに子供の泣きごえが、聞えた、「ああちゃん」という声はつきりとするどく、すぐ耳のそばで呼ぶかのように聞えた。子供の手がぎゅつと肩を掴む^{つか}、子供は身をかたくして震えている。震えながら奇妙なこえで笑った。「はは、ばぶばぶね、ああちゃん、ははは」それは出水の中を逃げるあのときのことだ、恐ろしいということを感づいていながら、おせんの言葉に合わせてけなげに笑ってみせた。ああ、おせんは足が竦み、走れなくなつて喘^{あえ}いだ。

——堪忍して幸坊、堪忍して。

両手で耳を掩い、眼をつむつて立停つた。子供の泣きごえはさらにはつきりと、じかに胸へ突刺さるやうに聞えた。「ああちゃん、かんにんよ、こうぼいい子よ、めんちやい——」

おせんは喘いだ、髪が逆立つかと思えた、そして狂気のように引返して走りだした。子供は泣いていた。ねんねこをひきずりながら、地面の上を四五間もこっちへ這いだし、こくんこくと頭を上下に振りながら、ああちゃんいやよ、ああちゃんいやよと声いっばいに泣き叫んでいた。——おせんはとびつくやうに抱きあげ、夢中で頬ずりをしながら叫んだ。

「ごめんなさい幸坊、悪かつた、悪かつた、ああちゃんが悪かつた、ごめんなさい」
しがみついてくる子供の手を、そのままふところへいれて乳房を握らせ、片方の乳房を出して口へ含ませた。

「捨てやしない、捨てやしない、どんなことがあつたつて捨てやしない、どんなことがあつたつて」

おせんはこう叫びながら泣いた。

「——幸坊はあたしの子だわ、あたしが苦勞して育てて来たんじゃないの、誰にだつて捨

てろなんて云われる筈がないわ、たとえ庄さんにだつて、……ねえ幸坊、あたし幸坊もう決して放しやしなくつてよ」

子供は泣きじやくりながら、片手できつく乳房を握り、片乳へ顔のうまるほど吸いついていた。おせんはやがて立ちあがり、抱いたまま上からねんねこでくるみ、包を持って、やや風立つて来た道を家のほうへ帰つていった。

明るる朝、子供を負つて洗濯物を干していると、庄吉が来た。彼は歪んだ皮肉な顔つきで、道のほうからこつちを眺めていた。

それからそばへ寄つて来た。——おせんはできるだけのちからで微笑し、相手の眼をみつめながら吃り吃り云つた。

「ごめんなさい、庄さん、あたしゆうべ、捨てにいったのよ」

「——でもそこに負^{おぶ}つてるね」

「いちど捨てただけけれど、可哀そうで、とてもだめだったの、庄さんだつて、とても出来なと思うわ」

「——わかつたよ、証拠をみればいいんだ」

「ねえ、あたしを信じて」おせんは泣くまいとつとめながら云つた、「——本当のことは

いつかわかる筈よ、あたし待ってるわ」

庄吉はなにも云わずに踵きびすを返した。くるつと向き直って道のほうへ歩きだした、おせんはふるえながらそのうしろへ呼びかけた。

「庄さん、あたし待っててよ」

しかし彼は振向きもせず去っていった。

後篇

一

十二月にはいると間もなく幸太郎が麻疹はしかにかかった。その十日ほどまえから鳥越とりごえのほうに、疱瘡ほうそうがはやると聞いたので、御蔵前おくらまえにある佐野正さのしょうの店へ仕事のために往き来るおせんはそのほうを心配していたし、病みだした初めのうちもてつきり疱瘡だろうと思つたのであるが、五日めになつて医者が発疹はっしんのもようをみたうえたぶん麻疹だろうと

云い、そのとおりの経過をとりだしたのでいちおう安心した。じつはその少しまえ、幸太郎が乳を貰っていた友助の家で、その子の和助というのが麻疹にかかっていた。乳が同じであるし、生れ月も近いしおまけに看病のしやすい年恰好だから、本當ならうつつして貰つてもさせるところなのだが、和助のは性が悪いらしいということで、向うから近づかないようにと注意されていたのである。——そんなことから麻疹だとわかつてひと安心しながら、もしやその性の悪いのがうつつていたのではないだろうかとも思い、発疹が終つて熱のひくまでは瘦せるほど気をつからせてしまった。

幸太郎は半月ほどできれいに治つたが、その前後からおせんは友助夫婦のようすの変つたことに気づいた。和助という子は生れつき弱いところもあつたとみえて、幸太郎がよくなつてからも唇のまわりや頭などに腫物はれもののようなもの残り、それがなかなか乾かないで困ると云っていたがそんなことを口実のように、夫婦ともおせんから遠退とこのこうとする風がだんだんはつきりしました。かれらとは水で亡くなつた勘十夫婦のひきあわせで、知りあい、幸太郎のための乳から始まつてずいぶん世話になつてきた。友助というひとは材木問屋の帳場を預かるくらいで、くちかすの少ない律義な性分だし、女房のおたかもお人好しと云われるくらい、善良でおとなしかつた。出水でみずのあと、おせんのためにその住居を直

して呉れたり、仕事場から出る木屑きくずを夜のうちにそと取っておいて呉れたり、また幸太郎の肌着にと自分の子の物をわけて呉れたり、そのほかこまごました親切は忘れがたいものである。勘十夫婦に亡くなられたいまのおせんには、殆んど頼みの綱ともいうべきひとたちであった。それがどうしたわけかこちらを避けはじめた。道などで会えば口をききあうが、それも以前とは違つてよそよそしく、とりつくろつた調子が感じられた。——いたいながあつたのだろう。なにか氣に触るようなことでもしたのだろうか。考えてみたけれどもそれと思ひ当ることはなかつた。

もうかなりおし詰つてからの或る日、おたかが珍しく訪ねて来たので、しかけていた夕餉うげのしたくをそのままに出てゆくと、彼女はいつしよに伴つれて来たらしい中年の男に振返つて、この家ですよと云つた。男は四十五六になる小肥りの軀からだつきで、日にやけた髭ひげの濃い顔にとげとげしい眼をしていた。

「おせんちゃん、このひとは下総しもつさの古河こがからみえた方でね、お常さんの実の兄さんに当るんですつてよ」

「まあお婆さんの、——それはまあ……」

おせんは寒いような氣持におそわれた。これまでながいこと待つていたのに誰もあらわ

れず、もうこのままおちつくのだと思っていたが、こうして亡くなつたひとの兄が来たとなると、もしかすればこの家を出てゆかなければならなくなるかもしれない、そんなことになつたらどうしよう。なによりも先にそういう不安がわいてきたのであつた。——ひきあわせが済むと、おたかはすぐに帰つていった。男はおせんに水を取らせて足を洗い、ぬいだ草鞋わらしと足袋を外へ干してから上へあがつて、蓆たばこいれ入いれをとり出した。どうするつもりだろう、おせんは、ますます強くなる不安のなかで、ともかくも夕餉の量を殖ふやし、乾ほしざか魚なを買いに走つたりした。男は、もともと無口なのか、食事が済むまで、殆んど口をきかなかつた。頬とがの尖つた髭の濃い顔には少しも表情がなく、くぼんだ眼だけが怖いように光っている、その眼でなんども部屋の中を見まわしたり、幸太郎の騒ぐのを、うるさそうに睨にらんだりするばかりだつた。そんな客が珍しいのだろう、子供はじいたんじいたんと云つて、まわらない舌で頻しきりに話しかけたり笑つてみせたりした。うっかりすると膝ひざへ這はいあがろうとするので、おせんは食事が終るとそうそう、厭いやがるのを負おふつてあと片付けをした。……朝のしかけも済んでしまつたが男はおちついて蓆いを吸つていた、百姓をする人に特有の少しこごみかげんな逞たくましい肩つきや、辛抱づよくなにごとかを待つていう風な姿勢をみると、どうにもそこへいつて坐る気になれず、おせんはまるで身の置き場に窮

した者のように、狭い台所でいつとき息をひそめるのであった。

「用が済んだらこつちに來なさらぬか」物音が止んだのに気がついたとみえ、男が向うから呼びかけた、「——それからだいぶ冷えるが、火が有つたら貰えまいかね」

「済みません、火をおとしてしまいました、あのう」おせんは赤くなった、「小さいのがいて危ないもんですから、家の中へは火を置かないようにしていますので、つい」

男はまた黙つて部屋の中を見まわした。おせんは消した焚きおとしで火を作ろうかと思つたが、それだけあれば朝の煮炊きが出来るので、そのままそつと部屋の中へはいつてゆき戸納とどなからあの風呂敷包をそこへ取り出した。

「これは水の晩にあたしがお常さんのおばさんから預かつたものですの」

「あらましのことは友助さんに聞いたがね」

男は包をちよつと見たばかりでこう云つた。

「——わしも心配はしていたが、まさか死んでいようとは思わなかつた、死した躰たいもわからずじまいだつたというが……まだわたしには本当とは思えない」

彼の名は松造まつぞうというそうで、古河の近くの旗井はたいというところで百姓をしている。あのときはそつちも水が溢あふれだし、家はそれほどでもないが田畑にはかなりな被害があつた。

そのあと始末に手が離せなかったのと、人の評判では江戸はたいした事がないというので、知らせのないのを無事という風に考えて問い合せもせずにいた。それにしても余り信りたよがないし、こんど千住市場せんじゆいちばへ荷の契約があつて出て来たのを幸い、それを済ませて此処ここを訪ねたのである。初めてのことではあるがわからず、歩きまわるうちに材木問屋の梶平の店の前へ出た。そこにはかねて勘十から友助という者のいることを聞いていたので、立寄つて話をし、思いもかけない妹夫婦の死を知らされたのである。——松造は以上のことを、ぶあいそな調子で語つた、語るといふよりも不平を述べるといふ感じであつた。

おせんも幸太郎を膝に抱きおろして、あの夜の出来事を記憶するかぎり詳しく話した。死躰のみつからなかったことは捜さなかったためもあるかもしれない、しかし子供を背負つた自分でさえ無事なのである、夫婦二人のことだし、洪水といつても堤を欠壞して濁流が押しかかるというようなものではなかったので、万に一つも死んでいるなどは考えられなかった。どこかへ避難していきまに帰るものと信じていた。それがいよいよ帰らないことがわかり、それでは死躰をというじぶんには、川筋のどこでもすでにそういうものの、始末がついたあとであつた。そういうわけで、世話になりながら死後のとむらいもせずにはいたのは、申しわけのないことであるけれど、じつを云うと自分もまだ本当にお二人

が死んでしまったとは思えない、いつか元気な姿で帰ってみえるような気がしてならないのである。——こういう意味のことを云つて涙を拭いた。松造は蓬臭い^{よもぎ} 蓆を吸いながら^{うなず} 頷きもせず聞いていた、話したことがわかつたのかどうか、まるつきり別のことを考えてでもいるように、硬い表情で黙つて蓆ばかり吸つていた。

松造は泊つていった。千住に舟が着けてあつて、朝早くそれに乗つて帰るといふことだつた。いまにも、家のことを云われはしないかと、そればかり胸に悶^{つか}えていたのだが、朝飯を済ませてもそのことに触れず、干しておいた草鞋と足袋をおせんに取りらせ、それを穿^はいて古ぼけた財布を出して幾枚かの錢を置いた。

「これで子供に^{あめ}飴でも買つてやるがいい」

「まあそんなことは、いいえどうかそれは」

「厄介をかけた、——じゃ……」

そのまま出るようすである、おせんは思いだして風呂敷包をと云つた。松造はむぞうさにそれはまた次に来たときにしようと思つた。そこでおせんは幸太郎を抱き、戸口へ送りだしながら思い切つて^き訊いた。

「あのう、あたしこの家にいってもいいんでしょうか」

松造は振返つてけげんそうに、こつちを見た、ゆうべとげとげしくみえた眼が、今はもつとすどく尖り、こちらの心を刺すかのように光っていた。

「この家は友さんという人が、材木の残り木で建てて呉れたものだそうだ、それから水で毀れたのを直して、おまえに住まわせて呉れたものだそうじゃないか、——そうとすればおまえの家だ」

「それじゃ、あの、あたし、いてもいいんですわね」

松造は茶色になつた萱笠を冠つた。

「ときどき泊らせて貰うからな」こつちは見ずにこう云つた、「——その代りこんど来るときは、自分の喰べる物は持つて来る」

彼が去つたあと、おせんは幸太郎を抱いたまま嬉しさにこおどりをした。もう大威張りよ幸ちゃん、これ、ああちゃんと幸坊のお家になつたのよ、ごらん、幸坊は三つで家作もち、えらいのねえ。——幸太郎はわけのわからぬままにおせんの首へ抱きつき、おせんのはしやくのに合わせてきやつきやつと躍り跳ねた。……昨日からの不安が解け、ようやく気持がおちついてくると、まず考えたのは友助夫妻のことであつた。この家がおせんのものであるように云つて呉れたのは友助夫妻である、かれらはこの頃ずっと疎んずるようす

だった。そしてもし自分に好意を持たなくなつたとすれば、ここから追い出すことはどう
さもない話である、それをこういう風にして呉れたのは、たとえ憐れみからだつたとして
も感謝しなくてはならない。

「お礼にいきましよう幸ちゃん」おせんは子供に頼ずりをした、「——和あちゃんになに
かお土産を持つてね、幸坊はもう和あちゃんのことを忘れたでちよ、忘れちやだめよ、和
あちゃんは幸坊のたつた一人の乳兄弟なのよ」

二

友助の家へ礼にゆくにはもう一つの意味があつた。それは庄吉のようすがわかるだろう
ということである。あの朝の悲しい別れからこつち、おせんはいちども庄吉に会っていな
かつた。あのときの口ぶりでは、江戸にいるかもしれないし大阪へ戻るかもしれない、ど
つちともきめていないという風だつたが、その当座は梶平にいて仕事場を手伝つていると
いうことを、それとなくおたかから聞いたことがあつた。——もちろん大阪へなどゆきは
しない、きつとこの土地にいるに違いない。おせんはこう確信した。庄吉がおせんを疑つ

ている気持はよくわかる、そして自分にはその疑いを解く証拠がない。大阪という遠いところにおいて、飛脚屋の権二郎からたびたび忌わしい話を聞き、帰って来て現におせんが子を抱いているのを見たのだ。ここにもし多少の証拠があつて、このとおりであると並べてみせることが出来たとしても、それで庄吉の疑いがきれいに解けはしないだろう。

——本当のことはいつかはわかる筈よ、あたし待っていてよ、庄さん。

あのおきおせんはこう云つた。深く考えて云つたのでない、しぜんに口を衝いて出た叫びであつた。そしてそれがいちばん慥かであり、必ずそのときが来るに違いないと思つた。愛情には疑いが付きものである、同時にいちどそのときが来れば了解も早い、じたばたしないで待つていよう。こういう風に思案をきめていたのであつた。

松造の帰つた翌日、おせんは彼の置いていった錢に幾らか足して大きな犬張子を買ひ、それを持つて友助の家へ礼にいった。橋からはいつて長屋のほうへゆくと、新しい木の香が嚏つぽく匂つてきた。おせんは切ないような気持で脇へ向いた、庄吉と悲しい問答をしたときのことだが、その匂いからまざまざと思ひうかんだのである。——表で洗濯をしていたおたかは吃驚したような眼でこちらを見、濡れた手をそのまま悠くり立上つた。おせんは家を出なければならぬかと思つたところ、今までどおり住んでいられるようになつ

たこと、それはお二人のお口添えのおかげで、こんな有難いことはないと心をこめて礼を述べた。

「いいえそんなことはありませんよ、うちじやなんにも云やしませんよ、お礼を云われるようなことはしやしませんよ」

おたかは人の好い性質をむきだしに、けれども明らかに隔てをおいた口調でそう繰り返した。おせんはまた、久しくみないから幸太郎に和あちやんと会わせてやりたいが、和あちやんはどうしているかと訊き、そして、つまらない物だが途中でみつけたからと云って、買って来た犬張子を差出した。

「そんなことしないで下さいよ、そんなことして貰うとうちに怒られますからね、本当に困りますよ」こう云って途方にくれるような顔をし、それでも手には取ったが、おたかの顔はやはり硬いままだった。「——せっかく幸坊が来たのに気の毒だけどねえ、あの子はいましたが寝かしたばかりなんで」

「ええいいのよおばさん、そんならまた来ますから」

おせんはこう云ってから、まわりに人のいないのをみさだめ、おたかのほうへそつと身を近寄せて云った。

「おばさん、こんなこと訊いて悪いかもしれないけれど、あたしなにかおばさんたちの気に障るようなことしたんでしょうか、——もしなにかそんなことがあるんなら云って下さらない、あたしこんな馬鹿だから、気がつかずに義理の悪いことをしたかもしれない、もしそうならお詫^わびをしますから」

「そんなことありませんよ、そんな」おたかは狼^{ろう}狽^{ばい}したように眼をそむけた、「——不義理だなんて、あたしたち別になにも気に障ってなんぞいやしませんよ」

おせんは相手の眼を追うようにして見まもった。慥かになにかあると思つたから、そしてぜひともそれは訊きださなければならぬと思つたから。——おせんは云つた、自分がどんなに二人の世話になつて来たか、それをどんなに感謝しているか、勘十夫婦の亡くなつたあと、小さな者を抱えて生きてゆくのに、どれくらい二人を頼みにしているか、親ともきょうだいとも思つてるのに、さき頃から二人が自分を避けるようになった、これは自分にとってなにより悲しく寂しい、自分になにかいけないところがあつたのだろうか、それがわかりさえすればどんなにでも直そう、どうか本当のことを云つて貰いたいし、たのみ少ない自分をつき放さないで貰いたい。これだけのことを心をこめて云つた。

——おたかは聞いているうちに感動したようすで、しかしその感動をうち消そうと、気

の毒なほどうろろするのがみえた。まちがいなく彼女は迷いだしていた。こうと思いきめていながらおせんという言葉につよくひきつけられ、気持の崩れだすのを防ぎかねていた。

「いいわ、じゃ云うわ、おせんちゃん」

やがておたかはどう云った、そしてすばやくあたりを見まわし、手招きをして家の中へはいった。——六帖じように三帖の狭い住居で、どこもかしこもとりちらしたなかに、枕屏まくらびよう風ぶを立てて和助が寝かされていた。おたかはその枕まくらもと許へそつと犬張子を置き、おせんと差向いに坐つて火鉢の埋うずみ火を掻かきおこした。

「あたしがよそよそしくしたのは、おせんちゃんがなにもあたしたちに不義理をしたからつてわけじゃないのよ」おたかはどう話した、——正直に云うと庄吉さんのためなの」

「庄さんのためつて、だつて庄さんが」

「いつだっけかしら、そう、あの人があんたと置場で逢つて話をしたわね、あれから十日ばかり経つてだわ、うちのひとが庄吉さんと呼んで此処でお酒をいっしょに飲んだの、そのときあの人はあるたのことを話したのよ、杉田屋にいたじぶんのことから大阪へゆくようになつたわけ、そのときおせんちゃんと約束をしたことも云つたわ、固く固く約束

したんだつて、——大阪へいつてから、それこそ血の滲にじむような苦勞をしながら、その約束ひとつを守り本尊にして稼かせいだつて」

おせんは耳を塞ふさぎたいように思った。なにもかもわかつている、それから先は聞くまでもないことだ、聞くのは辛いし苦しい、もうやめて下さいと云いたかった。だがおたかは続けた、権二郎の告げ口から庄吉が江戸へ歸つて来るまでのこと、歸つて来てからおせんと逢うまでのこと、そしておせんが彼の申出をきかず、子を棄てようとしなかつたことなど、——朴ほく直ちよくなひとに有りがちの単純さで、話すうちにおたかはまた庄吉への同情を激そそしく唆そそられたらしい、口ぶりにも顔つきもさっきのうちとけた色はなくなつて、再びよそよそしい調子があらわれてきた。

「あの人は泣いていたわ、あたしたちも泣かされたわ」おたかはこう結んだ、「——おせんちゃんにもそれだけのわけがあるんだろうけれど、まだそれほど年月が経つたというんでもないのにあんまりじやないの、あたしは女だからそういつても薄情な気持にはなれない、出来たことはしようがないとも思ふけれど、うちのひとがすっかり怒つてしまつて、もう往き来をしちやあいけないつてきかないのよ、だからあんたも当分はそのつもりでね、いつかまたうちのあたしがよく云うから、それまで辛抱して独りでやっけていらつしやい

な」

「よくわかつてよ、おばさん」おせんは乾いたような声でそう云った、「——庄さんは思
い違いをしているの、この子はあたしの子じやあないわ、でも今はなにを云つてもしよ
うがない、云えば云うだけよけいに疑ぐられるんですもの、だから、あたし待つ決心をした
のよ、それがみんな根も葉もないことだということはいつかきつとわかると思うの、……
おばさんやおじさんにまで嫌われるのは辛いけど、こうなるのもめぐりあわせだと思つて
辛抱するわ、そうすればいつかは、おばさんにも」

だがあととは続かなかつた。わつと泣けてきそうで堪らなくなり、挨拶もそこそこに幸太
郎を抱いて外へ出た。——友助夫妻の遠退いた意味はわかつた。しかしなんと悲しく口惜
しいことだつたらう、女の自分でさえ誰にも訴えたり泣きついたりせず、大きすぎる打撃
を独りでじつと耐こらえてきたのに、あの人はいわば、知らぬ他人の二人になにかも話した、
中傷をそのまま鵜呑みにし、無いことを有つたことのように信じて、男が泣きながら饒舌しゃべ
つてしまった。……それに依つて頼みにしているあの夫婦が自分から離れることをあの
人は知っていたのであろうか、自分への疑いは愛のためだったとしても、そういうことを他
人に話して、おせんが世間からどんな眼で見られるかを考えては呉れなかつたのだらうか、

これもやつぱりあの人があたしを愛しているためなのだろうか。——おせんは今すぐ庄吉に会つて、云うだけ云つてやりたいという激しい感情に唆られ、幸太郎がしきりにむずかるのも知らず、なかば夢中でふらふらと大川のほうへ歩いていった。

三

その年の暮に にんべつあらた 人別改め（戸籍調べ）があつた。洪水から初めてのことと、おせんと幸太郎はその住人であり、その家の主であることをはつきり認められたわけである。世間の景気は悪くなるばかりで、相変らず親子心中とか夜逃げとか盗難などの厭いやな噂うわさが絶えなかつた。おせんが顔を知っている人のなかにも、田舎へ引込むとか、いつかしらいなくなつていような例が二三あつた。だがそれが江戸というものなのだろう、一家で死んだり夜逃げをしたりするあとには、三日とおかず次の人がはいつて、同じような貧しく忙しい暮しを始めるのであつた。

貧しさには貧しさのとリエと云うべきか、日頃から掛け買いの出来ないおせんは、年を越す苦勞もひとよりは少なく、白くはないが賃ちんもち餅もちも一枚搗ついて、かたちばかりに門口へ

松と竹も立てた。——そこへ大晦日おおみそかの夜になって、それも、かなりおそくおもんが訪ねて来た。白粉おしろいのところ剥はげになった顔が、寒氣立ち、埃ほこりまみれの髪を茫々にしたままで、老人の物を直したらしい縞目のわからない布子ぬのこを着ていた。

「表を通りかかったもんだからね、どうしてるかと思つてき、お寒い」おもんは身ぶるいをしながらあがつて来た、「——なんて冷えるんだろう、ちよつとあたらせてね」

「こつちへ来るといいわ、炭が買えないんで焚きおとしなの、暖たまりあしないから、——さあお当てなさいよ」

「坊やおねんねだわね、こんど幾つ」

「四つになるのよ」

おもんは火桶ひおけの上へ半身をのしかけ、両手を低く火にかぎしながら寝ている子供のほうを見やった。あるときからみると頬の肉がおち、眼の下に黝くろずんだ暈くまができて、脂気しやうすいのぬけたかさかさした皮膚、白っぽく乾いている生氣のない唇、骨立って尖つて見える肩など、思わずそむきたくなるほど。衰しやうすいした姿であった。

「ほんの一つだけれど、お餅があるから焼きましようか」

「ああたくさんたくさん」おもんは不必要なほど強く頭を振つた、「——昨日からどこへ

いつでも餅攻めで、それああたしお餅には眼がないほうだけど、でもこう餅ばかりじゃあいくらなんでも胸がやけるわ、あたしは本当にいいんだから心配しないでよ」

「うらやましいようなことを云うわね、でも一つくらいはつきあうもんよ」

おもんが嘘を云っていることは余りに明らかであった。おせんは一つでも惜しい餅ではあつたけれど、見ていられない気持で三つ出し、網を火に架けたり小皿に醤油を注いだりした。ふつくらと焼けてくる香ばしい匂いが立つと、おもんは生唾をのみのみ活潑に話し始め、この頃は面白いように稼ぎのあること、世間の不景気なときは自分たちのほうがふしぎに客の多いこと、この調子なら間もなく、小さな家くらい持てそうなことなど、なにかが逃げるのを恐れでもするようにせかせかと語り続けた。そしておせんが焼けたのを小皿に取って出すと、話に氣をとられているというようすですぐ口へもってゆき、三つともきれいに喰べてしまった。

「人間どうせ生きているうちのことじゃないの、あんたなんか縹きりよう織おがいいんだもの、こんな内職なんかであくせくしているのは勿もつたい体たいないわ、苦勞するのも一生、面白く楽しく、したいようにして生きるのも一生だわ、ねえ、あんただって好きでこんな暮しをしているわけじゃないでしょう、ぱつと陽気に笑つて暮す氣にならない、おせんちゃん」

むりに元氣づけた調子でそんなことを云いだした。思いだしたように鉢はさみを借りて指の爪を切り、これから浅草寺のおにやらいにゆくのだがなどと云って、なお暫くとりとめのない話をしたうえ、吹きはじめた夜風のなかへと出ていった。

「可哀そうなおもんちゃん」

火桶の火を埋めながら、おせんはそつとこう呟つぶやいた。片町へかかる道で会ったときは、ひと眼でそれとわかる姿のいやらしさに、ただ反感を唆られるばかりだった。あの火事のと貧しい娘や女房たちまでが、そんなしよばいをして稼ぐという評判は、よく聞いた。天王町の裏にひとところ、三軒町さんげんちょうから田原町たわらちようのあたりに幾ところか、そういう人たちの寄り場があり、表向きは駄菓子を売ったり、花屋のようないさいで客を取るのだという。聞くだけでも、耳が汚れるような思いだった。あんなに仲の良かったおもんが、そういう女のひとりになったと知ったときは、哀れむよりさきに厭らしさと怒りで震えるような氣持だったが、今夜のようすではよほど困っているらしい、それこそ食う物にも不自由らしいことがわかり、そこまで身を墮おとしても運のない者にはいいことがないのかと、自分のことは忘れていたましく思うのであった。

——可哀そうなおもんちゃん。

元旦は朝から曇つていた。雑煮を祝つたあと、おせんは幸太郎を背負つて、産土神うぶすながみの御蔵前八幡へおまいりをし、それから俗に「おにやらい」という修正会しゆしやうえを見に浅草寺へまわつた。その帰りのことであるが、人ごみの中で和助を負つたおたかに会い、道の脇へ寄つて少し立ち話をした。年賀にゆきたいのだがああいうわけがあるので遠慮をする、お二人ともつつがなくお年越しでおめでとうございます、こう挨拶あいさつすると、おたかも挨拶を返したうえ、もちまへの気の好きからだろう、昨夜から庄吉さんが梶平へ来ていますと云つた。

「祝う身寄りもなくなつて寂しいから、こちらで正月をさせて呉れて来たんですつて、だ
いぶいい稼いぎをしたらしいつて話でしたよ」

「それじゃあ、あの人、——あれからどこかへいつてたんですか」

「あら話さなかつたかしら」こう云つておたかはちよつと気まずそうな眼をした、「——
あれから間もなくお店を出ただけで、梶平さんの旦那の世話で、阿部川町あべかわちやうのなんとか
いう頭梁とうりやうの家へ住込みではいつたそうよ」

「なんとという頭梁かしら——」

「さあ、あたしは詳しいことはなんにも知らないからわからないけれども、でも頭梁つて

いえば一町内にそうたくさんいるわけでもなし、おせんちゃんがもし尋ねてゆくつもりなら「おたかはそう云いかけてふと空を見上げた、「——あらいやだ、雪よ、まあお元日に悪いものが降りだしたわね」

そして自分は花川戸はなかわどに寄るところがあるからと、おたかは急ぎ足に別れていった。——粉のように細かい雪が舞いだした、人の往き来で賑やかな町筋がにわかには活気立つようにみえ、子供たちは口々に叫び歌い交わしながら、道いっばいに跳ねたり駆けまわったりし始めた。おせんの背中でも幸太郎がしきりに手足をばたばたさせ、降って来る雪を掴つかもうとして叫びたてた。

「ゆきこんこいいね、ゆきこんこ、ああたんゆきこんこいいね」

おせんは幸福な気持だった。庄吉が梶平の店を出たということは知らなかったけれど、住込みでよそへいつていた彼が、正月をしに帰って来たという、祝う身寄りもないからと云ったそうだし暫く厄介になった人たちへの懐かしきもあるだろうが、なんといつても近くに自分のいることが最も大きい原因に違いない。自分の近くへ来て、自分のようすを聞いたり見たりしたいのだ、殊によるとすっかり事情がわかって、その話をする積りで来たのかも知れない。——もちろんはつきりそうと信じられる理由はなかった、そういう臆測

とは逆なばあいも想像することができ。しかしそれでもいい、どういう意味にせよ彼が自分の近くへ来ることは愛情のつながっている証拠なのだ。はかないといえはいえるけれど、それだけでも今のおせんは幸福な気持になれるのであった。

三日の午後に古河から松造が来た。野菜物を千住の間屋へ送って来たのだと云つて、おせんにも土の付いた牛蒡ごぼうや人参や漬菜などをぜんたいで二貫目あまりと、ほかに白い餅や小豆あずきや米なども呉れた。彼はその夜また泊つていったが、例のようにぶすつとして余り口をきかず、蓬臭い莢をふかしては、怖いような眼で部屋の中を見まわしていた。——松造は明るる朝まだうす暗いうちに去つたが、こんども小銭を幾らか置いて、怒つてでもいるように子供に飴でも買つてやれと云つた。

「あの包はお持ちにならないですか」

草鞋を穿いて出ようとするので、そう訊くと、彼はちよつと考えるようすだったが、やがて低い沈んだ調子で、おせんの間いとはまるで縁のないことを云つた。

「人間は正直にしても善いことがあるとはきまらないもんだけれども、悪ごすく立廻つたところで、そう善いことばかりもないものさ」

そして空いた袋や籠くわを括りつけた天秤棒てんびんぼうを担ぎ、少し前躰まえこみになってさっさと帰つて

いった。おせんは四五日のあいだ気がおちつかなかった、松造の言葉がなにを諷ふうしているのかもわからないし、あんなに物を持って来て呉れる気持もわからない。こんな時勢にただの好意でして呉れるとは思えないが、好意だけではいとしたらなにか企みでもあるのだろうか。あの包を持ってゆかないところをみるとまた来る積りだろうが、こんど来たらどう扱あつたらいいか。——考えるとまた厭いやなことが起こりそうで、さりとて相談をする者もなく、氣きづづせいな感じを独りでもて余あした。

松の取れるまでそれとなく梶平の店の近くへいつてみたり、表を通る人に絶えず注意していたりしたが、とうとう庄吉の姿を見ることはできなかつた。やっぱりまだ疑いが解けていないのに違ちがいがない、殊ことによると会いに来て呉れるかもしれないとさえ思おもつたのであるが、それが間違まちがいだとわかつて、おせんはさほど悲しくはなかつた。庄吉は同じ浅草にるのである、阿部川町といえど此処こゝからひと跨またぎだし、住込みならそう急いそぎによそへゆくこともあるまい、近くにさえいて呉れば事実のわかる機会も多いので、あせらずに待つていようという氣持きもちだつたのである。

——その点には少しも迷まよいはなかつたけれども、近所のことでもどうにも当惑とうわくに耐えなことが起おこつた。もともとおせんは余あり近所きんじよづきあいをしなほうだつたが、それでも通

りがかりに寄るとか、夜話しに来るとかいった女房たちが二三人はいた。それがまるで申し合せでもしたように、暮あたりからばったり顔をみせなくなり、道で挨拶をするくらいの人になかにも、ふと白い眼でこちらを見るような風が感じられるのであった。まえに友助夫妻のことがあるので、こんどもなにかそれだけの理由があるのだろうと思ひ、しかしそう咎められるようなおちどをした覚えもなかつたから、捨てておいても大したことはあるまいと軽く考えていた。

四

元来がそう親しい人たちでもなく、こちらは満足に茶も出せないような生活で、来られれば却かえつて時間つぶしなくらいである。しかしそう揃そろつてみんなにすぎなくされることは、寂しくもあり、ますます孤独になるよう心細くもあつたので、折さえあればおせんのうちからあいそよく話しかけるように努めていた。すると一月なかば過ぎのことだったが、柳河岸の新しい地蔵堂の初縁日でおせんも子供を伴れて参詣にいったところ、そこで、まったく思いがけないことを聞いたのであつた。——列をなしている人々といっしよに、火

のついた線香を買って並んでみると、後ろでげらげらと笑いながら、大きな声でこう云うのが聞えた。

「そうともさ、義理だの人情だのといったのは昔のことで、今じゃてんでん勝ちが大手を振って歩くのさ、すえ始終の約束をしておきながら、相手が一年もいなければもうほかの男とくつつき合ってしまう、それも十六や七の本当ならおぼっこい年をしてえてさ」

その声には覚えがあつた。振返つて慥かめるまでもない、よく話に寄つた女房のひとりで、亭主が舟八百屋をしているお勘かんという女だ。おせんはかつと頭が熱くなつた、自分に当てつけているのである、此処に自分がいるのを見て、わざわざ聞えるように云つているのだ。そしてかれらが来なくなつた理由もそこにあつたのである。——おそらく友助のほうから伝わつたに違いない、それも庄吉に同情するあまりのことだろう、ほかにわる気がある道理はない、わかる時が来ればわかるのだ。こう思つて、おせんはじつと自分をなだめていた。しかしお勘のたか声はさらに続いた。

「ところが恥を知らないくらい怖いことはない、赤ん坊が生れたと思うと男に死なれちまつた、たいていの者ならいたたまれない筈だが、火事で町のようにすが変り、知つた者がいなくなつたのをいいことに、しやあしやあと元の土地にい据わつて約束の相手の帰るのを

待つていた、そして相手が帰つて来るとこの子は自分の子じゃあないと、ちやんとおまえを待つていたつてさ」

「云えたもんじゃあないよねえ」こう合あいつち槌をうつのが聞えた、「——それも二十にもならない若さでさ、よつぽど胆が太いかすれつからした女なんだね」

おせんは自分でも知らずに、並んでいる人の中からぬけてそっちへいった。頭がくらくらし軀が音を立てるほど震えた。どんな顔をしていたことだろう、彼女はお勘の前へいつて叫んだ。

「いまのはあたしのことを云つたのね、おばさん、あたしのことだわね」

「さあどうだかね」お勘はちよつと気押されたように後ろへ身をひいた、「——あたしや人から聞いたんだからよく知らないよ、おまえさんだかなんだか知らないが、たとえ誰のことにしたつてあんまり」

「なにがあんまりなの、どこがあんまりなの、はつきり云つてごらんさいよ、誰が義理人情を知らないつていうの、誰が男とくつついたの、誰が、誰がよその男の子を生んで自分の子じゃないなんて云つたの、云つてよおばさん、それはどこの誰なの」

声いっばいの叫びだった。参詣の人たちはなにごとかと寄つて来ると、幸太郎は怯おびえた

ように泣きだしていた。けれどもおせんには人の群もみえず幸太郎の泣きごえも聞えなかった、かたく拳こぶしを握り眼をつりあげて、お勘のほうへつめ寄りつめ寄り叫びつづけた。

「云えないの、云えないならあたしが云つてあげるわ、今あなたの口から出たことはみんな嘘よ、根も葉もない嘘つばちよ、あなたもあなたにそんな話をした人も本当のことはこれっぽっちも知っちゃいない、みんなでたらめよ」

「そんならなぜ」お勘も蒼あおくなつた、「——それが本当ならなぜ独りでいるんだい、どうしてその人のところへ嫁にゆかないんだい」

「あたしは、あたしはそんなこと云っちゃいけないわ、そして、そんなことはお婆さんの知つたことじゃないじゃないの」

「どういうわけでその人はあなたを貰いに来ないの」お勘は平べったい顔をつきだし、眼をぎらぎらさせながら喚いた、「——その人は帰つて来たんだろ、会つて話もしたというじゃないか、それで嫁に貰わないつてのはどういうわけさ、おまえさんのほうであいそづかしでもしたつてのかい」

「あの人のことはあの人のことよ、あたしは自分のことを云ってるんだわ、あたしがちゃんと待つていたことを、この子はあたしの子じゃ……」

おせんの舌はとつぜんそこで停つた。幸太郎の悲鳴のような泣きごえが耳に突入り、すが縋りついてゐる幼い手の、けんめいな力が彼女をよびさましたかのようだ。とりまいてゐる群衆の眼にきづいた、お勤はますます喚きたてる。自分はなにをしたのだろう。なんとうばかな恥ずかしいことを、——おせんはがたがた震えながら、幸太郎を抱いて歩きだした。そこにゐる限りの人がおせんを眺め、あざけ嘲りと卑しめの言葉をその背へ投げた。

「そんな恥知らずないたずら女は町内にて貰いたくないもんだ」お勤がなおもこうどなつていた、「——そんな者にいられたんじやこつちの外聞にもかかわるからね、さつさどどこかへ出てつてお呉れよ」

幸太郎は両手でおせんにしがみつき、全身を震わせながら泣きじやくつていた。おせんはかたく頬を押付け、背中を撫なでながら河岸ぞいに歩いていった。そうだ、なんというばかな恥ずかしいまねをしたことだろう、どうもがいたところでお勤を云い伏せられるわけがないではないか、庄吉でさえ疑つてゐるものを、他人がそう信じるのは当然のことではないか。——おまけにあんな大勢の人々のゐる前で、この子は自分の子ではないと叫びかけた。誰に信じて貰えもしないことを云つて、それが小さな幸太郎の耳に遺つたとしたらどうするか。数え年ではあるがもう四つになる、殊にあんな異常なばあいの記憶はなが

く消えないものだ、自分が拾われた子などということ覚え、また人からそう云われるとしたら。……おせんは幾たびもぞつと身を震わせ唇を噛みしめた、そして幸太郎を力いっぱい抱きしめ、燃えるような愛と謝罪の気持で頬ずりをした。

「めんちやいね幸坊、あちやんが、悪かった、あんな恥ずかしい思いをさせて本当に悪かったわ、誰がなんと云つてもいい、幸坊はあちやんの大事な子よ、なにかもいつかはわかるんだもの、それまでがまんして辛抱しましょう、いまにきつと、——きつとなにかもよくなつてよ」

それからさらに近所の眼が冷たくなつた。もちろんおせんも覚悟はしていた、どんなに辛く当られても仕方がない、そのときが来るまで黙つて忍ぼうと決心していた。不自由なのは味噌醤油や八百屋物などの、こまこました買い物物が近所で出来なくなつたことで、駄菓子屋などでさえおせんには売つて呉れない。これには当惑したけれども、そういうも買物をするわけではなく、町内を出れば幾らでも買えるから、不自由なりにそれも慣れていった。

こうしてまわりの人たちと殆んどつきあい絶えたが、二月じゆうはおもんがしげしげ訪ねて来た。たぶんどこかで噂を聞いたのだろう、それとなく慰めたり気をひき立てるよ

うなことを好んで話すが、それはおせんの潔白を信じているためではなく、噂のほうを本当だと思っていて「それがなんだい」という口ぶりであった。

「よけいなお世話じゃないか、火つけ泥棒をしたわけじゃあるまいしなんだい、自分じゃ鼻の曲るような臭いことをして、ひとの段になるとお釈迦さまみたいな口をきくやつさ、なにを構うもんか、大威張りでどこでものしまわってやるがいいんだ」

おせんはむろん彼女の誤解を正そうなどとは思わない、けれどもそういうことを聞いているのは楽ではなかった。なるべく話題を変えるように、おじさんはどうしているか、軀の具合が悪そうだが養生をしたらどうか、そんな風に、こちらから問いかけることに努めた。おもんはそういうことにはなんの興味もないらしい、すてばちな投げた調子で、馬鹿にしたような生返辞ばかりしかせず、ついには欠伸あくびをして寝ころがるのがおちであった。

「きれいな顔をして乙おつに済ましたようなことを云ったって、人間ひと皮剥かわむけばみんなけだものさ、色と欲のほかになんにもありやしない、お互いが隙を狙って相手の物をくすねようと血眼ちまなこになつていているんだ、ばかばかしい、けだものならけだものらしくするがいい、おてえさいを作ったって見え透いてるよ」

酔っているときはそんなように世間や人を罵ののしった。小紋の小袖に厚板の帯をしめ、幸太

郎に玩具を買つて来ることなどもあるし、つぎはぎの当つた男物の布子に、尻切れ草履で来るなり、なにか喰べさせて呉れと云うこともある。またなかまと喧嘩けんかでもしたあとなのだろう、凄すげいような眼つきで、歯ぎしりをして、聞くに耐えないような悪口を吐きちらすこともあつた。

「気楽にやろうよ、おせんちゃん、どうせこの世にあ善いことなんてありあしない、自分の好きなように、勝手気ままに生きてゆくんだ、みんな死ぬまでしきや生きやしないし、死んじまえば將軍さまだつて灰になるんだからね」

二月も末に近い或る夜、おもんが舌もまわらないほど酔つて、着物から髪まで泥まみれになつて、殆んど転げ込むようにはいつて来た。それまでいちども泊めたことはなかつたのであるが、坐ることもできないありさまでどうしようもなく、泥を拭いてやり着替かえをさせて、同じ蒲団の中へいつしよに寝た。——明くる日は朝から唸うなりつづけで、拵こしらえてやつた粥かゆも喰くべず、水ばかり飲んで寝ていたが、午ひるすぎになつて思いがけなく松造が訪ねて来た。

五

正月に来たきり音も沙汰もなかったの、——忘れたというのではないがちよつとどきつとした。いつものとおり草鞋と足袋を自分で干して、足を洗ってあがった松造は、そこに寝ているおもんの姿を見ると、眉をしかめた。——蒼ざめて土色をした膚、茫々とかぶさった艶つやのない髪、おち窪くぼんだ頬と尖った鼻、いぎたなく手足を投げだした寝ざま。誰が見ても眼をそむけたくなるあさましい恰好である。松造は麦むぎ藁わらで作った兎の玩具を幸太郎に与え、蓑入をとりだしながらおせん顔を見た。

「あたしのお友達ですの」おせんはとりなすように小さな声で云った、「——お針にいつていたじぶんの仲良しなんです、ゆうべひどく酔つて来て苦しそうだったもんですから」松造は黙つて蓑をいづくした。それから立つていつて土間へおり、持つて来た包をそこへひろげた。大根や蕪かぶや人参や里芋などの野菜物に、五升ばかりの米と小豆と胡麻ごまと、ほかに切った白い餅が、かなりたくさんあった。

「寒の水で搗ついたから黴かびやしめえと思うが、水餅にして置くほうがいいかもしれねえ」まるで怒つたような声で彼はそう云つた、「——もつと早く来るつもりだったが、あれから足を病んだもんで……」

「足をどうかなきつたんですか」

「冬になると痛むだ、大したことじゃねえ、二三年出なかつたつけが、——水のあとの無理が祟^たつたらしい、死んだ親父もこうだった」

そんな話をしてしているとおもんがむっくり起きた。そして黙つてよろよろと土間へおりた、おせんが吃^{びっく}驚してついてゆくと、ばらばらに髪のかぶさつた顔でこっちへ振返り、

「なんだいあの田舎者は、あれがおせんちゃんのだ旦那かい」

こう云つて激しく咳^せきこみ、そのまま向うへ去つていった。苦しそうな精のない咳のこえが、ずっと遠くなるまで聞えていた。松造はなにも云わずに蔑を吸つていた、おもんの言葉などはまるで聞えなかつたように。——夕餉のしたくをするとき、彼は幸太郎を抱いて外へ出ていった。半刻^{はんとき}ばかり表通りのほうを歩いて来たらしい、したくが出来て膳立てをしていると、橋のところでは彼の唄うこえがした。

「——向う山で鳴く鳥は、ちゆうちゆう鳥かみい鳥か、源三郎^{げんざぶろう}の土産、なにようかによう貰つて、金^{きん}ざし簪^{かんざし}もらつて……」

おせんは立つていつて切窓の隙からそつと覗^{のぞ}いてみた。曇り日の、もう黄昏^{たそが}れかかる時刻で、家と家に挟^{はさ}まれた僅かな空地には冷たく錆^さびたような光が漲^{みなぎ}っていた。松造はこつ

ちへ髭の濃い横顔を向け、遠い空を仰ぐようなかたちで唄っている。幸太郎は頭を男の肩に凭もたれさせ、身動きもせずうつとりと聞き惚ほれていた。——おせんは、ふと眼をつむった、松造の声にはいろもつやもない、節まわしもぶつきらぼうであった。けれどもじつと聞いていると、懐かしい温あつたかい感情が胸にあふれてくる。文句も初めて聞くものではあつたが、記憶のどこかに覚えのあるような気がする。……つむった眼の裏に母親のおもかげが浮んだ、九つの年に亡くなつた母の、いつも寝たり起きたりしていた病身らしい蒼白い顔——その母が自分を抱いて、背中を叩きながら唄つて呉れている。向う山に鳴く鳥は、ちゆうちゆう鳥かみい鳥か。おせんは切窓に倚よりかかつて両手で面おもてを掩おおいながら噎むせびあげた、外ではなお暫く松造の唄うこえが聞えていた。

その夜また泊つて明くる朝。松造は草鞋を穿いてから思いついたように、お常の風呂敷包にある物は使えたらおまえが使うがいいと云つた。それから、おせんのこととは亡くなつた勘十からも聞いていたし、こつちへ来て友助から聞いたこともある、いろいろ事情があるらしいが、自分はそれに就いてどんな意見も持つてはいない。だがお常がひき取つて世話をした、その氣持を亡くなつた者のために続けてやりたいのである。自分たちは三人兄妹であつたが、下の妹を火事であつたお常を水であつた、とうとう自分ひとりになつて

しまった。これも約束ごとというようなものだろうが、——そういう意味のことを溜息ためいきまじりに、ぶあいそな調子で述懐していった。おせんはつよい感動を与えられた、今までわからなかつた松造の気持がわかつたばかりではない、それは亡くなったお常の親切が続いているのである、正気を失くして道に飢えていた自分を拾い、飲み食い着る物の面倒をいとわず、丈夫になるまで親身に世話をして呉れた、その妹の気持を続けて呉れるというのだ。……友助夫妻に離れられ、お地藏さまの縁日の事があつてからは近所で口をきく者もない。自分はたつた独りだと思つていた。松造の親切もどこまで真実であるか、いつまで続くものはわからない、しかしとにかく今は自分の味方である、自分のためになにかをして呉れようとしている。どんなに世間あまたからみすてられても、生きていればやつぱり人間は独りではなかつた。——感動のあとの温かい気持で、世の中や人間同志のつながりのふしぎさを、おせんはしみじみと思ひめぐらすのであつた。

おせんの物を着ていつたまま、おもんはふつとりと姿をみせなくなつた。おせんは彼女の泥まみれの着物を洗つて干し、綻ほころびも縫いつくろつて置いた。自分の物が一枚なくなつたのは困るけれど、松造の云つたことを信じてよければお常の物が使えるので、そう慌てることはないと思つた。——おもんの来なくなつた代りのように、松造が六七日おいては

泊りに来た。自分の畑のものばかりでなく、問屋から頼まれて定期的に荷を入れることになったのだという。そしておせんにも必ず幾いろかの野菜と、米や麦などを持って来るのだった。相変らずぶすつとして、あまり口もきかず苺ばかりふかしている、ときに幸太郎を抱いたりしても、なにやらぶきようで自分で当惑するという風であった。……おせんはすなおにその親切を受けた、口にだしては礼もよく云わなかったが、彼のほうでも遠慮のない調子で着て来た物の縫いつくろいを頼んだり、喰べ物の好みなども云うようになった。近所の口がうるさくなつたのは当然であろう、おもんでさえ「旦那か」などと云つたくらいで、なにも知らぬ者からみればあたりまえの関係でないと思うのが自然である。しかし、おせんはもうびくともしなかつた、お地藏さまの前で受けたような辱しめはずかのあとでは、そんな蔭口や誹謗ひぼうくらいなんでもないことだ。それで気が済むのなら云いたいだけ云うがい、そういうった幾らか昂然こうぜんとした気持で、どの家の前をも臆せずに通つた。

花も見ずに三月も過ぎ、四月、五月と日が経つていった。松造との話で、七月の命日には勘十夫妻の供養をし、墓石へ名を入れようということになつていた。そのまえ三月の中旬ころに松造が友助から聞いて本所四つ目にある宗念寺そうねんじという寺を訪ね、そこに勘十の家の墓があるのを慥たしかめて来た。そのときいちおう経をあげ、夫妻の戒名をつけて貰つた

ので、おせんは古道具の店からではあるが小さな仏壇を買い、二人の戒名をおきめて、朝夕、水と線香を絶やさなかつたのである。——命日といつても死んだ日はつきりしないので、とにかく水の出た三日をその日ということにきめた。その前日の二日に、松造は妻のおいくと七つばかりになる女の子を伴れて来た。おいくは、背丈の低い固肥りの軀つきで、抜けあがつた額から頬が赤くてらてら光っていた。良人に似たものか、どうか、こちらで気まずくなるほどの無口だが、子供を叱るときは吃驚するほど邪見な早口で、しかもひそかにすばやく手足のどこかを捻ったりするようすは怖いようだった。……松造が自分のことをどう云つてあるか、またこれまでして貰っていることの礼を云つていいか、どうか、おせんにはちよつと見当がつきかねたので、向うが口をきかないのを幸い当らず触らずの挨拶をして済ませた。その夜は蚊遣りを焚きつきながら、狭いところへごたごたと寝て、明くる朝は日蔭のあるうちにと早くでかけた。友助夫妻にも案内をしたのだが、これは欠かせない用があるからと、なにがしかの香典を包んで断わりが来ていた。まだおせんのことにごだわつているのであろう、それにしてもあんなに親しかった古い友達の法会なのにと、おせんは亡くなつた人たちに済まなく思ったが、そこに気がついたかどうか、松造はただ「それではあとで送り膳でも届ければいい」と云つただけであつた。

両国橋の脇から舟に乗っていったが、明日は回向院えこういんの川施餓鬼かわせがきがあるそうで、たて川筋はどこでも精霊舟しょうろうふねを作るのに賑わっていた。舟というものに乗ったことのない幸太郎は、初めのうちさも恐ろしそうで、固くおせんに抱きついたままだったが、暫くするうちに馴れたとみえ、しきりに水を覗いたり、移り変る両岸の風物に興じたりしはじめた。

「こうぼ、あんよしないよ、こうぼ、えんちやよ、おうち動くよ、おうちみんな動くよ」

自分が坐っているのに家並の移動してみえるのがふしぎらしい、松造は珍しくにつと笑った。母親のそばに、きちんと坐っていた、お鶴つるという女の子は、それを聞いてそつと母親のほうへ口を寄せ、

「お家が動くんじゃないね、お舟が動くからそう見えるんだね、かあちゃん」

こう云った。おいくはするどい調子でよけいなことを云うんじゃないと叱りつけ、怒つてでもいるようにぐつとそつぽを向いた。

——この家族も単純ではない、おせんは溜息をつくような気持でそう思った。まだ初対面で深いことはわからないが、夫婦のあいだも親子のあいだももしかっくりいつていないようだ、良人であり妻であり子であるのに、それが一つにならないではらばらに離れている。どうかすると、他人よりも冷たいようすが感じられる、松造が自分に親切をつくして呉れ

るのも、そんなところに動機の一があるのではなからうか。……北辻橋きたつしはしで舟をあがるまで、おせんはそうして鬱陶しいもの思いにとらわれていた。

宗念寺で法会をしたあと、すぐ近くにある支度茶屋で早めの食事をした。まわりは青々とうちわたした稲田や林が多く、武家の下屋敷らしい建物が、ところどころにあるばかりで、どんな片田舎へ来たかと疑われるほど、鄙ひなびた景色であった。おせんにはもちろん、幸太郎はたいそうなよろこびようで、ねえたんねえたんとお鶴にまつわりついては、外へ遊びにつれてゆけとせがんだ。その茶屋の裏庭のすぐ向うにかなり大きな沼があり、そのまわりで子供たちが魚を掬すくって騒いでいる、幸太郎はそこへ行っていっしょに遊びたいらしい。おせんもそうさせてやりたかったのだが、松造は今日のうちに古河へ帰るといふことで、悠ゆうくり休むひまもなく立上った。

平右衛門町へ帰ったのは日盛りのいちばん暑い時刻だった。そして家へはいると、土間へ膝ひざをつき上り框がまちに凭れかかって、乞食のような姿でおもんが眠っていた。

六

それがいつかの女だと知ると、松造は入りかけた足を戻してこのまま帰ると云った。おいくの顔にも露骨な侮蔑ぶべつの色があらわれ、わざとらしく子供の手を取ってさつと先へ出ていった。まるでとりなしようもない、おせんは、やむなく夫婦の荷包を取って来て渡した。松造は紙にくるんだ物をおせんに与え、——贅おとしつたことはいらないからこれで友助のところへ送り膳を届けるように、また余ったのはその女にもやって早く出てゆかせるように、さもないと幸太郎のためにもよくないから、そういうことを低く囁ささやいて去っていった。

おもんは病氣にかかつていた。汗と垢あかとで寄りつけないほど臭い軀を、どうにか上へあげ、べとべとに汚れたぼろをぬがせて、ともかくも膚を拭いてやろうとしたが、余りに瘦やせ衰えたあさましい裸を見ると、おせんは総身にとりはだの立つほど慄りっせん然とした。呼吸は激しく、軀は火のような熱である。そして両の乳房はどちらもひしゃげて、どす黒い幾すじかの襞ひだになっていた。

「おせんちゃん、あんた見て呉れた」おもんはしゃがれた声でそう云った、「——ようよう家が持てたのよ、あんたに見て貰おうと思つて、……これでひと安心だわ、あんたも越して来なさいよ、いっしょに此処で暮そうじゃないの、ねえおせんちゃん、あたしもあんたも、ずいぶん苦勞したんだもの、いいかげんにもう楽になつてもいい頃よ、ねえ、この

家あんたに氣にいつて」

「ええ氣にいつたわ」おせんは自分の単衣ひとえを出して彼女の上へ掛けてやった、「——とてもいい家だわ、おもんちゃん、でも少しじつとしていてね、あたしいまお医者を呼んで来るから、動かないで待っているのよ」

おせんは幸太郎を負つてとびだした。

三軒たずねて断わられ、四軒めに佐野正さのしょうからの口添えで、駒形町こまがたまちの和泉杏順いずみきょうじゆんという医者が来て呉れた。診断は勞咳ろうがいということだった。それもひじょうに重くなつていたので、当分は絶対安静にしなければならぬ、話もさせてはならないと云われた。こちらの生活を察したもので、もし必要ならお救い小屋へ入れる手配をしてやつてよい、そう云つて呉れたので、そこへゆけば充分な治療がして貰えるのであろうかと訊いたが、病氣がここまで進んではどんな名医でも手のつけようがない、あとはただ静かに死ぬるようにしてやるばかりだという。それなら自分にとつてはたった一人の友達だから、ここで死ぬまでみとつてやりたいと思う。こう答えて医者を送り出した。

その月いっぱいおせんは満足に眠れない日を過した。もう高価な薬も、むだだというので、ふりだしのよな物を呉れるだけだったから、薬代やくだいはさしてかからなかつたが、幾

らかでも精のつくように卵とか鳥などを与えたいと思うので、毎日買ひ物をできるだけ詰めても、佐野正への借りが少しずつ殖えていった。

——松造は六七日おきぐらいに來たけれども、おもんの寝ているのを見ると、持って來た物を置いてすぐに帰っていった。あのときあのように云つたにしては、かくべつ機嫌を悪くしたようにもみえず、却って持つて來て呉れる物のなかに卵や胡麻や櫃かやの実などが殖えたくらいである。特に櫃の実は労咳にいいそうで、日に三粒ずつそのたびに焼いて、熱いうち食うようにと念を押ししたりした。……医者はいくばくもないように云つたけれども、八月にはいると熱も下り、食欲もついて、眼の色なども活き活きとしてきた。それまで話は禁じられていたし自分でもそれだけの元氣はなかつたらしいのが、少しずつ口をききはじめ、夜など寝つけないことがあると、静かな歌うような口ぶりでよく昔のことを話したがった。年月にすれば僅か三年あまりのことだけれど、あの火事のまえ、二人が仲良くお針の師匠の家へかよつていたじぶんのことは、十年も十五年も昔のようにしか思えないのである。

「お花さんていうひとがいたわねえ、髪あかの毛の赭あかい、おでこの、お饒舌しやべりばかりしていつもお師匠さんに叱られていた、——あのひとあんなにがらがらだし、齒を汚くなくしていた

んであたし嫌いだったけれど、いま思うと悪気のない可愛いひとだったのね」

「それからお喜多きたさんてひと覚えている、おせんちゃん、意地が悪いのと蔭口ばかりきくのでみんなに厭がられていたでしょう、あたしも、お弁当の中へ虫を入れられたことがあるわ、でも考えてみるとあのひと寂しかったんだわ、誰も親しくして呉れる者がないので、寂しいのと嫉ねたましいのであんな風になったのよ、あたしたちこそ思い遣りがなかったんだわね」

「おもとさんと絹さん、それからおようちゃん三人はお嫁にいったの、お絹さんは向う両国の佃煮屋つくだにやへいつて、去年だかもう赤ちゃんができたわ、——みんないい人ばかりだったわねえ、いつかみんなでいつペン会いたいわねえ、おせんちゃん」

そんな話しては軀に障るからと注意するのだが、すぐにまたひきいられるような口ぶりで語りだすのである。その頃には頬のあたりが肉づいてきたためだろう、色こそ悪いが以前の顔だちをとり戻して、まなざし言葉つきなど、あの頃の明るい人なつつこいおもんがそのまま感じられるようになった。——その調子でゆけば或いは全快したかもしれない、全快はしなかったにしても、そう急にいけなくなるようなことはなかったに違いない、しかしそれから間もなく思いがけない出来事が起こって、おもんは悲しい終りを遂げない

ればならなかった。

八月の十五日、月見のしたくに団子を拵えたあと、柳原堤へ行って供え物の芒すすきや、青柿などを買って帰る途中、同じ買い物帰りのおたかと偶然いっしょになった。挨拶しただけで別れようとする、という積りでかいっしょについて歩きだし、例のとおり気の好い話しぶりで、庄吉さんもこんど頭梁のところの婿むこになってめでたい、花嫁は家付きだけれど、年は十七で気だても優しく、縹緞も十人なみ以上だそうである、これであのひと苦勞のしがいがあつたというものだ。こういうことを問わず語りに云った。

「庄さんがお婿さんになつたんですって」おせんは半ばうわのそらで訊き返した、「——頭梁って、阿部川町の、住込みだつていうあの頭梁の家ですか」

「そうなんですつてよ、頭梁つてひとが庄吉さんの腕にすっかり惚れこんだんですつて、お加代かよつていう娘さんも庄吉さんが好きだつたつて話でね」

おせんはちよつと立停つた。しかしすぐ歩きだしながら、いま聞いた話がなにを意味するか考えてみた。うわのそらで聞いていたのである、もちろん言葉そのものはわかつているが、その意味は聞きながしていた。それはどうてい有り得ないことであつたから。

——が、おせんはとつぜん額から白くなり、おたかの腕を掴んで立停つた、おたかは吃

驚して声をあげた。

「庄さんが、お嫁を貰ったんですって」

「放してお呉れな、痛いじゃないかおせんちゃん」

「本当のこと云つて頂戴、本当のこと」

「痛いってば、ここをお放しよ」

「お願いよ、お婆さん」おせんは縋りつくように云つた、「——庄さんがお嫁を貰つたつて、嘘でしょう、ねえ、そんなことがある筈はないもの、嘘でしょうお婆さん、ねえ云つて、そんなことは嘘だつて」

「いつて自分で訊いてみれば、いいじゃないの、あたしは知つてることしか知つちやいないよ」

「そらごらんなさい嘘じゃないの」

こう云いながらおせんは歩きだした。きみ悪そうにおたかが去つていったことも、曲り角を通り越したことも知らず、茅町かやちようまで来てようやく我に返り、そこでお暫く棒立ちになつていた。そんなことは、有るわけがない、きつとなにかの間違ひである、どう考えても本当とは思えない——だつてあたしがいるじゃないの、あたしはちゃんと待ってい

たんだもの、そしてあんなに固く約束したんだもの、あたしを措おいて庄さんがお嫁をよそから貰うわけがないじゃないの。同じことを繰り返し思い耽ふけっていたが、やがてぼんやり立っている自分を人が見るのに気づき、慌あわてて引返して家へ帰った。

「おもんちゃん、あんた済まないけれどそのままでもうちよつと幸坊の相手になって呉れない、あたし急いでいって来るところがあるんだけれど」

「ええいいわよ、このとおり温おしな和なしく遊んでるわ」

「ここへ飴あめを出して置くからぐずつたらやつて頂戴、すぐ帰って来るわね」

「こつちは構あわないわよ、悠おくりいってらつしやいな」

おせんはそのまま家を出ていった。

七

森田町からはいって三味線堀についてゆくのが、阿部川町へはいちばん近い道である。秋とはいってもまだ日中は暑かった、乾いた道は照り返してきらきらと輝き、あるかなきかの風にも埃あが舞立つので、おせんの足は忽たちまち灰色になってしまった。なにか口のなかで

眩いている、ときどきそう気がついたけれども、なにを眩いているのか自分でもわからな
いし、頭が混乱して考えを纏めることもできない。ただ追われるような不安と苛立たしき、
息苦しいほどの激しく強い動悸だけが、今そこに自分の在ることを示しているような気持
だった。

頭梁は山形屋というのであった。家は寺町へぬける中通りの四つ角にあり、さして大き
くはないが総二階で、白壁に黒い腰羽目のがつちりした造りだった。大工の頭梁の家とい
うより、てがたい問屋の店という感じである。おせんはその前を眺めながら通った、それ
から十間ばかり先にあるかもじ屋へはいつて、油元結を買いながら、庄吉のことを訊いた。
店にいた老婆は少し耳が遠いようだったが、訊かれたことがわかると舌つたるい口でくど
くど話した。おたかの云ったことは嘘ではなかったのである、庄吉は気性と腕をみこ
まれて山形屋の婿養子になった、六月の十幾日とかに祝言もして、夫婦仲も羨ましいとい
うことであつた。

「お加代さんも評判むすめだったけれどねえおまえさん、お婿さんもそれあよく出来たひ
とで、腕はいいしおまえさん、腰は低いしねえ、なにしろちよつとのま来ているうちに、
職人衆みんなから、兄哥あにいつて立てられるしき、あたしみたいな者にもおまえさん、

道で会うと向うから声をかけて呉れて——」

おせんはそこを出て、ちよつと考えたのち、戻つて四つ角を左へ曲り、みかけた筆屋へはいつてまた同じことを訊いた。そのあとでさらに二軒ばかり訊いたらしい。——幾たび訊いても事実に変りはなかつたが、おせんにはどうしても信じられないのである。

——だってあたしという者がいるじやないの、きつと待っていて呉れて、庄さんが自分の口からはつきり云つたじやないの。

そして自分は待つていた。今でもこのとおりちやんと待つていてはないか、それなのにほかのひとを嫁に貰う筈があるだろうか。いやそんな筈は決してない、庄さんに限つてそんなひどいことをする氣遣いはない、どこかでなにかが間違つてゐるんだ、その間違いをうつちやつておいてはたいへんなことになる。そういう氣持で飽きずに訊きまわつたのだ。——家へ歸つたのは日の傾いたじぶんで、幸太郎がひどく泣いていた。おもんは床の上に起き、あやし疲れたのだろう、前に玩具を並べたまま途方にくれたような顔をしていた。おせんは氣ぬけのした者のように、おもんにはろくろくものも云わず、すぐに幸太郎を負つて夕餉のしたくを始めた。

「おせんちゃんごめんなさいね、幸ちゃん泣かせて悪かつたわ」夕飯のときおもんはこう

云った。

「——ずいぶんだましたんだけれど、しまいにはああちゃんあちゃんって追ってきかないのよ、頼まれがいもなくって済まなかつたわ」

「なんでもないのよ、そばにくつついてばかりいたから……」

無表情にこう答えたまま、おせんは黙って箸^{はし}を動かしていた。いつもと人が違つたようである。顔色も悪いし眼が異様に光っていた。食事のあととぼんとして、おもんが注意するまで月見の飾りも忘れていた。

「あんたどこか悪いんじゃないかと、おせんちゃん、それともなにか厭なことでもあつたの」

「どうして、——あたしなんでもないわよ」

そう云つて振返る眼が、おもんを見るのではなくずっと遠いところをみつめるような眼つきだった。あんまりおかしいので、寝るときもういちど訊いてみた、するとおせんは眉をしかめながら突つ放すようにこう云つた。

「お願いだから黙つててよ、それでなくつても頭がくちやくちやなんだから」

そして夜中に幾たびも寝言を云つた。

明くる日、朝の食事が終るとすぐ、あと片付けもせずにおせんは出ていった。石のように硬い顔つきで、幸太郎を負って、——帰ったのはうす暗くなってからだった。よほどなが歩きをした者のように、足から裾まで埃だらけになり、帰るといきなり上り框へ腰掛けたまま、暫くはなにをする力もないというようすだった、幸太郎は首のもげそうな恰好で、くたくたになって背中であぐらで眠っていた。……翌日も、その翌日も同じことが続いた。なにをしにどこへゆくかは知らなかったが、おもんは幸太郎が可愛そうになつたので、自分がみるから置いてゆくようにと云つた。するとおせんはすなおに置いていった。

「今日はすぐ帰るわね、もうあらまし用は済んでいるんだから、今日は早く帰つて来るわ」
そんな風に云つてゆくが、やつぱり帰るのは夕方になつた。あとから考えてみるのに、そのじぶんもうおせんは普通ではなかつたのである。いかに信じまいとしても、庄吉の結婚が事実だということ、山形屋の婿としてすでに六十日あまりも幸福に暮していることはつきりし始めた。——いいえ嘘だ、そんなことがある道理がない。こう思うあとから事實はますます慥かに、いよいよ動かし難くなるばかりだった。それはおせんを搾木しめぎにかけ、火にのせて炙るのに似ていた。明らかに、おせんの頭にはもう変調が起こつていた、あの火事のあとに患つた自意識の喪失、精神的の虚脱状態が始まつていたのである。……毎日

かよい続けて七日めかの昏れ方のことだ、いつものように山形屋のまわりを歩いていると、寺町のほうから来る庄吉に出会った。法事にでもいつて来たものか、無地の紋の付いた着物で袴はかまをはいていた、そばに若い女がいつしよだった、まだ、むすめむすめした、小柄の愛くるしい顔だちで、眉の剃跡そりあとの青いのがいかにも初妻にいづまという感じである。おそらくそれが加代というひとであろう。庄吉になにか云つて微笑するのを、おせんははつきりと見た。匂やかに、ややなまめいた微笑であつた、柔らかそうな唇のあいだから黒く染めた歯のちらと覗くのを、おせんは痛いほどはつきりと見たのである。——二人はおせんの前を通つていった、庄吉は眼も動かさなかつた、そこにいるのが木か石でもあるように、まったく無関心に通り返りすぎ、やがて山形屋の格子戸の中へはいつていった。

「——庄さん、……庄さん」

おせんは口のなかでそつと呟いた。それからふらふらと寺町のほうへ歩きだした、——苦しい、頭が灼かれるようである、非常に重い物で前後から胸を押しつぶされそうだ。

「——庄さん、……庄さん」

とつぜんおせんは立停つて、道のまん中へ跣んで嘔吐おうとした。眼のまえが暗くなり、地面が波のように揺れだした。——あれはお嫁さんだわ。嘔吐しながらそんなことを思った。

あのひとが庄さんの嫁である、いま自分の見たあのひとが庄さんの嫁である、いま自分の見たあのひとが庄さんと御夫婦になったのである、庄さんはあのひとと仕合せに暮しているのだ。……誰かがそばでなにか云っている、どうやら自分を介抱して呉れているらしい。立たなければならぬ。立つて家へ帰らなければ。——おせんは立上った、そしてまたふらふらと歩きだした。耳の中でごうごうと、大きな音がし始めた、赤い恐ろしい焰ほのおが見える、街並の家がそこにちやんと見えているのにそれとは別に眩まぶしいような火焰ほのおがそこらいちめんに拡がってみえる、喉のどを焦こがすような、熱い噎おどつぽい煙の渦、髪の毛から青い火をたてながら、焰の中へとびこんでゆく女の姿、……そして巨大な釜戸かまどの咆ほえるような、凄すさましい火の音をとおして、訴え嘆くようなあの声が聞えてきた。

——おせんちゃん、おらあ辛かった、おらあ苦しかった、本当におらあ苦しかったぜ。

おせんは悲鳴をあげながら道の上へ倒れた。

自分ではもちろん覚えがない。東本願寺の角のところ倒れたのを、いちど番所へ担かぎこまれたが、そこに佐野正へ出入りする人がいて、これは足袋屋の仕事をしている者だと知らせて呉れた。それから佐野正の店の者が来て、医者も呼んだらしい、少しおちつくのを待つて平右衛門町まで送つて呉れたのだそうである。しかしそれらのことはもとより、

それからのち半月ばかりの明け昏れは、まったく夢のようで記憶がなかった。その期間はずべて幻視と幻聴で占められていた。なかでも鮮やかなのはあの訴えの声であつて、それだけは意識が恢復かいふくしてからも、一語一語がはつきりと耳に遺つていた。

そういう状態であつたから煮炊きも出来なかつた。幸太郎の世話だけはするけれども、敷いてやらなければ夜具を出す気もつかず、眠くなると平気でごろ寝をしたという。またそのあいだに松造が二度来たけれども、おせんは氣違ひのように地だんだを踏み、庄さんに疑われるから帰れと叫んできかなかつた。松造は、しかたなしに持つて来た物を置き、なお幾らかの錢を預けて歸つたそうである。——こうして前後二十日ほどのあいだ、おもんが起きてすべてをひきうけた、食事はもとより、買い物にもゆき洗濯もした。ゆだんしている、おせんは夜中にも外へ出る、おちおち眠ることも出来なかつたということだつた。

九月になつて袷あわせを着てから間もなく、おもんが幸太郎の肌着を洗っていると、おせんがぼんやり近寄つて来て、今日はなん日だろうかと訊いた。

「今日は十一日、あさつてはお月見よ」

「——そう、九月なのね」

こう云つたと思うと、おせん的眼から涙がぼろぼろ落ちた。おもんが驚いて、どうしたのかと立上ると、おせんは手を振りながらおちついた声で云つた。

「いいのいいの、心配しないで頂戴、あたしよくなつたのよ」

「——おせんちゃん」

「二三日まえから少しずつはつきりしだしていたの、まだ本当じゃないかと思つてたんだけれど……今日はもう大丈夫だわ、まえにやったことがあるからわかるの、もう大丈夫よ、ながいこと世話をかけて済まなかつたわねえ」

「あたしなんにもしやしなくつてよ、それより具合がいいのはなによりだから、もう少し暢気のんきにしているんだわね」

「いいえもう本当にいいの、あたしのは病氣じやないとこのまえのでわかつているんだから、あんたこそ休んで頂戴、折角もちなおしたのにまた悪くでもなつたら申しわけがないわ、おもんちゃん、さあ、あたしと代つてよ」

九月十三日は後の月である。その夜、おもとと幸太郎が熟睡するのを待つて、おせんはそつと家をぬけだした。高いうろこ雲が月を隠していた。もう夜半を過ぎた時刻で、どの家も暗く雨戸を閉ざし、ほのかに明るい空の下でしんと寝しずまっていた。おせんは柳河岸へいった。地藏堂より少し下の、神田川のおち口に近い河岸へ、——そこは、あの火事の夜、お祖父さんや幸太と火をよけていた場所である。あのときは石置場であつたが、今はとりはらつてなにもなく、岸に沿つて新しく柳が植えられていた。……おせんはあのときのあの場所へいつて踏み回想のなかへ身をしずめるようにそのまわりを眺めまわした。そこに石が積んであつたのだ、今ついそこの眼のまえにある石垣につかまつて川の中へはいった、石垣の端のその石へつかまつていたのである——ひき潮どきなのだろう、明るい空の雲をうつして、川波は岸を洗いながらかなり早く流れていた。

おせんは眼をつむり、両手で顔を掩いながらじつとあの声を聞こうとした。幾たびも幻聴にあらわれ、今では言葉のはしから声の抑揚まで思いだすことのできるあの声を。——おれはおまえが欲しかった、その声はこう云いだす。ごうごうと焰の咆え狂うなかで、おせんのおまへに踏み、その耳へ囁くように云うのである。

——おまえなしには生きている張合もないほど、おれはおせんちゃん欲しかった。十

七の夏から五年、おれはどんなに苦しい日を送ったかしのれない、おまえはおれを好いては呉れない、それでも逢いにゆかずにはいられなかった、いつかは好きになって呉れるかもしれないと思つて。

——だがどうとう、もう来て呉れるなど云われてしまったつけ、……そう云われたときの気持がどんなに苦しかったか、おせんちゃんおまえにはわかるまい、おれは苦しかった、息もつけないほど苦しかった、……おせんちゃん、おれは本当に苦しかったぜ。

おせんは喉を絞るように噎びあげた。

「幸太さんわかつてよ、あんたがどんなに苦しかったか、あたしには、今ようくわかつてよ」

今はすべてが明らかにわかる、自分を本当に愛して呉れたのは幸太であった。少年の頃から向う氣のつよい性質で、そぶりも言葉つきもぶつきらぼうだった。もの詣もでとか芝居見物にゆくとかすると、必ずおせんになにかしら土産を買つて来るが、それを呉れるときには「ほら取んな」などと云つて、わざと乱暴にふるまうのが常だった。せつかく呉れるのならもう少しやさしく云つて呉れたらいいのに、そう思いながらおせんのほうでも、なにか頼むことがあるべきつと幸太に頼んでいた。そしてどんな詰らない頼みでも、彼は必

ず頼んだ以上のことをして呉れたではないか、——お祖父さんに寝つかれてからのゆき届いた心づくし、こちらは嬉しそうな顔もせず、しまいには来て呉れるな、ときえ云った、男にとつては耐え難いあいそづかしだったろう。だが火事の夜はそんなことも忘れたように駆けつけて来て、お祖父さんを負って逃げて呉れた。あの恐ろしい火のなかで、おまえだけは死なせはしないきつと助けてみせると云い、云ったとおりおせんを助けたが、自分は死んでいった。……思い返すまでもない、これらのことはすべてひと筋につながっている、初めから終りまでひと筋に、おせんを愛しているというただひと筋のおもいにつながっているのである。

これだけ深くつよい幸太の愛を、どうして自分は拒みとおしたのであろう。云うまでもなく自分が庄吉から愛されていたからだ、自分も庄吉を愛していたからである。しかし本当に庄吉と自分とは愛し合っていたのだろうか、いったい庄吉と自分とのあいだにどれだけのことがあつたらう。自分が彼に同情していたことは慥かだ、特に幸太が杉田屋の養子になつてから、悄然とした彼のようにすには同情を唆られた。けれどもそれは決して愛ではなかつた。彼が大阪へゆくまえにおせんを柳河岸へ呼びだして、帰って来るまで待つて呉れと、思いもかけぬことを囁かれたとき、ええ待つていますと答えたのも、そういう

ことに疎い十七という年の若さと、それまでの同情にさそわれなれば夢中のことだつたではないか。——庄吉が去つてしまつてから、いやいや、もつとはつきり思ひだせば大阪から彼の手紙が来てから、その手紙を読んでから初めて自分は、彼を愛したのである。どんなことがあつても待つていようと決心したのもそれからだ、彼は幸太が云い寄るに違ひないと云い遣した、だからおせんはどこまでも幸太を拒みとおした。杉田屋へも義理の悪いことをし、幸太の親切も断わり、病気で倒れたお祖父さんを抱えて、乏しい手内職で生きていたではないか。……もちろんそれは彼を愛していたからである、庄吉が自分を愛し自分が庄吉を愛していると信じたからである、けれど庄吉は本当に自分を愛していたのだろうか、たまたま悪い条件が重なつて、解けにくい誤解がうまれたのは事実だ、しかしそれはどこまでも誤解である、彼の疑うようなことはまったく無かつた、自分は待つて呉れと云つたではないか、いつかきつと本当のことがわかる筈だ、待つていますよと云つたではないか。——だが庄吉は待つて呉れなかつた、眼と鼻のさきについて結婚した、りっぱな頭梁の婿になり可愛い娘を嫁にした、それは同時に、おせんがいたずら女であることを証明する結果になるのに、……それでも彼はおせんを愛していたのだろうか、それがおせんに、あれほどの代償を払わせた愛だつたのだろうか。

「よくわかるわ、幸太さん、あなたは本当におせんを想って呉れたのね、——庄さんがお嫁さんと歩いているのを見たとき、あたしからだ軀をずたずたにされるような気持だったの、苦しくって苦しくって息もつけなかった、……胸が潰つぶれてしまいそうな苦しい辛い気持だったわ、幸太さん、あなたの云って呉れたことが、そのときはじめてわかったのよ、——あなたの苦しいといった気持が、辛かったと云った気持がどんなものだったか、そのときはじめてあたしにわかったのよ」

おせんは噓びあげながらそう云った。高く高く、月を孕はらんだ雲の表を渡る鳥があった。なにか秘めごとでも囁くように、岸を洗う水の音が微かすかに聞えていた。

「かんにんして頂戴、幸太さん、あたしが悪かった、あたしがばかだったのよ、——庄さんにあんなことを云われるまで、あたしあなたが好きだったと思うの、だってあなたには遠慮なしに話ができだし、ずいぶん失礼なことも頼んだりしたじゃないの、あなたならなにを頼んでもして貰える、頼んだ以上のことがして貰えるって、ちゃんと知っていたんだわ、……幸太さん、あんなことさえなければ、おせんはあなたの嫁になっていたかもしれないわね、杉田屋さんのおじさんもおばさんもそのお積りだったんですもの、そうすればいまごろは……」

おせんの声は激しい嗚咽おえつのためにとぎれた、それからやや暫くして次のように続けられた、

「——たった一言、あの河岸の柳の下で聞いたたった一言のために、なにもかもが違ってしまった、なにもかもが取返しつかないほうへ曲ってしまったのよ、あなたは死んでしまい、おせんはこんなみじめなことになって、そうして初めてわかった、なにが真実だったかということ、ほんとうの愛がどんなものかということが、……幸太さん、それでもあたしうれしい、あなたにはお詫わびのしようもないけれど、あれほど深く、幸太さんに愛して貰ったということ、それがこんなにはつきりよくわかったことがうれしいの、——あたしうれしいのよ、幸太さん、いま考えるとあの晩ひろった子に幸太郎という名がついたのもふしぎではなかったのね、あの子は幸太さんとおせんの子だわ、あたし今から誰にでも云ってやってよ、おせんは幸太さんと夫婦だったって、この子は幸太さんとあたしの子だって、……怒らないわねえ、幸太さん」

そこにその人がいるかのように、おせんはこう云いながらまたひとしきり泣いた。眼のまへの仄ほのあか明るい川波の中から、幸太がうかびあがってこっちへ来るようだ、ぶつきらばうなようすで、しかしかなしいほど愛情のこもった眼で、おせんをみつめながら、——そ

うだ、幸太とおせんとは今こそ結びつくことができる、そしてもう二度と離れることはないだろう。おせんの嗚咽はなお暫く続いていた。

その翌朝おもんは血を吐いた。柳河岸から帰ったおせんがなかなか寝つかれず、明け方の光がさしはじめて、ようやくまどろみかけたときのことだ、異様な声でとつぜん呼び起こして、半挿はんぞうに三分の一も吐き、そのまま失神してしまった。もちろん二十余日の過勞が祟つたのである、——医者はすぐに来て呉れたが、どう手の出しようもなかったし、むしろそうなるのが当然だという態度で、二三の手当となにやら知れぬ粉薬を置いて帰った。おもんは二度と起きられない病床にいたのであった。

九

松造が来て八百屋の店を出さないかとすすめたのは、おもんが倒れて十日ほどのことであつた。考えるまでもなく、重い病人を抱えてそんなことは出来ない、いずれおちついてからと云つて断わつた。——おもんはそれから三十日あまり寝て亡くなった、病氣してからひとがらの変つたおもんは、顔つきも穏やかに美しくなり、いつも眼や唇のあたり

に微笑をうかべていた。

「あたしは任せだわ、おせんちゃん、本当ならどこかの空地か草原でも死ぬところだのに、仲良しのあなたに介抱されて、わがままの云いたいだけ云って死ぬるんだもの、考えると勿体もったいなくて罰ばちが当るような気がするわ」

そんな風にしみじみと繰り返して云った。少しも誇張のない、すなおな諦めあきらのこもった調子である。——死ぬなどと云ってはいけない、治つて貰おうと思えばこそ出来ないながらしてあげるの、石にかじりついても治つて呉れなければ。おせんがそう云うと、きれいに澄んだ眼で頷うなずきはするが、心ではもう自分の死ぬこと、それは間もなくだということを知っていたようである。

「わたしがいぶん苦労したわ、思いだすと今でも身ぶるいの出るような、苦しい、みじめなことがあったわ、——でもこれでようやくおしまになるの、死ぬことは楽になることだわ、あの世というところは静かで、いつもきれいな光があたりを照らし、いろいろな花がいつぱい咲いているように思うの、そこへゆけばもう憎むたむことも騙だますこともない、なにもかも忘れて悠くり休むことが出来る、決してもう苦しんだり悲しんだりすることは無いの、……あなたにわかるかしら、おせんちゃん、あたし待ち遠しいくらいなのよ」

おもんが亡くなつたのは十月下旬の、すさまじく野分の吹きわたる夜だった。彼女はおせんを枕まくらもと許もとに坐らせ、その手を握つて、じつとなにかを待つようにみえた。

「あたしおせんちゃんを護つていてよ、おせんちゃんと幸坊が仕合せになるように、あの世からきつと護つていてよ、——お世話になつて済まなかつたわね、ごめんさいね」

風は雨戸を揺すり屋根を叩いた。おもんは暫くしてふつと眼をあき、戸口のほうを見やりながらはつきりと云つた。

「表をあけてよ、おせんちゃん、誰かあたしを迎えに来ているじやないの」

それから半刻はんとときほどのちにおもんは死んだ。

振返つてみるとそのときからおせんの新しい日が始まつているようだ。おもんの葬いを済ましてから後のおせんは、もうそのまえの彼女ではなかつた。世を憚はばかつたり怖おそれたりするいじけた気持もなくなり、「生きよう」という心の張とちからが出てきた。——なに怖れたり憚ることがあろう、こんどは誰に向つてもはつきり云えるのだ、ええこの子はあたしの産んだ子です。この子の父親は幸太というひとです、あたしは良人の遺したこの子をりっぱに育ててみせます。……そうだ、おせんの新しい日はそこから始まつたのである。その年の暮にせまつてから、松造の好意をうけて八百屋の店をひらいた。まえにも云つた

ようなわけで近所とはつきあいがないから、そんな店を出しても商売にはなるまいと云つたが、松造は例のぶあいそな口ぶりで、なによその半値で売れば必ずお客がつく、近所の者より隣り町から買いに来るからやつてみるがいい。こう云つてすすめた。家の表を作り変えて店にし、古河から十五になる小僧もつれて来て呉れた。古い車を一台、籠を五つ、^{ばかり}秤だの帳面だの筆矢立など、こまごました物もすべて松造が心配した。荷のほうは千住の問屋に話してあるので、小僧がゆけばその日その日の物を揃^{そろ}えて呉れる、値段も松造との取引をみかえりに元値ということになった。これはのちに問屋の主人がおせんの身の上を聞いてから、さらに好い条件になったのであるが。——心配したほどではなく商売はうまくいった、元の値が値であるのと、初めのうち松造が付いていて思いきり安く売るようにしたため、新店は半月繁昌といわれているに拘^{かかわ}らず、客足はずっと続いて離れなかった。近所の人たちもさいしょのうちこそ妙な顔をしていたが、八百屋物は毎日のことであるし、切詰めた生活をしている者には一文でも安いということは、大きいので、ひとり来、ふたり来するうちに、いつかしらいまわりの者はたいがい客になつてしまった。その中でお勘だけは別であった、お地蔵さまの縁日のことがあつてから、お勘は町内を背負つて立つようにおせんの悪口を云いちらしていたが、おせんの店の安いことを聞くとまっ先にやつて

来たのも彼女であった。そして五六たびも来たと思うと、いちどきに店の荷を半分も買つてゆこうとした、彼女の良人は舟八百屋をしているが、おせんの店のほうが問屋で卸すより安いので、こつちから買つて商売をしようという積りである。気の毒ではあるがおせんは断わつた。——こんな売り方をしてるのは一人でもよけいに安く買つて貰いたいからである、又売りをされるためではないのだから、はつきりそう云つた。お勘はそれなり寄りつかず、もつとひどい悪口を云いまわつたらしいが、どうやらこんどは近所が相手にしなくなつたようであつた。

店が順調になると松造はまた五六日おきにしか来なくなつた。相変らずぶすつとした顔で蓬臭い^{よもぎ}蓑^{たばし}をふかし、怖いような眼で家の中を眺めまわしたり、おせんの付けている絵解きのような帳面を退屈そうにめくつてみたりする。ごく稀^{まれ}には幸太郎をつれて、浅草寺などへゆくこともあつたが、ひと晩泊るときまつて朝早く帰つていった。——古河から来た小僧の云うところによると、松造夫婦は気が合わず、お鶴というあの子は親類から貰つたのだそうで、それがまたどうしても夫婦になつかなかったため、そのうち親元へ返すことにならう。そういう話であつた。……おせんはいつかの法事のときを思いだした、おいくという人の冷たいそつけないようすや、女の子の寂しそうな顔つきには、そういう蔭の理

由があつたのである。誰が悪いのでもなく不運なめぐりあわせだろうが、世の中にちょうど善いということは少ないものだ、いつとき溜息をつくような気持であつた。

店をはじめた明くる年の春の彼岸に、宗念寺へ墓まいりにいったとき、別にきょうりょう経料を納めてお祖父さんと幸太の戒名をつけて貰つた。そして位牌いはいを二つ拵こしらえ、幸太のには彼の戒名に並べて自分の俗名を朱で入れた。自分のも戒名にすればよいのだが、いつそおせんと入れるほうが情が届くように思えたからである。——こうして時が経つていった。變つた事といえば、飛脚屋のごんじろう権二郎が酒のうへの喧嘩けんかで人を斬り、牢ろうへはいつて一年ばかりするうちに牢死したということ、友助夫婦が梶平のあと押しで、本所のほうへ小さな材木屋を始めたこと、そして浅草橋の川下に新しく橋が架けられ、柳やなぎばし橋と名付けられたことくらいのものであろう。柳橋はあの火事のあとで地元から願ひ出ていたのが、ようやく許しが下つて出来たわけで、渡り初めから三日のあいだ祭りのような祝いが催された。…その祝いの三日めのことである、店を早くしまつて、幸太郎に小僧をつけて出してやり、自分も新しい橋を見にゆくつもりで、着替えをしていると客が来た。土間が暗くなつていたのでちよつとわからなかつたが、立つていってみると庄吉であつた。

「ひとこと詫びが云いたくつて来たんだ」

彼は、こう云つて、こちらを見上げた。一年まえに、見たきりだが、彼はあのときより少し肥り、酒を飲んでいるのだろう、顔が赭あかく膏あぶらぎつていた。おせんは、平気で彼を眺めることができた。ふしぎなくらい感情が動かなかつた、そうしたいと思えば笑うこともできそうであつた。

「あたしこれから出るところですけれど」

「ひとことでいいんだ、おせんさん」庄吉は慌てた口つきで云つた、「——おれは去年の暮に水戸へいつてきた、杉田屋の頭梁が亡くなつたんでね」

「杉田屋のおじさんが、——おじさんが亡くなつたんですって、……」

「いまいる山形屋とは手紙の遣り取りが続いていたんだ、それでおれが名代みよくだいでくやみにいつて来たんだが火事のととき傷めた腰が治らず、その骨から余病が出て、とうとういけなくなつたということだ」

「お婆さんは、お蝶お婆さんは」

「お神かみさんは達者でおいでなすつた、ひと晩いろいろ話をしたが、その話で、——すつかりわかつたんだよ、すつかり、……幸太とおせんさんとなんでもなかつたつていうことが、おまえが幸太をしまいまで嫌いぬいていたということが、お神さんの話でよくわかつた

んだ、おせんさん」

「いいえ違うわ、それは違つてますよ」

「——違つて、なにがどう違うんだ」

「お神さんの云うことがよ、お神さんはなにも御存じないんだわ、幸さんとあたしがなんでもなかったなんて」おせんは声をたてて笑つた、「——そんなこと貴方あなたほんとなさるんですか」

「——おせんさん」

「いつか貴方の云つたとおりよ、あたし幸さんとわけがあつたの、あの子は幸さんとあたしのあいだに出来た子だわ、もしも証拠をごらんになりたければ、ごらんに入れるからあがつて下さい」

こう云つておせんは部屋の隅へいった。仏壇をあけて燈明をつけ、香をあげて振返つた。庄吉はあがつて来た、そして示されるままに仏壇の中を見た。

「それが幸さんの位牌です、そばに並べて朱で入れてある名を読んで下さいな、おせんと書いてあるでしょう、——戒名だけで疑わしければ裏をごらん下さいまし、俗名幸太とあのひとのも書いてありますから」

庄吉はなにも云わずに頭を垂れ、肩をすぼめるようにして出ていった。——おせんは独りになると、位牌をじつとみつめながら、小さな低いこえで囁いた。

「これでいいわね、幸さん、お蝶おばさんにだつて悪くはないわね、——これでようやく、はつきり幸さんと御夫婦になつたような気持よ、あんたもそう思つて呉れるわね、幸さん」
まぶた
瞼の裏が熱くなり涙が溢れてきた、ぼうとかすみだした燈明の光のかなたに、幸太の顔が頷いている、よしよしそれで結構、そういう声まで聞えてくるようだ。——柳橋の祝いに集まる人たちだろう、表は浮き立つようなざわめきで賑わっていた。

青空文庫情報

底本：「山本周五郎全集第二巻 日本婦道記・柳橋物語」新潮社

1981（昭和56）年9月15日発行

1981（昭和56）年10月25日2刷

初出：前編「椿 創刊号」山本周五郎一人雑誌

1946（昭和21）年7月

中・後編「新青年」

1949（昭和24）年1月～3月

入力：特定非営利活動法人はるかぜ

校正：Butami

2020年5月27日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<https://www.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

柳橋物語

山本周五郎

2020年 7月18日 初版

奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>